

320

108



始



エトA61

120-108

柔術教科書序

十八般の武藝は皆物具を要す獨り柔術に至ては
一具の用なく赤手以て不慮の難に備ふるに足る
要するに武術は一身の護りたりと雖も之を大に
しては一國の護りたり輓近武士道衰頽し又昔日
の如くならず奢侈遊惰の潮流滔々として濫亂し
殆んど底止する處を知らず豈長大息の至ならず
や井口氏茲に憾あり以て此書を編す世の青年子

大正

1.10.16.

内交

弟業務の餘暇之を試み朝に習ひ夕に復し勤むるの精に至らば斯道の妙處を會得せんこと一點の疑を容れず請ふ許多の青年輩此書に依て柔道の正路を蹈み其身體を健全にし局面一轉尙武の氣風を旺盛ならしめんことを茲に一言を記して以て序と爲す

大正元年十月上旬

北 雷 狂 夫 識

自 序

柳枝の風に靡くも折るゝこと無きは柔能く剛を制するの理にして柔の奥儀も亦茲に基く故に柔道を學ぶ者は須らく虚心平氣以て自然の理に従ひ日新の工風を最も肝要とすべし予曩に吉田千春久富鐵太郎齋藤明信等の先生と謀りし事の柔術劍道に關する書數部を編し青年輩の獨學に便す頃日又諸彦より亂捕法の書の著あらんことを望まるゝや切なり然れども予歲既に耳順に達し燈下書を編するに

懶し辭するに若かずと已にして思へらく余命幾許も無しと雖ども豈碌々として死を俟たん宜しく己れの知得せるものを他人に示さば鈍刀亦一割の功なからんやと茲に於て講道館及諸先生と謀り其術は新を撰み實を取り其説明は煩を避け簡を旨とし俗談平話一に會得し易からんことを要とし以て此書を編す請ふ看官坊間に流布せる似而非的武術書と一様の觀を爲すなからんことを

次序

今回予が著す處の柔術教科書は本年議會に專習科に加へられたるを以て今之に順序を立て初心の輩に示し更に亂捕の形を斯道熱心者の爲に手を以て教ふる如く圖畫を加へて説明し又呼吸術より殺活方をも圖解にし中學校以上の學生其他の青年輩の爲め實地經驗の上にて梓に上し以て参考書とすされば各流派はあれども皆大同小異なるを以て柔道の概略は此書によりて會得すべし尙又茲に洩れたるものは他日教師用の書として之を著し又諸流の形の書とも併せて發行せんと欲す本篇既に云ふ如く斯道の名人上手は漸々に故人となり古來の武術は殆んど有名無實に流れ各流祖の功勞も將に消滅に歸せんとするは實に遺憾のことといふべし又古へより一子相傳の極意と稱し秘して人に傳へず徒らに舊習を墨守せる者も亦なきにしも非らず是等は啻に時世に背くのみならず國家に忠ならざるもの也今や舊習一洗十八般の

武藝の奥秘を明々白白々説明し滿天下の青年輩をして武術の何たるを解さしめ其體力を壯健にし皇國特有の日本魂を益々發揮し一等國の名に背かざらんことを期し併せて各流祖の功勞に報はずんばあらず頃日德島縣川口郡柿原村松下某より關口流の秘訣古書を寄送されたるを本とし各流秘術の寄書を合し不日世間に紹介の勞を取らんと欲す

大正元年十月

免許義爲識

活法柔術教科書目次

| | | | |
|----------------|----|------------------|----|
| 柔術の起源 | 一 | 沈着を守る事 | 一八 |
| 柔術大意 | 二 | 眼の配りの事 | 一九 |
| 柔能く剛を制するの理由 | 三 | 掛聲を大切とする事 | 二〇 |
| 柔術の形を學ぶを必要とする事 | 四 | 殘心放心と云ふ事 | 二〇 |
| 武藝進歩に付三妻の心得 | 六 | 他流試合の心得の事 | 二一 |
| 術を學ぶの心得 | 八 | 稽古に相手を忌み嫌ふ事 | 二二 |
| 氣の滿つる事 | 九 | 強情は武藝の大惡と云ふ事 | 二四 |
| 氣と體との事 | 一一 | 稽古前後の心得 | 二四 |
| 弱身強壯に成るは柔術にあり | 一二 | 精神と態度の事 | 二五 |
| 武術に免許皆傳と云ふ事 | 一三 | 同解 | 二六 |
| 一心と云ふ事 | 一四 | 陰陽強弱之説及一身の心を論ずる事 | 三〇 |
| 無我無心の位の事 | 一五 | 心の割出五系の圖解の事 | 三一 |
| 不動心の位の事 | 一六 | 道場及勝負見所の事 | 三三 |
| 膽力を練磨する事 | 一七 | 體育より柔術に進むの心得 | 三四 |
| | | 舊式稽古衣の圖解 | 三六 |
| | | 新式稽古衣圖解 | 三六 |

柔術教科書

目次

| 柔術教科書 | |
|-------------|----|
| 體育體操法第一圖解 | 四〇 |
| 同第二圖解 | 四一 |
| 同第三圖解 | 四三 |
| 柔術打込の圖解 | 四四 |
| 柔術片手受の圖解 | 四五 |
| 同兩手受留の圖解 | 四七 |
| 柔術霞打込の圖解 | 四八 |
| 柔術突掛の圖解 | 五〇 |
| 同向へ返り第一圖解 | 五二 |
| 同第二圖解 | 五二 |
| 同第三圖解 | 五九 |
| 柔術逆立の稽古第一圖解 | 五九 |
| 同第二圖解 | 六〇 |
| 同第三圖解 | 六二 |
| 柔術車返り第一圖解 | 六三 |
| 同第二圖解 | 六五 |
| 同第三圖解 | 六七 |
| 柔術飛上り稽古圖解 | 六八 |
| 同第二圖解 | 六九 |
| 柔術真之位第一圖解 | 七一 |
| 同第二圖解 | 七二 |
| 同第三圖解 | 七四 |
| 同第四圖解 | 七五 |
| 同第五圖解 | 七六 |
| 右襟の取り様の圖解 | 七八 |
| 同逆の圖解 | 七八 |
| 左襟の取り様の圖解 | 七八 |
| 同逆の圖解 | 七九 |
| 帯捉み處の圖解 | 七九 |
| 同逆捉みの圖解 | 八〇 |
| 喉締の圖解 | 八〇 |
| 亂捕體式立合の圖解 | 八〇 |

| 柔術教科書 | |
|------------|-----|
| 雙方立ち上り圖解 | 八四 |
| 襟取り居る圖 | 八四 |
| 柔術足拂の圖解 | 八五 |
| 柔術釣鐘足拂圖解 | 八七 |
| 同第二圖 | 八九 |
| 柔術外掛足拂圖解 | 九〇 |
| 柔術引込足拂圖解 | 九一 |
| 柔術押附足拂の圖解 | 九三 |
| 柔術内踝拂圖解 | 九五 |
| 柔術大内股投圖解 | 九六 |
| 柔術内股投圖解 | 九八 |
| 柔術外股投圖解 | 一〇〇 |
| 柔術膝挫圖解 | 一〇一 |
| 柔術拂足圖解 | 一〇三 |
| 柔術右跳腰の圖解 | 一〇四 |
| 同左跳腰の圖解 | 一〇六 |
| 柔術行連の投第一圖解 | 一〇七 |
| 同第二圖解 | 一一〇 |
| 柔術引込業圖解 | 一一一 |
| 柔術首投の圖解 | 一一三 |
| 柔術蹴落し圖解 | 一一五 |
| 柔術透き落し圖解 | 一一七 |
| 柔術裏股拂圖解 | 一一九 |
| 柔術横車圖解 | 一二〇 |
| 柔術矢倉落第一圖解 | 一二二 |
| 同第二圖解 | 一二三 |
| 柔術背負投第一圖解 | 一二五 |
| 同第二圖解 | 一二八 |
| 同第三圖解 | 一二八 |
| 同第四圖解 | 一二九 |
| 柔術衣被投圖解 | 一三二 |
| 柔術眞捨身第一圖解 | 一三四 |

| 柔術教科書 | |
|------------|-----|
| 柔術真捨身第二圖解 | 一三五 |
| 同第三圖解 | 一三七 |
| 同第四圖解 | 一三八 |
| 柔術立捨身投圖解 | 一四〇 |
| 柔術横捨身投第一圖解 | 一四二 |
| 同第二圖解 | 一四四 |
| 柔術蟹挾投圖解 | 一四五 |
| 柔術俵返圖解 | 一四六 |
| 柔術背負落第一圖解 | 一四八 |
| 同第二圖解 | 一五〇 |
| 柔術山嵐投第一圖解 | 一五一 |
| 同第二圖解 | 一五二 |
| 柔術手操投第一圖解 | 一五四 |
| 同第二圖解 | 一五六 |
| 柔術腰投第一圖解 | 一五七 |
| 同第二圖解 | 一五八 |
| 柔術右入腰投第一圖解 | 一九九 |
| 同第二圖解 | 一六〇 |
| 柔術左入腰圖解 | 一六一 |
| 柔術大腰投第一圖解 | 一六三 |
| 同第二圖解 | 一六四 |
| 柔術右抱落投第一圖解 | 一六五 |
| 同第二圖解 | 一六七 |
| 柔術左抱き落第一圖解 | 一六八 |
| 同第二圖解 | 一六九 |
| 同第三圖解 | 一七一 |
| 柔術卷落圖解 | 一七二 |
| 柔術卷込投圖解 | 一七三 |
| 柔術後腰圖解 | 一七五 |
| 柔術移腰圖解 | 一七六 |
| 柔術釣腰圖解 | 一七八 |
| 柔術腰固圖解 | 一七九 |

| 柔術教科書 | |
|------------|-----|
| 柔術肩車第一圖解 | 一八一 |
| 同第二圖解 | 一八三 |
| 柔術隅返し臥業圖解 | 一八四 |
| 同操り隅返圖 | 一八六 |
| 柔術達摩返圖解 | 一八七 |
| 柔術引込返圖解 | 一八九 |
| 柔術横落圖解 | 一九〇 |
| 柔術横掛崩圖解 | 一九一 |
| 柔術跳越圖解 | 一九三 |
| 柔術固業の解説 | 一九四 |
| 柔術連固投の圖解 | 一九五 |
| 柔術襟四方固圖解 | 一九七 |
| 柔術腰四方固圖解 | 一九八 |
| 柔術横四方固圖解 | 一九九 |
| 柔術袈装固圖解 | 二〇一 |
| 柔術抱き返し圖解 | 二〇二 |
| 柔術喉頭固圖解 | 二〇四 |
| 柔術縮込逆手の圖説明 | 二〇五 |
| 柔術左片胸捕締圖解 | 二〇六 |
| 同右片胸捕締圖解 | 二〇六 |
| 柔術片胸解き圖解 | 二〇八 |
| 柔術突込圖解 | 二一〇 |
| 柔術右腕挫圖解 | 二一一 |
| 同左腕挫圖解 | 二一一 |
| 柔術胸挫圖解 | 二一五 |
| 同第二圖解 | 二一七 |
| 柔術小手絨圖解 | 二一八 |
| 柔術膝固圖解 | 二一九 |
| 柔術胴締圖解 | 二二一 |
| 柔術足絨圖解 | 二二三 |
| 柔術足挫圖解 | 二二四 |
| 柔術縮絞業解説 | 二二六 |

| | |
|-------------|-----|
| 柔術十字絞圖解 | 二二六 |
| 同雙十字圖解 | 二二八 |
| 柔術緩絞縮圖解 | 二三〇 |
| 柔術右後絡圖解 | 二三一 |
| 同左後絡圖解 | 二三三 |
| 柔術裸體捕圖解 | 二三四 |
| 柔術當身の解説 | 二三六 |
| 同正面の圖 | 二三八 |
| 同後面の圖 | 二三九 |
| 同當身圖解 | 二四〇 |
| 同正面の部圖解説 | 二四〇 |
| 同後面の部圖解説 | 二四〇 |
| 天倒 | 二四一 |
| 烏兎 | 二四一 |
| 人中、カツコン、霞 | 二四二 |
| 兩毛、獨古、秘中 | 二四三 |
| 松風、村雨、腫中、鴈下 | 二四四 |
| 稻妻、水月、明星 | 二四五 |
| 陰囊、向骨、草靡 | 二四六 |
| 内外蹠、早打、活 | 二四七 |
| 電光、後稻妻、下閨 | 二四八 |
| 尺澤、柔術活法の心得 | 二四九 |
| 人工呼吸術第一圖解 | 二五〇 |
| 同其の二圖 | 二五二 |
| 人工呼吸術 | 二五五 |
| 同第二其の二圖 | 二五八 |
| 同呼吸術の秘法 | 二六〇 |
| 誘活法の圖解 | 二六〇 |
| 同第二圖 | 二六二 |
| 同第三圖 | 二六三 |
| 誘又の活法圖解 | 二六四 |
| 襟活法圖解 | 二六五 |

柔術教科書

| | |
|---------|-----|
| 陰囊活法圖解 | 二六八 |
| 同第一圖 | 二七〇 |
| 同第二圖 | 二七一 |
| 同第三圖 | 二七二 |
| 裏活法圖解 | 二七三 |
| 同圖説 | 二七四 |
| 淺山一傳流活法 | 二七五 |
| 同圖説 | 二七六 |
| 末書に加へて | 二七七 |

亂捕活法 柔術教科書目次終

活法 亂捕 柔術教科書

免許 柳松齋 井口 義 爲 著

柔術の起源

凡そ柔術は支那に起りて我國に傳りしものなるべし。去れはに
 明の萬歴年中に刊行せる萬法全書中にも、劍、鉞、槍、棒、弓、柔術等の圖
 畫を加たる者あり。我朝にては天文年中作州津山波賀村の人竹
 内中務大輔久盛なる者此術を修練し、小具足捕手と號け、遂に一派
 を開く、之を竹内流と云ふ。久盛修驗道を以て諸國を遍歴し到處
 に此術を教授し、子孫にも亦之を傳へり。今猶中國筋にては往々
 此流の形を見ることあり。其後永祿年間支那より陳元賓と云ふ
 者來り武州江戸現今の東京麻布の國正寺に寓居し此術を教ふ事

柔術の起源

三浦義辰、福野正勝、磯貝次郎、左衛門の三氏其門に入り、各々奥儀を極む。殊に三浦、福野の如きは、遂に一機軸を出し、別に一派を編出し、て之を世に擴む。是れ我朝に於て、中古柔術の祖と傳稱す。其門人漸次増加して、各自一派を開き、即ち現今に於ては、三四十の流派あり。然して其の亂捕に至りては、大抵他派と試合を爲すも、劍道の面、胴、小手、突と云ふ如く、又書道を學ぶに初めいろはを以てする。と同じく、殆んど同一の形を演ず、又柔道亂捕にては、腰、手、足、締、逆の業を多く用ふるにより、後進者には、是等の形を圖に示し、以て一般の教科書と爲せり。されば、苟も此道に志ある者は、必ず之を熟讀、翫味し、之に就て學び、怠らざるときは、現時勇名を轟かせる講道館の八段、横山、作次郎、山下、義昭、兩氏の如き、技量に至らざるの理なしと心得べし。餘は教師用の著書に明記す。

柔術大意

柔術の大意は、柔能く剛を制するの理にして、武術中一種特別の技術なり。故に此理を會得するときは、彼劍術の如く、木刀、竹刀、面、胴、小手の道具を用ひず、赤裸無手、只自體四肢の活動に依り、如何なる剛強の者に、出會するも、直に之を取つて、押へることを得るの術たり。されば、常に此道を研磨して、時に臨んで、不覺を取らざる様にすべし。偕て此道を學ぶには、男女を問はず、十二三歳より、二十六歳迄の間を以て、最も適當の期なりとす。故に初め、此書に依り、稽古を爲すこと、久しき時は、自然と悟り得るなり。文運日に進み、大平の恩澤に浴する今日、といへども、惡漢等に出遇ふこと、無しとも計り難し。故に人々は、充分此術を會得し、身體を健全にし、其機に臨み、能く敵を制し、不意の凶事を防禦するは、最も肝要なることと、知るべし。

柔能く剛を制するの理由

柔能く剛を制するの理由

柔道の形を學ぶを必要とする事
柔術を會得し得る時は如何なる剛敵無法に出遇時も決して怖る
るの念を生ぜず心神沈着にして亂れざる故に其敵に打勝つもの
なり。又一見敵の形状弱きに見ゆることあるも決して侮り輕ん
ずべからず先づ敵に如何なる技量あるかを知らしむることを肝要とす、
されば常に其業を練磨して其妙味を解する時は假令多勢の悪漢
又は強敵に出遇ふも單身能く之を制することを得るものなり。
假令は大船の水上に行くが如く數人の乗客あるも一人舵機を操
つる時は其の欲する處に到達し得るが如し。柔道は亦多數の強
敵あるも只一人にて之を操つること舟子の舵機を操つると同一
の理なりと知るべし。然れども是を施すに於ては其術の巧拙に
係るなれば常に怠らず専心其技を研究すべし。

柔道の形を學ぶを必要とする事

柔道も亦流派あり其流儀に依つて必ず其流儀の形有斯道の元祖

と稱せらるゝ人は種々他流の形を見或は教導口授を受けて遂に
一流を組立つるものなり。即ち天神眞楊流の元祖磯又右衛門先
生は始め楊心流を學び次に眞之神道流を合して一機軸を出し遂
に天神眞楊流と號する一派を弘む。又楊心流元祖は長崎の人に
て秋山四郎兵衛と曰ひて小兒科の醫師なりしが醫學修業の爲め
支那に渡りし際博轉と云ふ支那人に就きて柔術の形三手を學び
得たり。

當時支那に於ては唯蹴ると突くとの形を専門とし日本の柔術
とは大に違へり。秋山氏は僅かに三手の柔術形を熟練し更に活
生法二十八種の傳授を受け歸朝の後之を人に傳授す然れども其
手形少なき故を以て練習する者大抵半途にして廢止す。秋山氏
大に之を歎き筑紫太宰府の菅廟に祈願を單めて形手の工風を凝
らし遂に三百三手を編み出したりと云ふ。又神廟の前に柳の大
樹有り大雪の際に其枝に雪の積まざるを感悟して遂に楊心流と

柔道の形を學ぶを必要とする事

武藝進歩の心得
 號する一派を開く。又神道流元祖は大阪城の同心山本民左衛門
 と云ふ人此楊心流を學び亦工風を凝し分別して流名に上中下三
 段の級を定め其手数六十八手として一派を開く。之を眞の神道
 流と號す。磯氏の如きも亦之と同じ。現今加納治五郎先生も天
 神眞楊流を學び後に起到流を吉田直藏先生に學び今講道館流を
 弘めたり。
 柔術は形が必要なる事亂捕は劍術で云ふ道具を着けて面小手、
 胴突と云ひ文字に喩ふれば草書の如きものなり。
 都而何業も眞行草と三段に學ぶを宜とす。他流試合は亂捕を
 以て全體に勝負を附けるものなり。其の亂捕も形種々あり著者
 圖解を示して一般後進者に便利を與へんが爲めに記するものな
 り。

武藝進歩に附三毒の心得

凡そ慎む可きものは三毒成なり。三毒と云ふは即ち酒色財なり
 第一酒に心亂れては稽古不充分なるは勿論他に種々の危険を生
 ず。又色慾に迷ひ博奕等を爲すが如きは情弱に流れ自然心亂る
 るが故に此の三界を慎みて熱心に修業すべし。此柔術と云ふは
 人を害するものにあらず第一は護身の爲め運動及身體強壯に成
 るが爲めに學ぶものなり。酒に酔ふて他人に害を加へ色慾に狂
 ひて婦女子に亂暴を加へ。又は柔術を亂用して他人を驚かすが
 如き行爲は一切有らざる様慎むべし。
 總て藝術には上に上のあるものにて之れにて宜しと云ふこと
 なければ成るべく上手の者に教を乞ひ充分先輩の妙手を覺へん
 と心掛けて稽古をすることを第一とす。常に上手の者に稽古を
 頼みて自身にも亦技を研究して後進者に教傳するを上手と云ふ。
 他人の稽古を見て其妙手を取りて我が短所を補ふ様心掛くべし、
 自身何程上達せりとも上に上ある喩への通りなるが故に人間一

武藝進歩に附三毒の心得

術を學ぶの心得
生が稽古なりと心得べし。

術を學ぶの心得

柔術を學ぶ者は稽古前には大食飲酒を堅く慎むべし。大食をし
て稽古を爲す時は必ず身體に害あり投げられ到れし時嘔吐を催
すことあり。嘗て初代磯先生の道場の寒稽古の時は毎朝四時頃
より門人寒稽古を爲すに當り何も食はず七八時の頃稽古を休
み水四升餘の處へ白米六七合を入れて三時間餘を炊きたる粥二椀
づゝ位を食したるものなりと云ふ。今は右様なる稽古を爲す必
用なきも常に其心得を以て稽古に當り大食せざる様心掛くべし。
稽古を爲すにも力量有るに任せ力を罩めて突張り強情になす時
は術の術たる所を會得すること出來難く外の條に示す如く心を
柳の枝の如く四肢は成べく柔かく動かし腰に力を入れ業を掛け
る刹那に下腹四肢に力を罩め電光の如き早業を掛ける時は敵は

見事に投げらるゝものなり。師の教へ受くる時には身體を固く
すべからず然らざれば術の妙味を會得せずして自身に怪我を受
くる事多し。又飲酒して稽古する時は大食の時と同様の害あり
と知るべし。
往昔著名の武術者にして大酒の爲に身を亡したる例枚舉に暇
あらず心すべきことなり。

氣の満つる事

氣の満つると云ふ事は常に氣の弛み心撓む事なく弓を張りたる
如くにして中心を正しく座する處を氣の満つると云ふ。譬へば
摩利支天像の如く蓋し心一なりと雖ども能く其心の六手に行渡
りたるが故に皆一同に動き働くを得るなり若し心が一方に偏倚
る時は必ず動く手と動かぬ手と有るに至る動かざるに於ては幾
本有りても用をなさず是にては氣の満つるとは云ひ難し故に頭

氣の満つる事

氣と體との事
より手足の先に至る迄能く氣の行き届き行渡りて一點の間隙なく平生充分に正しく安坐する處の有様を以て氣の満つると云ふなり是眞の位の第一と云ふ意なり。摩利支天の像は一體三面にて六手の動くの意なり武術も之を悟らば自然四肢も充分動き得べし是れ即ち氣の満るにあり。

氣と體との事

氣と體と云の中に陰陽あり則ち體中に存する氣の起りを陽と云ひ亦其靜まるを陰と云ふ柔術に於て専ら氣の扱ひ方を教へて業を成さしむると雖も之れ無形物にして外面に露出せるものにあらず唯體中に満ち存する處陰陽なれば随つて弛み撓みて全からざる事あり。平常安座爲したる處の心氣は漫々として所謂愼靜無事の姿なれ共動作を始め身體手足を運用爲すに至れば其業に従つて中心傾き終に平常の氣を損するものなり。故に昔日柔術

家に於て秘傳と爲したる處必ず先づ己が方寸の元氣を養ひ弛み怠らしめず事物に心氣を停むる事なく宜く萬業の基本たる處を堅固に保ち守らしむるを要すと基本既に定つて業を爲せば如何程動き動くとも元氣能く決して缺損する事なし左に力を用ふるも右の空しき事なく亦右を働かすも左弛まず前後上下に隙なくして起居動靜共に氣を損する無きに至れば眞に大丈夫と云ふ可きなり。此の咄種々あり教師用に著はす。

志と氣と力との事

志氣力の此三つは區別して論ずる事甚だ以て難しと然れ共今試みに之を分けて云へば眼前に或一物在り是を取らんとする志の起るに随ふて手の前へ出るは何ぞや是れ志に随つて氣の手に通ふが故にして其物を取り扱ふは即ち氣に隨ふて力の手に集るに由るなり。又力の出づる處には氣集り氣の通ふ處には力集る事は

志と氣と力との事

弱身強壯に成るは柔術にあり
一定の理にして氣力不二となるものなり。然れども力を先立て業を爲せば其害甚だ多し即ち力を捨て唯氣の扱ひを熟練せしめんが爲めなりとす故に業熟達するに至れば人々固有の力は其業に應じ働きに随ふて出づる事は固より教へを待たずして明かなり。されば志氣力を合一するを以て不二の妙處なりとす。

弱身強壯に成るは柔術にあり

弱身強壯に成るは柔術にあり

弱身の者は幼時より此の道に入れ置く時は身體の發育上を充分ならしめ體力自然に備はり且つ術を修め業を鍛練せば勝負の實地に克く勝を制するを得べく延いては智徳も進みて利益多し臆病なる者又は婦女子と雖も運動の爲めに常に幼時より斯道に入れ置けば氣を養ひ心を廣く持つ事を得べく極めて有益なり。最も初めは其の身に適する丈けを學ぶものなれば過劇なる運動にはあらずるなり。自分の身體に適する位の練習が後に至り大に

利益を得るなり。斯くして身體の發育に随ひ好みて業を學ぶ様に成るものなり。日本男子として武士的精神を養ふは勿論婦女子と云へども亂暴者に出遇ひいかなる害を受けぬ限りもあらず萬一の際は護身の術となるなり。世の父兄は進んで子弟を斯道に入れ給ふべきことなり。つはものは御國と親の爲めなるぞ

こゝろみがけよ末のためなり

義爲

武術に免許皆傳と云ふ事

凡そ何武藝に於ては免許皆傳と云ふ事あり。警視廳講道館の外は師匠先生の意に叶ひ次第に業の妙處を自得せるものには最初折紙を渡し、師より門人一同へ此度何某は折紙の腕あり依て是を渡すと申渡すなり後數年を経て形及亂捕の奥儀を極めるに至り口傳秘傳の免狀を渡すなり之れ目今警視廳にて定めし三級に

武術に免許皆傳と云ふ事

一心と云ふ事
相當するものなり此の免許に渡す巻物に乾坤の二卷に爲すも有
り又天地人三卷と爲すもあり我が眞楊流は四卷を授くるものな
るが極意に依りて種々の渡し方あるも大概は天地人皆傳と云ふ
他の武藝にても全般同一の事と知るべし。諸武藝中柔道が一番
新らしき武術にて現今は柔術が最も隆盛を極むるなり。各府縣
下に在住せる柔道教師は皆昔より師の傳を受けて今に至るもの
なり。又名人と云ふは自身に言ふにあらす何業にても人々に勝
れたるものを指して名人と云ふ當今名人と言はるゝ人は二三人
位に過ぎざるべし。

一心と云ふ事

總じて物事には一心に成るべし神道の金光教にも一心に信心せ
よ御蔭は我が心にありと云ふことあり。昔より武術修業者は神
に祈りて一派一流を起したる者澤山あり奥を極めて一心不亂に

稽古を爲す者は何藝に於ても世に名を著はすものなり。殊に武
術的のものは猶更の事にて一心を貫く事第一なり。
畏くも先帝陛下の大御歌に

とる棹のころなかくも漕き寄せむ
葦間の小舟さはりありとも
雨たりにくほみし軒の石みても

男子一度起たば何事も其の奥を極むるまで學べかし進めよかし
と云ふ御意味なり

無我無心の位の事

凡そ見處のものをば直に其相手取る氣に成り形を造るは其處へ
心を留るものにして是は我が心に好を求る處有るが故なり又隨
つて敵あるなり例へば敵は何程取掛らんとする勢を示すと雖も

不動心の位の事
一六
我は只眠りたるが如く敢て好まず能く心を正明に爲し泰然安座
したる處の如きを以て則ち無我心と云ふなり無我無心の所よ
り出で敵に應じて業を行ふ事肝要なれば宜しく考へて修業すべ
し。是れに就ての喩言澤山あり教師用に著はす。

不動心の位の事

不動心と云ふ事は即ち如何なる事に遇ふも心の動かざるを云ふ
なり。心正明にして總身に氣満ち渡り眼に白刃を見るも心には
見ざるが如く又耳に大砲の音を聞きても聞ざるが如く凡て物毎
に驚き噪がざる心を大丈夫の不動心と云ふ。斯の如き心膽を以
て我身を働かし千變萬化の術を行ひ大敵に出遇ふとも少しも驚
き懼るゝ事なきを即ち眞の不動心と云ふ故に往時は生れながら
にして自然大砲の響或は太刀音を聴き劔撃を以て勝負を争ふ事
の常なれば随つて心膽の修練も出來得たるなるべし。最も其頃

にても膽力を練る爲め野に臥し山に入り又は人跡絶へたる處へ
行き凡て心中の動せざる事を專一に修業爲したるもの故眞に不
動心の位にも至りしと成るべし。
亦當世の修業者と云ふは多くは手足にてのみの藝にて腹の中に
は術なきが如し依つて此處を能く熟考して不動心の位に至るの
工夫を專一に修業すべし只々口で云ふ斗りでなく術の極意を究
むる事を考ふべし。尙ほ引言あるも教師用に著はす。

膽力を練磨する事

凡て武術は膽力が第一なり臆病風に誘はれて勝つべき業も其効
立たず。強敵と恐るゝ時は下手の者にも負る事云ふまでもなく
一眼二早速と云ふ喩への如くなれど膽力なき時は其効を一つも
起す心なく怖氣附けば四肢も固くなる故に膽力の強き者が必ず
勝を取ること昔より其例多し。修業中は何よりも膽力を練るを

膽力を練磨する事

第一とすべし。沈着を守る事。 諭の引言種々あれども教師用として著はす。

沈着を守る事

總じて武術の類には諺に云ふ急ては事を仕損ずると云ふ如く不
動心の無我無心にて敵より仕掛け來たる時は心を靜かにして向
ふべし。心の周章ては其仕掛けを外す爲めに反つて投げらるゝ事あ
り。四肢の働きは早業が第一なり。美麗なる勝を取らるゝ業の
妙技に依つて先んじて敵を倒しても殘心には沈着を守り又直ぐ
に何を仕掛けらるゝも恐るゝ心なく、我身を守り居るは是れ武術
の奥深き處なり。其内にも柔術は無手無刀なる故敵より棒劍何
の武器を以て打ち掛かるも沈着を守り敵の得物を撈ぎ取り或は
打落すが如きは我柔道の得意とする所にして常に沈着に行動す
るやう心掛くべし。

眼の配りの事

凡そ眼の働きは心の發動に據るものなり。故人云ひ傳へたるが
如く。物を觀て其心を起すは是れ人事一般なり。人は如何なる
場合害を被るやも計り知れざるが故に平生歩行するにも柔道を
練習する者は前後左右に心を配り油斷無く通行するものなり。
又不意を打たれて諸人の笑を受くることありては多年の稽古も
其効無なり。又兩手に五指の内親指を中に折り込み居ること
を定指と云ひて必ず親指を大切にすることなり。眼の働きに依
り勇氣も満ち又業も早速に起るものにて稽古中も相手は右へ投
げんとするか又は左へ投ぐるかと相手の胸中を知るは唯相手の
眼の配り方にて知り得るものなれば我は其機を速に看破する様
修業すべし。

眼の配りの事

掛聲を大切とする事

劍柔槍棒長卷凡て武藝に於ては掛聲を發する事を必要とする。打込み投げ拂ひ等には(エイ)とか(ヤア)又は(トウ)と云ふ掛聲を發する爲に業に勢ひ生じ又美麗に見ゆるなり。又形に於て掛聲無き流儀あるも十中の九迄は必ず掛聲あり聲を掛くるは氣合を込めると同じ事にて受る方より(エイ)と聲を發する時下腹より自然に起るものなり。捕方に於ても(チ)と答を同時に發するものなり是れ氣と氣を起して勇氣の増すものなり。亂捕と云へども投る際は掛聲と共に業を行ふ同時に四肢の動勢満つると云へば常に心に込め後進者へ稽古を授くる時試るべし。

殘心放心と云ふ事

殘心と云ふは敵に投げ倒されても起き揚る迄も心に油斷なく敵を見詰め居るを云ふ。放心と云ふは投げられながら投げたる者に注目しながら起き上り又更に心を起す迄の心の動かぬ處を云ふなり。都而柔術の形に於ても投げられても眼と眼を他に散らさぬ様に白眼で心に弛みなき事を殘心放心と云ふ。投ぐる方には殘心の氣を込め投げらるゝ方を放心と云ふ。雖も是亦解釋すれば殘心同意氣のものなり。又武術の殘心と云ふことは極必要の事にて稽古中にも此の殘心の方は最も充分に修業すること肝要なり。殘心がなき形は其人の勇氣心更に無きものを知るべし。

他流試合の心得の事

僅かの武術を自慢して只他流試合を試みんと思ひ我が力と藝術練習の爲めなりなぞと先を侮り仕合を申込むが如きは最も慎むべきことなり。諸學校生徒にして仕合を申込には何々學校の何

他流試合の心得の事
 段何級の者及姓名年齢等を書き誌して仕合を行ふべし、其の時
 は我れ未熟なりと思はず自身の手を相手に仕掛け見らるべし必
 ず我が得手を先方へ知らぬ様にすべし、餘は巻中各箇條に示す
 通りを常に心得居れば少しも敵に恐るゝことなし。初心の内は
 試合する場合には胸に動氣起り相手に業を掛くべきか掛けらる
 るかと怖氣を生じ易し。故に場馴れたる者は七分の徳あり、町道
 場などには随分業の上手なる者にても他流試合其他大會等へ出
 席すると意外に早く負くる者あり。是れ心に臆するが故なり相
 手は左程強くはなかりしになど、後にて悔んでも其詮なし。
 又他流試合に出づる時は相手は強きには相違ないが常に得意と
 する所の業を以て恐れず掛け其手が外れたら又此の手と自信
 を以て打掛りなば決して恐るゝに足らず。
 然し亦敵を軽く見れば我れに油断生じ甚だ不利なれば常に怠ら
 ず修練せば強者なりとも恐るゝに足らざるべし。

稽古に相手を忌み嫌ふ事

道場に稽古中相手を選むは上達せざる基なり。故に人数中不親
 切なる教へ方を爲す者往々あり斯る者と稽古を好まざるは一般
 の通有性なれど斯くては毎日同じ人とばかり稽古を爲し居りて
 は業も不進可成多人數と稽古するを宜しとす。若し不親切なる
 者に出遇はば其者の得意の手の裏を考へて始終相手を破れば終
 には其者も好意を以て迎へ互に研究する様になるものなり又自
 分より相手が弱くて自分の心の儘になると其者のみと稽古す
 る弊往々あり是れ卑劣なるのみならず又上達せざるなり後進の
 者には親切丁寧に教へてこそ武士道の意義にも叶ふなり。
 又他流試合の掛引等は自然會得するものなれば相手を選むが如
 きは稽古中斷じて慎むべし。

稽古に相手を忌み嫌ふ事

強情は武藝の大悪と云ふ事

何事を習ふにも教師の教に能く随ひ一心に學びてこそ眞上達するなれ身體強壯にして力量あるに慢心し木造の人形の如くに突張りなどする者は必ず其業上達せざるなり。己が身體は四肢と下腹に力を込めイザ投ぐるとか又突く引く等の場合に氣合と同時に迅速に業の妙處を現はすものなり。都而己に力量ありとも教を受くる時は從順に熱心に練習すれば熟達疑ひなし。必強情をつゝしむべし。

稽古前後の心得

道場及自宅にて假にも稽古を爲す時は大小用便は必ずも済ませたる後稽古に掛かること萬一假死したる時大小便を洩らす事あり。大食後大酒後は必ず稽古を爲さざること他人稽古中には極めて靜かに見學し居る事。凡て稽古に掛かる時は立際ともに足の位置は八字型のこと。見所立ちある時は正面の所へ先に禮を爲し次に見所に向ひ一禮して其道場の中央にて雙方互に一禮して稽古に掛るべし稽古終りたる時は始めの如く見所正面に禮して引下るを儀式とす。輕々しき舉動有りて他流の人に笑ひを受けぬ様に注意すべし。稽古終りたれば水にて能く汗を拭ひ清潔にして衣類を着用する事と心得べし。又試合及稽古の際後進者に負くる事あるとも必ず恨む可からず他の場所にて勝つことあり勝負は時の運と諺にもあるなり。

精神と態度の事

諸武藝には更なり就中柔術にありては沈着の態度こそ必要なれ。何となれば柔術は敵を嫌はず又敵の業に倣ひて我れ亦其の氣に合せて表裏の考へを爲すものなり是れ精神の作用なれば必ず感

禮の解
ずる處ありて初めて面に現はれると云ふ無形のものなり其無形物より有形の働きを神態度となる此態度こそ活動の第一指針にして禮に初まり禮に終るものなれば修業者は沈着にして最も謹みて事に當るべし。次に解く處を能く熟讀すべし。

精神—執意

禮 義
信 情
忠 孝
喜 怒
愁 悲

禮の解

禮は精神の解釋中最も解し難きものにして禮は精神より出て態度に顯るゝを云ふ然れば此の心の禮なき時は貴顯に對し亦神靈

に對する柔の術の投合する心より出でたる容姿は逆も出來ざるものと心得べき事。

義の解

義は最も柔術中十中の八九迄も伴はざるはなし義に就きて解釋すればなか／＼限り無きものなれども是は柔術の性質として離るべからざるものなれば熟達と伴ふて自然其意の備ふるにより未熟の中は業に無理あり即ち無法の仕向を敵に仕掛けざる様注意するが肝要なり。

信の解

信の意に就きて二つあり事武藝及術の意に投合する様自得に勤むると云ひ次に信を以てする容姿は如何のものであると云ふことを心掛れば足れりと知るべし。

情の解

情は就中甲者に乙者とに關係深きものなるが故に情は愁と悲みとの似て否なるものを區別し判斷力を備ふるにて足れるなり。

忠孝の解

君に忠親に仕へて孝は其の區別を辨へる事唯形斗りとならざる様注意すれば足れりとす。

喜の解

喜とは勝ちたるときに笑顔を現はすが如きをば云ふ。喜あれば色面に現はるゝは是れ人の常なり勝舉を慎むべきことなり。

怒の解

怒りと云ふは是物に觸れて心に反動を起すを云ふなり業の意に依れば概ね無念の怒なるが故に其心を戒しめ業を學ぶべし決して荒々敷怒氣を面に顯はすは不可なり何となれば怒らずとも鋭き眼にて其場に臨めば怒は充分に現はれるものなればなり。

愁の解

愁は憂ふことの面の半ば顯れたるものにて悲と又同ふせざる事を注意すべし。負るとも愁ふること勿れ。

悲の解

悲は憂事の最早全部をば面に顯したるもの愁悲此の二つの區別を解して精神活動の道理を自得すべし。此以上は單に柔術の精神を述べたるに過ぎざれば詳精は圖解に依りて會得せらるべし。

怒の解、悲の解

夫敵には陰敵と陽敵二とありて其容姿にては判じ難きものあり
 外見弱き風情にても其實剛敵なるものあり又外見勢ひ盛んにし
 て強氣に見へても其實却つて弱き者あり。柔術の法は一身を靜
 かにして變化を常とすれば一様に云ひ難しと雖も仕合に臨みて
 敵の面に注目し能く其色を見てなすべし。
 又敵の顔色赤くなるは性氣上りたるものなり性氣發すれば必ず
 心に急ぐ爲めに勝利を得る工風するの暇なし又顔色青白くなる
 者は心に臆したると知るべし。臆する時は身體震ふ爲めに業の
 活用出來ざるなり。他流試合の第一の心得は臆せざるにあり。
 わが上に立つ藝術を苦にやむな
 好きの道こそ上達なるべし
 八方へくばる眼のすき間なき

陰陽強弱之説及一身の心を論ずる事

陰陽強弱之説及一身の心を論ずる事

身に禍のきたるひまなし

著者

古歌

心の割出五系の圖解の事



心魂とは人の心が基にて萬物に當りて皆觀るものにて其心が起
 るものなり是れ第一の魂の基なり。種々に割出し強きにも弱き
 にも力むも勢も出づるなり此れを詳細に解説すれば限りなきも
 のなれど五種に心の働きを日ひ顯せば心より動勢である。仕合
 する時に當り敵を見る時は勝と云ふ心を起して勢満るものなり

心の割出五系の圖解の事

是れ心の基なり。次は膽力にして勝心にならんと思ふ心起きたれば必ず心に力を起すなるべし。是は身體が基なり身體虚弱なれば其心を起すも其効なし身體を強健と爲し物に動ぜざるを以て基なりとす次に著す處の體育法に依り幼年より此術を學び身體の消化を附けて次第に稽古を爲さば必ず自得すべし。卷中圖解の順を追ふて次第に學ぶべし。次に作業呼吸である是れ皆心より起りて自然業の形を造り人に教へ得るは云ふまでもなし。又武術は息切れする様にてはならず前に述べたるが如く身體を練へ置くこと肝要なり何人に教授しても教ふる方は十中の七八度迄は投げられるものなればなり。試合に臨み息切せざらんとするには幼年より體育法に心掛くるが肝要なり。中年にて修業する人を見ても知れるものなり業は早く覺ゆるも息切れして長く續かぬものなり。又次に修身の解我が身體弱きときは到底上手名人には爲れぬも

のなれば常に讀書を怠らず智徳を進むるは云ふまでもなく能く理非を辨へ仁義を明らかにしてこそ名人上手にも成り得るべけれど絶えず稽古を勵み術を練磨するが肝要なりいつに至るも他人に教へを受け居るは愚の至りなり後進を引立て自身の業を磨くが心の基なり。

道場及勝負見所の事

凡武徳會又は講道館等廣大なる道場を始めとし各學校町道場の定法として玄關より右に見所を置定なり。武術は都て仕合の時審判官見所が四角に立ち行事もありて其行事は唯業の美事に勝を得る者を指して美事とか勝負ありとか角力の行事と同じ役を務め行事見損じたる時見所より検査する者なり。勝負には見苦き勝を取たる時は六分或は七分として全くの勝に入れず。再び何分か勝を得たる時は七分として合一本の勝を得るなり。大

概は三本勝負の事故雙方一本宛勝を取れば後一本にて勝負が附くなり此場合行事は勝負と大聲を發して試合者に注意を與ふるなり五分の勝負の時は引分になること相撲の三番勝負と略同じことなり。修業者は見所の立ち居る時は特に勝敗とも美麗になすこと見苦しき試合を爲して諸人の笑ひを受けぬ様すべし。見所より今一本と聲の掛りし時は更に勝負を爲すべし普通の場に臨む時にも禮儀を正しく爲す事は前に充分述べたる通りなれども斯る公會の演武場にては一層注意して教師及學校の名を辱しめぬ様注意すべし。是が肝要なり

體育より柔術に進むの心得

凡體育と云ふは近來各學校にて盛んに奨勵しつゝあるも柔術を學ぶ者は幼年の頃より巻中に示す圖解の如く順を追ふて身體四肢の働き輕快にし次第に筋骨の自由發育を進めて投ぐる、投げら

る、返り身、打込み、受霞、突掛、前返り、後返り、逆立、高飛等の稽古を充分に練習して後ち眞の位を自得し以て柔術に進むを眞の稽古と云ふ。凡そ何の藝道にても順を追ふて次第に業の妙を得るは已に讀者も知らるゝ處なり。此の巻中十中八位迄圖解にて著はせるも他は圖畫筆に任せぬ處ありて委しく説明出來ざりしは著者の最も遺憾とする處なり。後日教師用として補ふ處なればそれ迄は本書にある處を勉強し給へかし。術の術極意口傳秘傳と云ふ事は斯る小冊子なれども侮るべからず柔術は武術中最も高尚なるものなり。

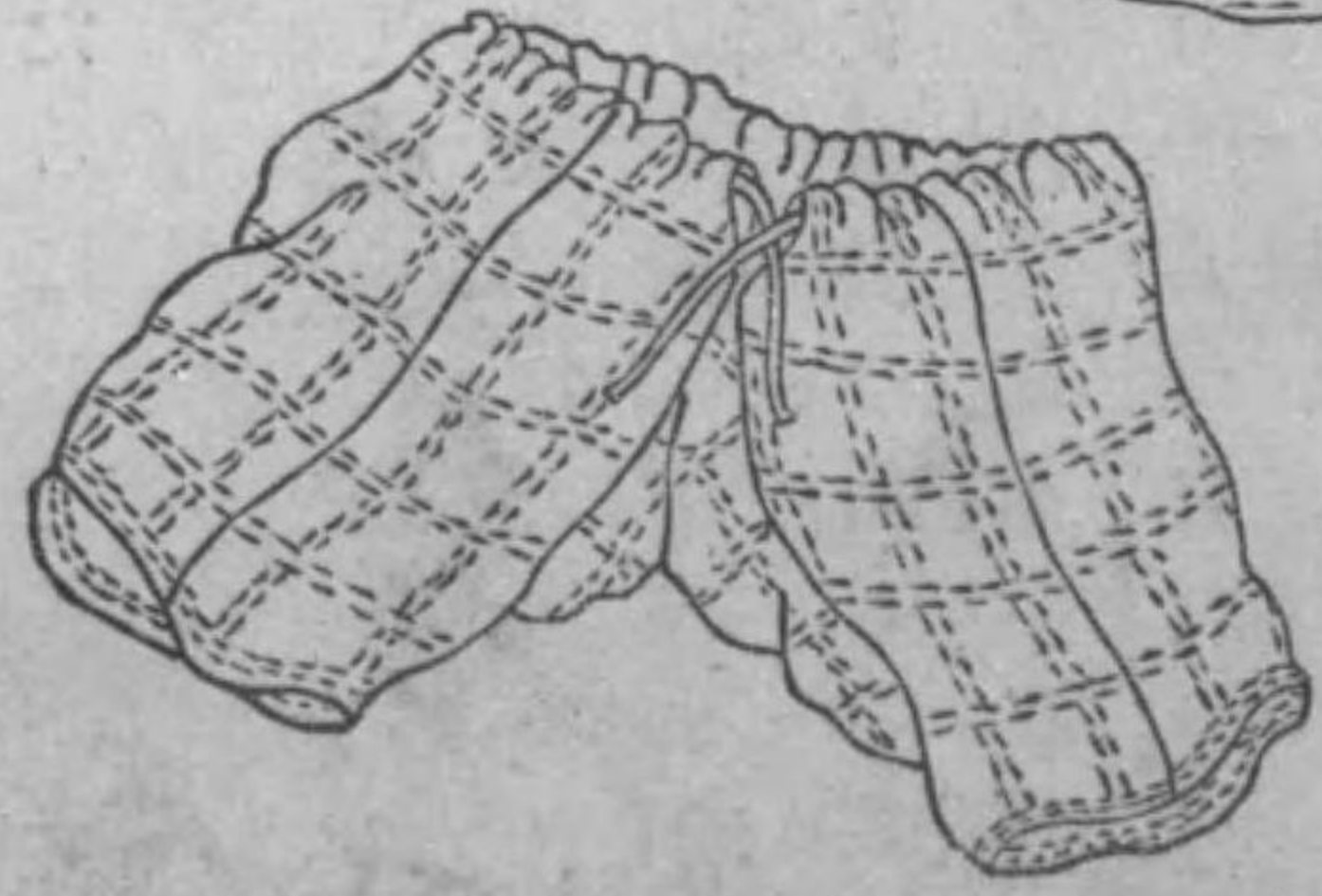
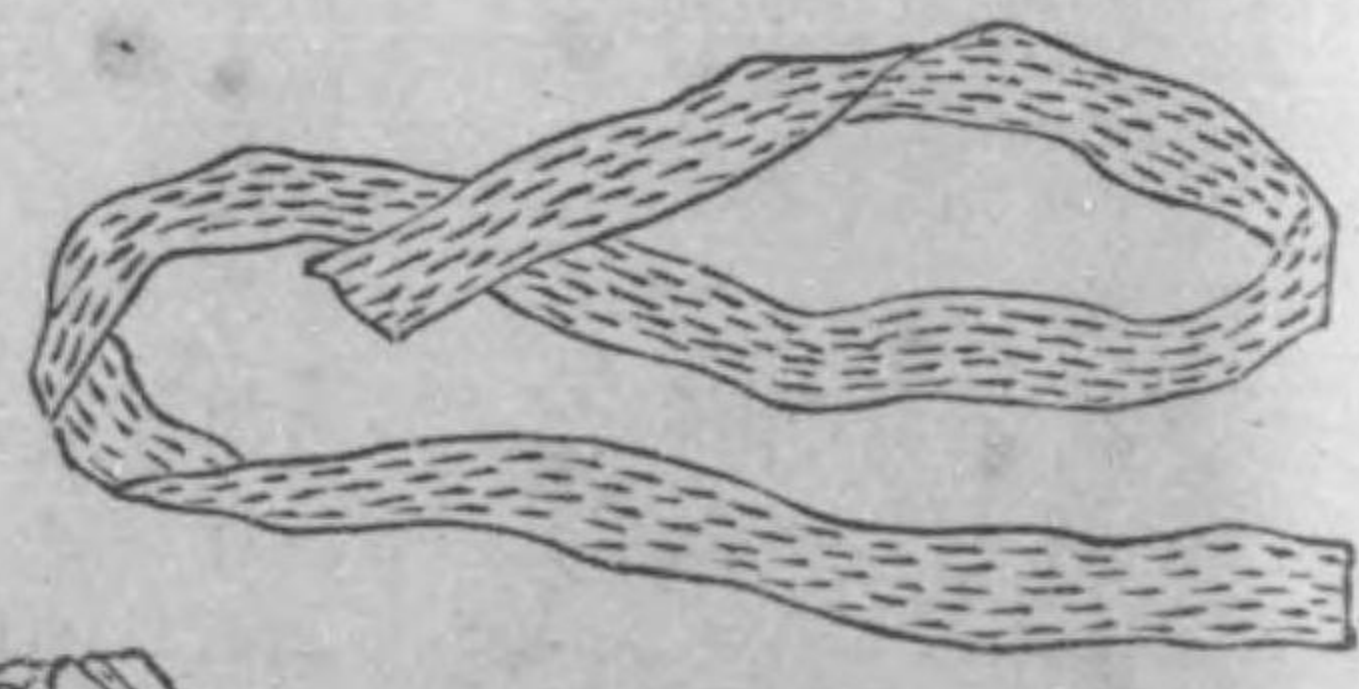
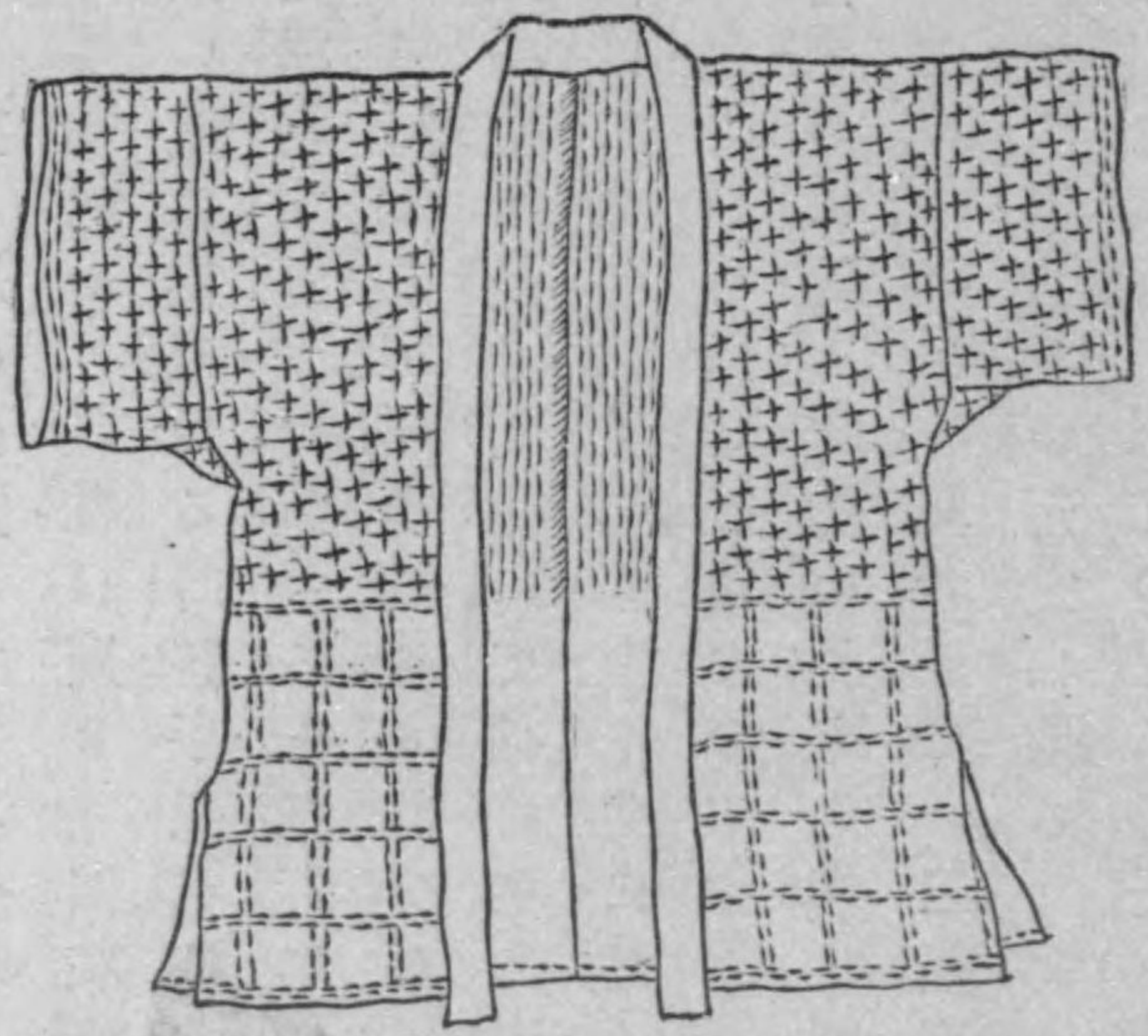
舊式稽古衣の圖解

凡そ稽古衣と云ふ者は舊來より圖式の通りにて肩より腰迄を晒木綿の白地に紺糸を以てし、肩袖は十字絞りに縫ひ上げ腰より下は格子形に二筋に縫ふ圖の如し。袖は半袖にて襟は丸巾の晒木綿を以て四つ折にし紺地に白木綿糸を以て縫ふこともあり。畢套又は三味又猿股は二重合せにて上部は紐を通し半股引の如く腰にて紐を締め帯は木綿の半巾を縦に四つ折とし縫ひ合はす。縫方は木地に依りて白、黒糸を以て刺すなり段級の違ひ又は教師の夫々規則を定めて造るなり。今回著はしたるは四肢の働きを委しく見せる爲め舊式の着衣の姿を模型として寫生したり。

新式稽古衣圖解

元來我國の風俗は一般に角袖なりしも近時は外國との間交通頻

舊式稽古衣圖式

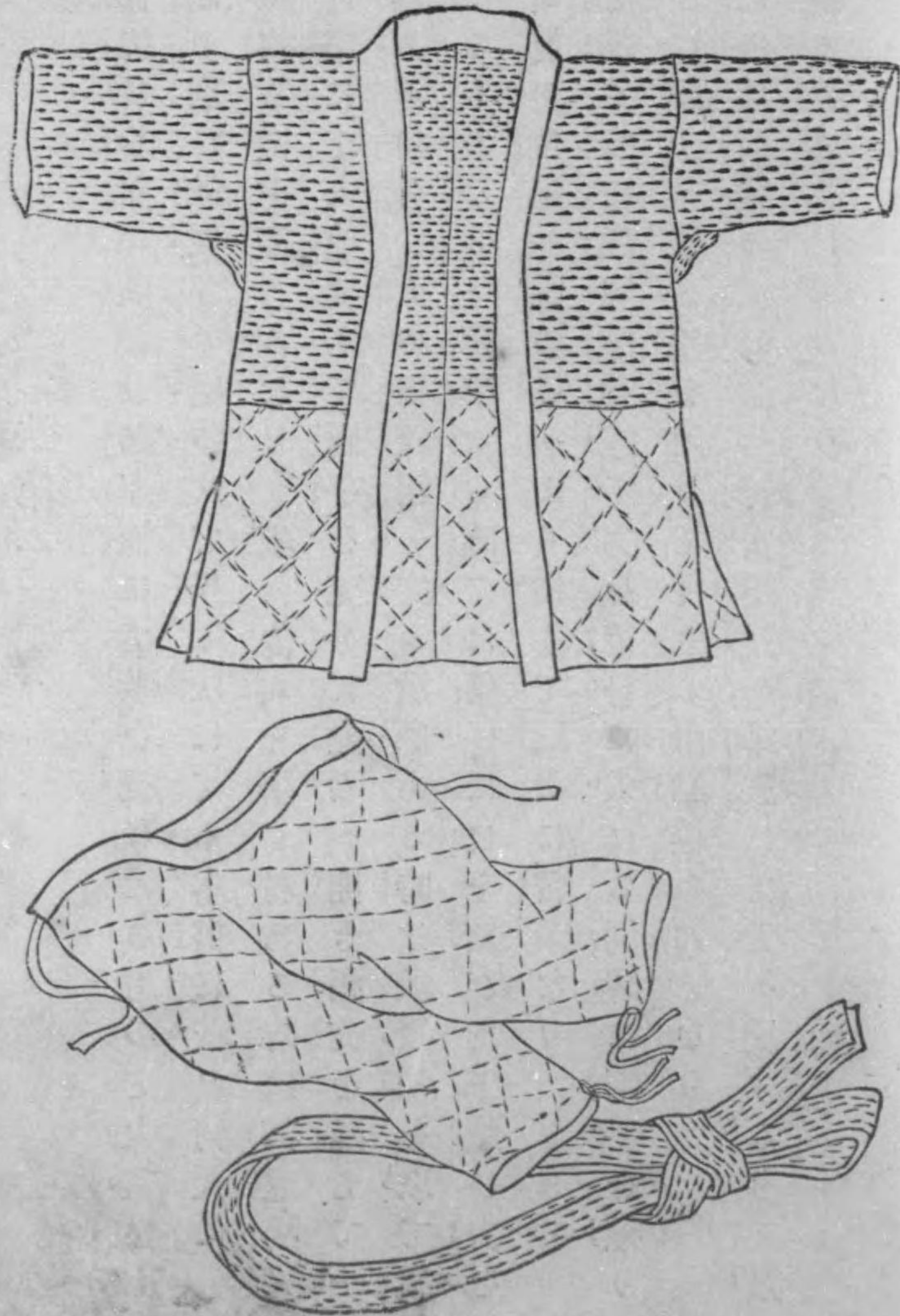


新式稽古衣圖解

三八

繁となり隨て世人の服装も多きは洋服となりたるに就て我が柔道稽古衣も是れに倣はざるべからず。凡即ち袖短かく且袖口廣き我國在來の服装にて稽古に馴れては洋服の敵に出遇たる時勝手悪しく大に不利なれば平常より是れにて稽古するが得策なると又近年外人間に柔術を學ぶ者年々増加せるにより可成裸體の大部分を現はさぬ爲に改良せるなり。又則ち袖も長く筒袖にて袖口細く畢隠しも長く白地に紺糸を以て横目に圖の如く刺し上下共に長くしたるなり。八つ口の處は少し足し切を以て縫ふなり。是舊來のに比し唯丈の長きと横に刺したるだけにて帯は從來の通りなり。「黒」は有段者「茶」は一、二級三、四級は「青」等に區別せるは從前の通り各道場の規定に據る。又股引は膝下二三寸の處にて紐を締めるなれども稽古の時は結ばざるも可なり。

新式稽古衣圖式



新式稽古衣の圖解

體育體操法第一圖解

凡體操は少年の頃より諸學校にて教を受けたるものと大差なし。此法を別に教授する處あれど獨學法にても本書に依り何人にも出來得る様書綴あるなり。先づ他人と學ぶ者ある時は其道場又は自宅にても直立して兩手を充分に左右へ開き指先を延して一間四方を自分一人の操練場と定め教師ある時は教授法を以て指揮するものなり。獨學する時には第一に口を結びて下腹に力をこめ眞の位第一圖の構へより爲して順次に習ふなり。口を結ぶ時に唾吐を呑込で力を總身に入れる同時に兩手を攪り第一に頭上へ體に手を附けて押上る事點線の如くなり。第二には兩乳の上の處へ押當兩手を第三にて元へ戻すなり。數回繰り返し次に移るなり。

體育 操法第一圖

第一圖、第二點線、第三點線



體育體操法第二圖解

直立は眞の位第一圖と同じ事にして前條を終りて直に又兩足は八字形の位置となり左足より一尺五六寸も横へ開きて掌を充分に押延ばして裏表揃へて數回爲し后兩手を合して點線の如くに

體育體操法第二圖解

體育體操
法第二圖

體育體操法第二圖解



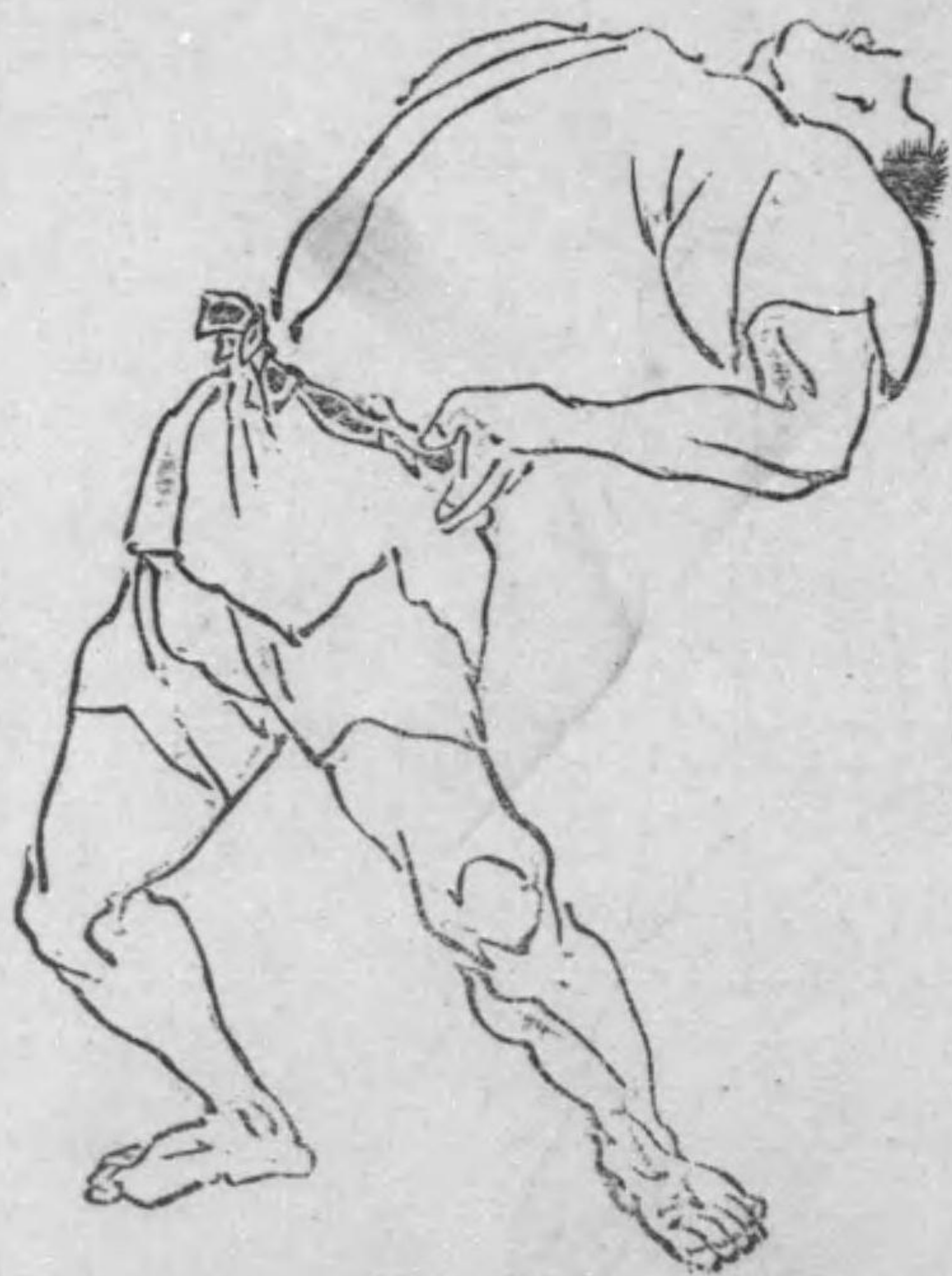
第二點線に合掌して返り居る處なり

なり。反り返る事圖の如し。成るべく反り返へれる丈返るべし。馴るる迄は苦しき故最初は三四回を以て壹度とし然して次へ續ける

體育體操法第三圖

兩手の腰部に當りて身返る處なり

體育體操法第三圖解



様に三四回行ふなり終りには腰より兩手を離しても倒れぬ様に

體育體操法第三圖解

此の姿勢には最初の如く兩足の先に力を單めて圖の如く兩掌を腰の處へ押し當て心靜に次第に後へ返へり半月の形ちの如くして轉ばぬ

眞之位第一圖の姿勢よ打込む様なり



柔術打込の圖解
成るなり此の三圖だけにて體育には充分なり。
又是れより次の順を追て形を爲す時の心得を説明すべし。詳細
は教師用に著はす。

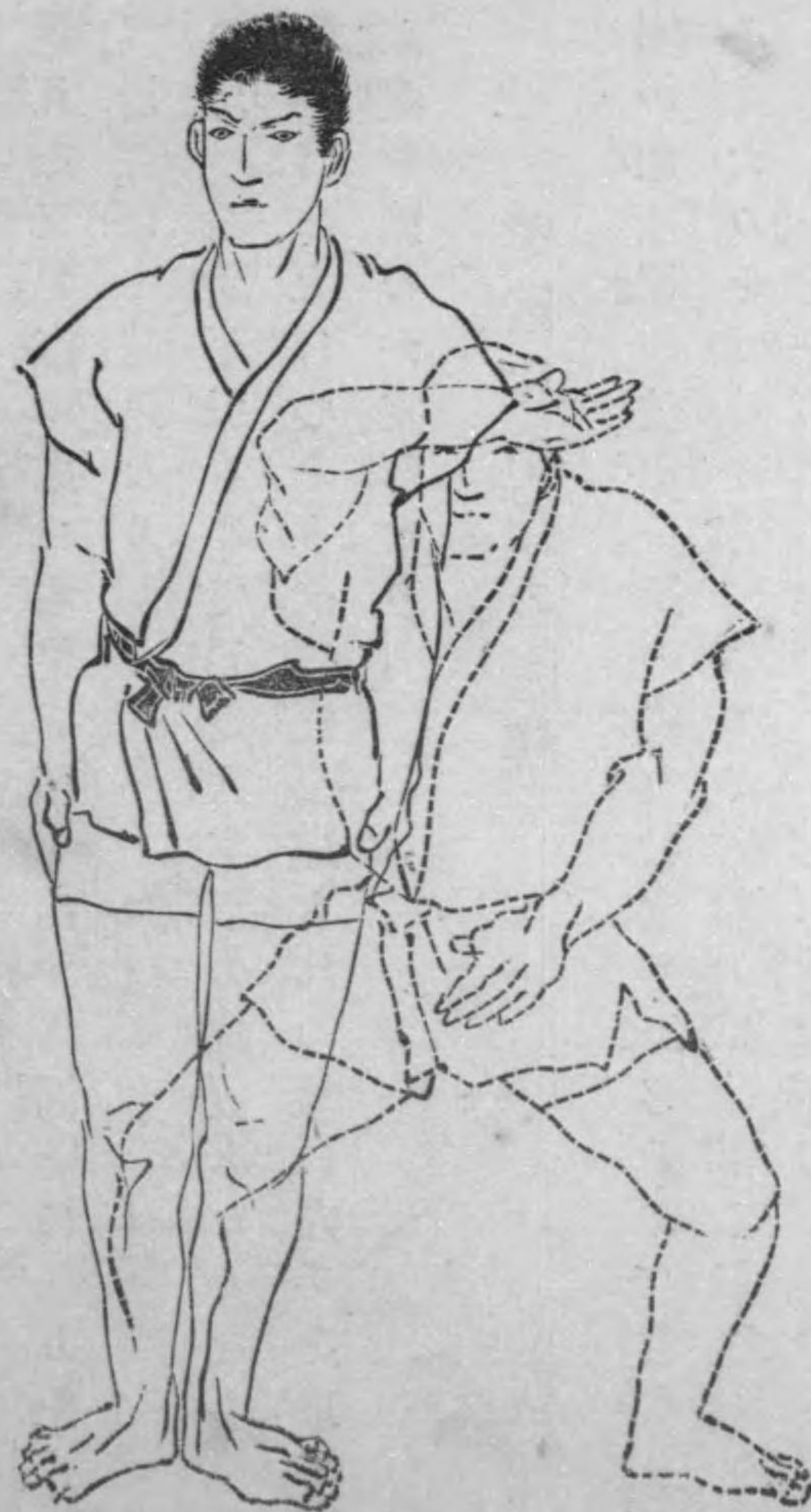
柔術打込の圖解

柔術家の打込と云ふは何流にても同じこと最初眞の位に立居よ
り面前に敵あると假定して(エイ)と掛聲にて右手握り拳を以て前
へ一足凡そ二尺迄の處へ右足を踏み出すと同時に振り上げて(ヤ
ー)と又掛聲にて打込なり。
又元の所へ右足を引着けて元の八字形の位置となるなり。
又打込む時は上に心ある故陰囊を蹴られぬ様に左手を以て圖の
如く陰囊を圍むが定形なり。

柔術片手受の圖解

凡本圖の如く眞の位第一圖の通りに立ち即ち敵より右拳を以て
打込み來たるを受ける構へなれば點線の如く第二眞之位の構へ
になるなり。右手掌を外に向けて前額に横一文字に當て受け留
め同時に左足を横へ二尺位開き腰を下ろし下腹に力を罩め打込
み來たる手首を擱るなり。

片手受圖



此の圖は眞之位第一の構より點線の如くに腰を下げ霞に受止たる處なり

總て是は形に最も必要なり。元の如く直立して終るなり他に種變化あるも形の書として後日著はす時詳細を説明す。

柔術兩手受留の圖解

兩掌向して組合し受留腰より下を足開き構の圖なり



此の圖は敵より打ち込み來たる時に受くるの心得にて第一眞之

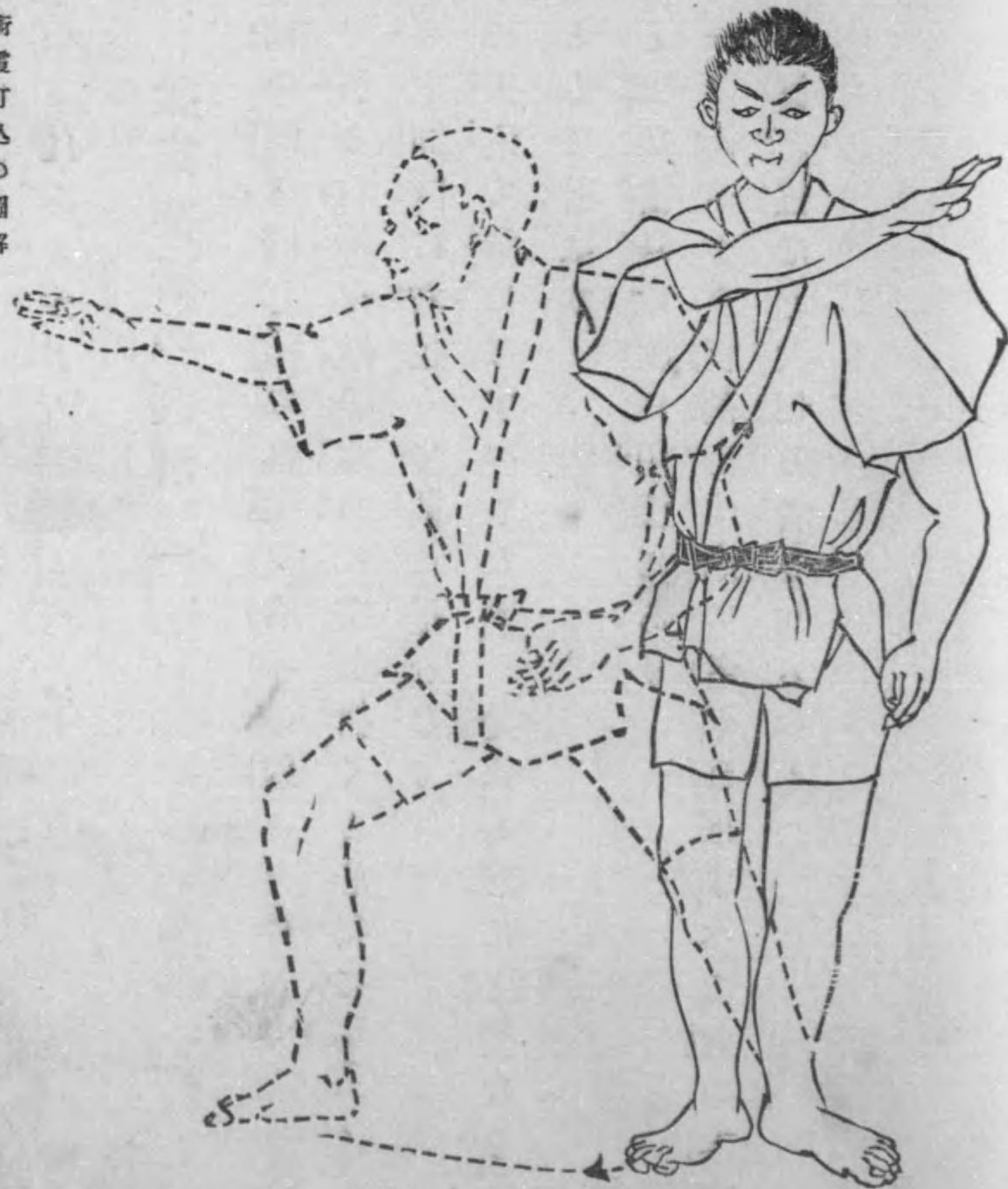
位の姿勢にて敵より打込まれたるものとして行ふ。敵が右手にて打込み來たる時の受け方は兩手を圖の如くに組み敵の眼を

柔術兩手受留の圖解

霞打込の圖

第一の點線引の者の右先手刀をすべし

柔術霞打込の圖解



柔術霞打込の圖解

柔術霞打込の圖解

兩手の下より見るやうに爲を定法とす。同時に右足を後方斜に二尺位の處へ開くなり。又左手を以て打込み來たるときは此の反對に行ふなり。又左り足を引いて開く事もあり是は敵の出方に依る者なり形に於ては右手にて打が定式なり。

此の圖も第一眞之位の位置にて起る者なり。前に敵あると假定して右手の五指を揃て手の側面にて敵の霞俗に蟬谷へ(當身の圖にある)と稱する處を目掛けて打つなり右手を點線の如くに爲し(エイ)と掛聲と共に右足を前に點線の如くに一步踏み出すと同時に我が左肩口より斜に前へ向へ打込を定法とす。左手は右手足の出ると共に陰囊を圍むべし。是れも形に必要なり。正誤 此圖に點線の處は手先が今少上になる事と知らるべし

突掛の圖

眞之位第一の構へより皆割出す處の者なればすべて此の柔術と

柔術突掛の圖解



柔術突掛の圖解

左手は今少下にあるがよしと知られたし。

柔術突掛の圖解

此の圖も前の霞と同じ様なれ共只右手の違ふだけなり。
横腹に附け居る右拳を敵の水月に突き掛くる心得にて(エイ)と掛
聲と共に手と同時に右足一步前に進むなり。
後
指は中に折込で拳になすべきなり。是れも形に必要ななり。
日教師用として著はす。
先に水月と云は當身の圖に明細にあり。
眞之位第一の構へより皆割出す處の者なればすべて此の柔術と
いふものは眞之位ほど大切の者と知るべし

向へ返り第一圖解

此の形は最も必要なり。眞之位第二圖にて起り前を見て四つ這ひに斜に四肢を疊に付けて右足を眞前へ二尺斗り踏み出し同時に左手を疊に付けて首を下げて自分の臍を嘗める心持にて左足を上げて右肩を疊に付けて心持にて右手を疊に付けて向へ返りる事直に引續き第二圖に移るなり。

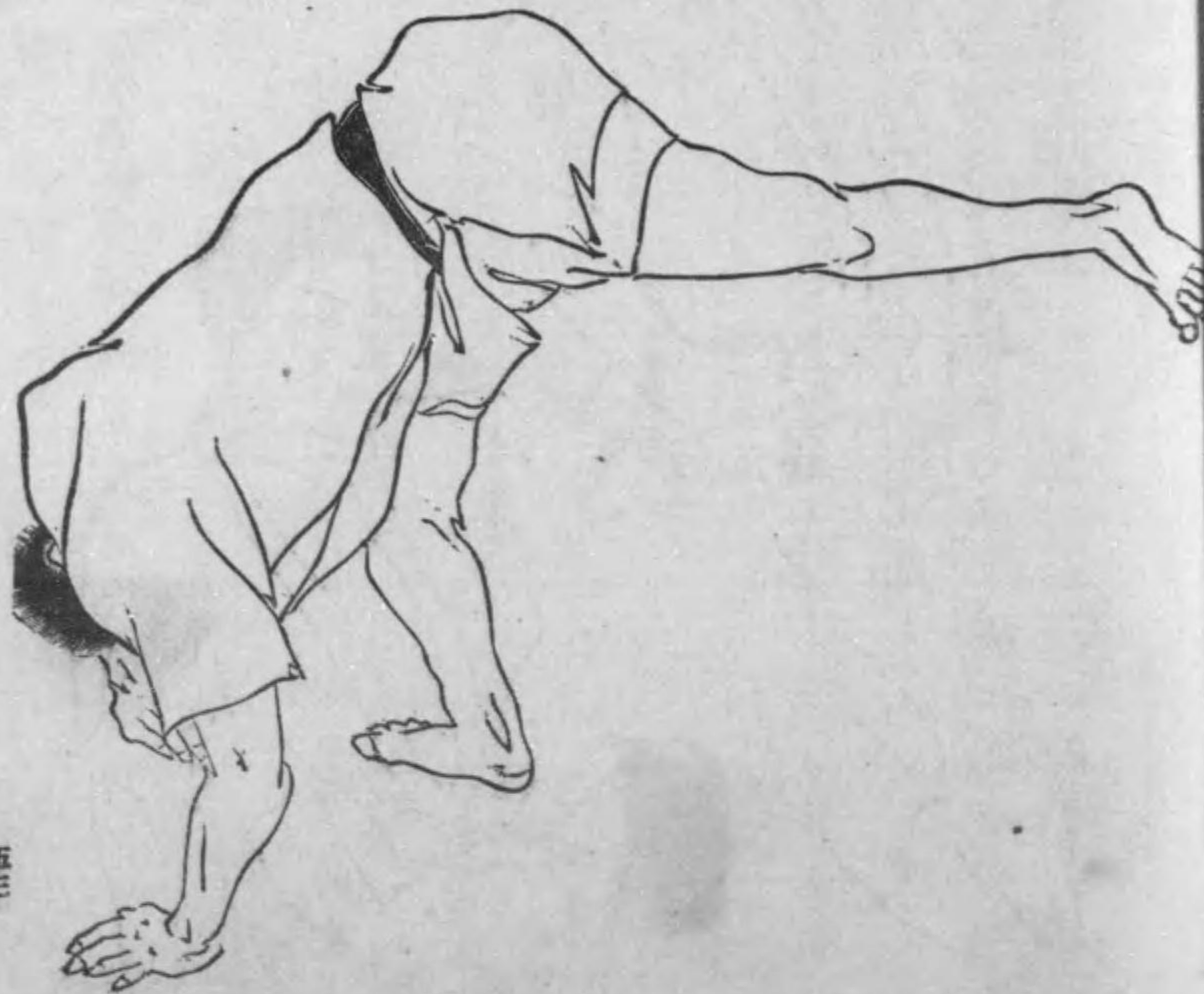
同第一圖解

第一圖より轉ぶ時は右足前へ出で左足は曲げて左手は疊に付けて右手は五指を揃へて横一文字に出すを定法とす。第一圖より引續き轉じたれば直に左手は陰囊を圍み右手は右股に着け立ち上る迄三拍子引續きて行ふを定法とす終らば元の眞之位第二の姿勢に成るべし。

向へ返り第一圖

眞之位第二圖の此りよ勢姿の圖
 向へ返りなる處なり

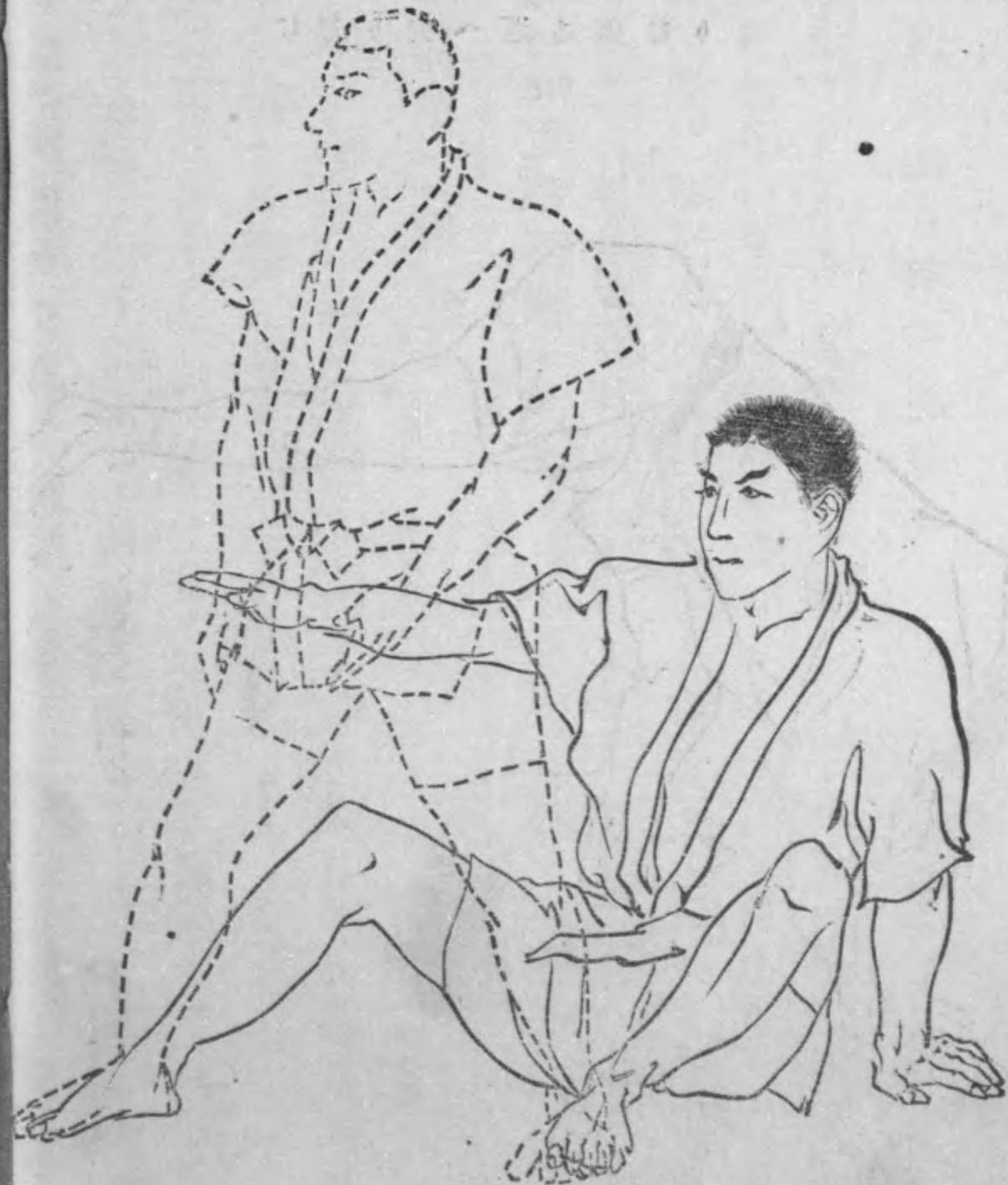
同第二圖解



向返り第二圖

前圖より引續て轉りたる處に直りな線の姿にるし

同第二圖解



五四

柔術後返り第一圖解

此の返り方は修業上最も必要なり。眞之位第三圖より起り座し居る胸部を突かるゝ心持にて第一圖の如く兩足を揃へて右手にて疊を打ち同時に點線の如くにし次圖に移るなり。是に記す姿より點線の如くに兩足先に力を入兩手を疊を押附て頭より後へ返る氣になり右肩を疊に附て起る迄の事又都合にて左肩口より起るもあり。

同第一圖解

右手を以て疊を打ち足先に力を入れ足先より順次後方へ返り足の爪先を疊に着けて元の姿勢となるを定法なりとす。第三圖を見て知るべし。此の處は兩足及び右肩を疊に着て左手を上延し第一圖より返りたる姿なり此は右側より返る處を見せたる處なり此の姿勢より直に眞之位第三の構へになるべし。

柔術後返り第一圖解

五五

圖 二 第 り 返 後

圖の處るたせ見りよ右部背り返へ後き續引りよ圖前

同 第 二 圖 解

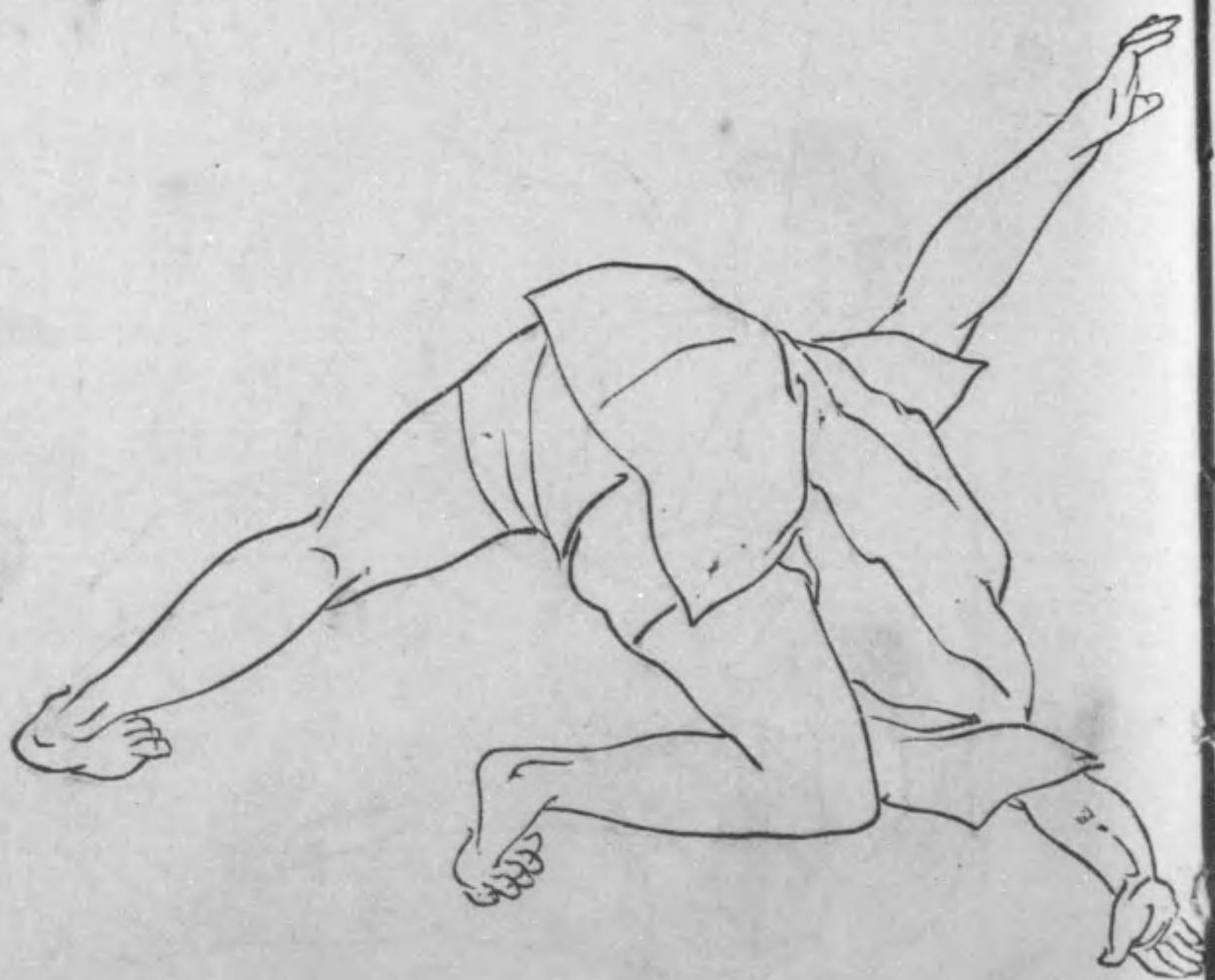
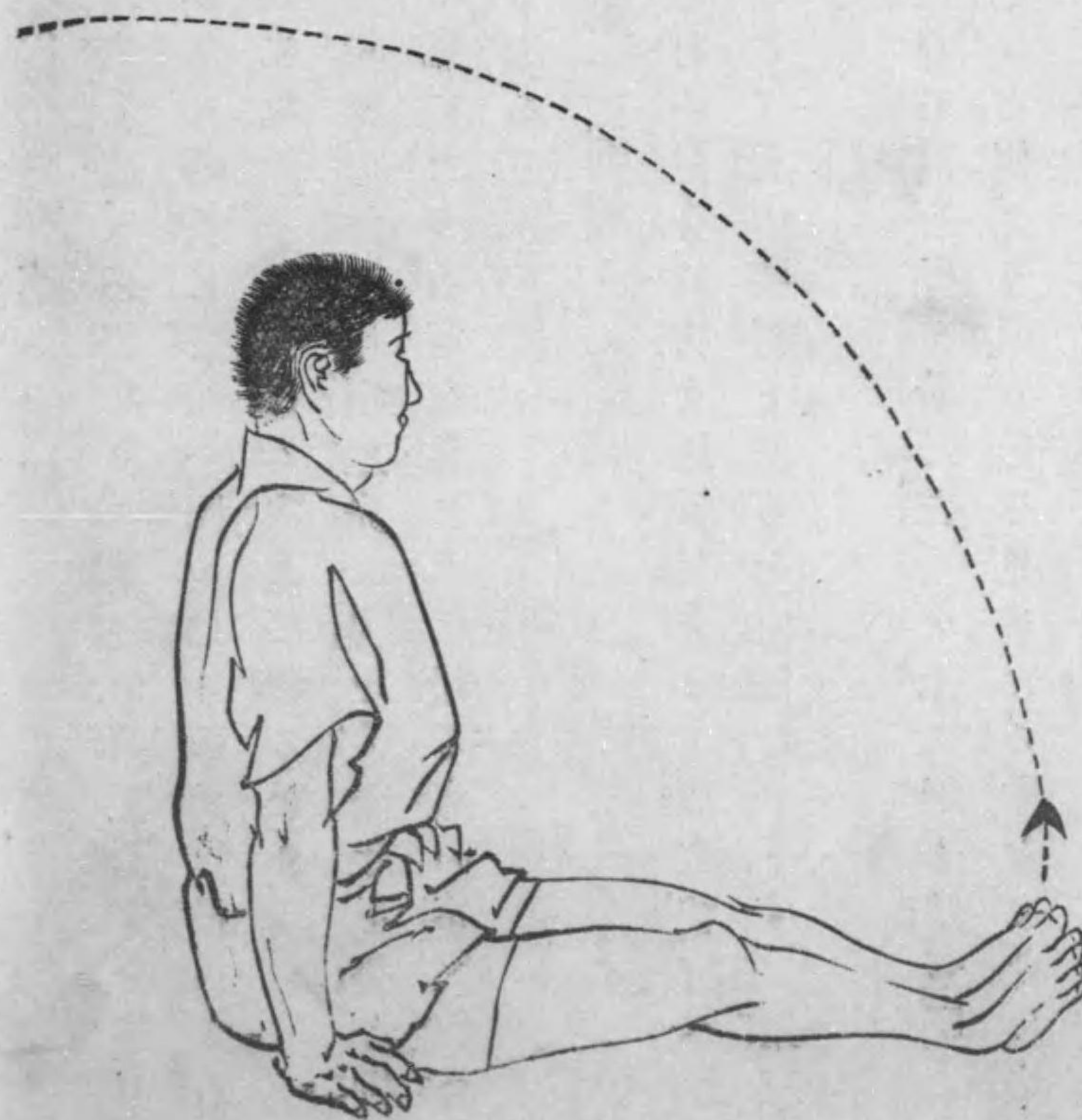


圖 一 第 り 返 後

る返へ後に既入を力に足兩は圖此
りな處る居てしく如の線點

同 第 二 圖 解



後返り第三圖

前より見たる處

此の圖は後返り左側より見たるなり必ず此姿になり毎日



同第三圖解

是れは第三圖の前面なり。後面のみにては解し難ければなり。著者の親切を諒せられよ。是處の姿勢は後へ返り左側より見たるなり必ず此姿になり毎日稽古の時返る事を充分にして置時は亂捕又形の時は大意に廣得をゑるなり。前にも云通り直に眞之位第三圖の構へになるべし。終りを附ぬ時には極めが附ぬゆへ眞之位を以て定法となすべし。

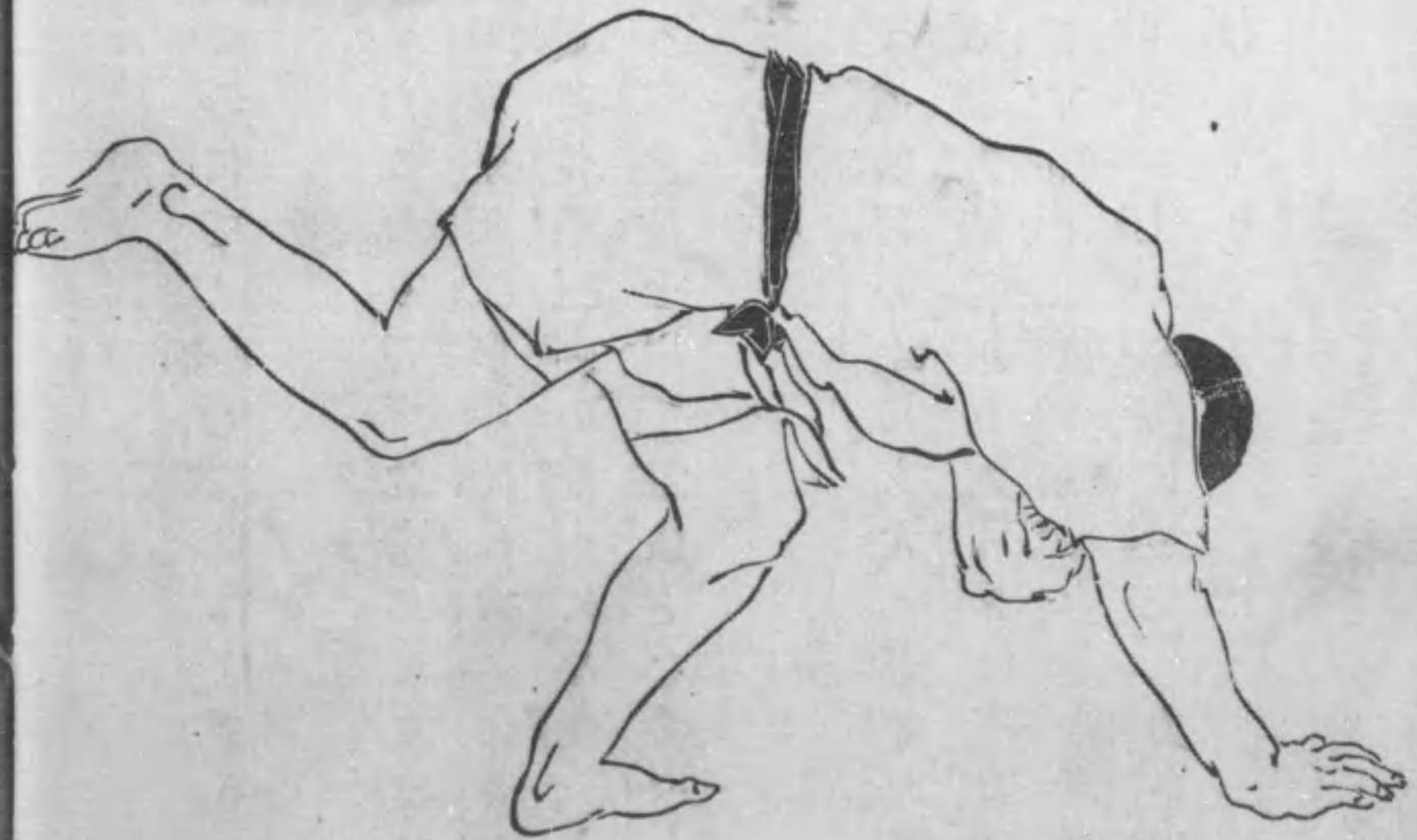
柔術逆立の稽古第一圖解

此の逆立と云ふは體育の上にも柔道練習の上にも大に必要なり。是れを學ぶには羽目板か又は柱の前方約二尺五六寸又は三尺位を隔つて立ち羽目際より一尺四五寸隔てし處へ兩手を疊に附けて横一文字に圖の如き姿勢になり首を上る同時に足先に力を單めて跳ね上がり羽目板へ足を附けるなり。

是は兩足先に力を入れて首を持ち上ると業が好く出来るなり。

逆立稽古の第一圖

兩掌を疊に附て向て既に逆立せんとする處なり

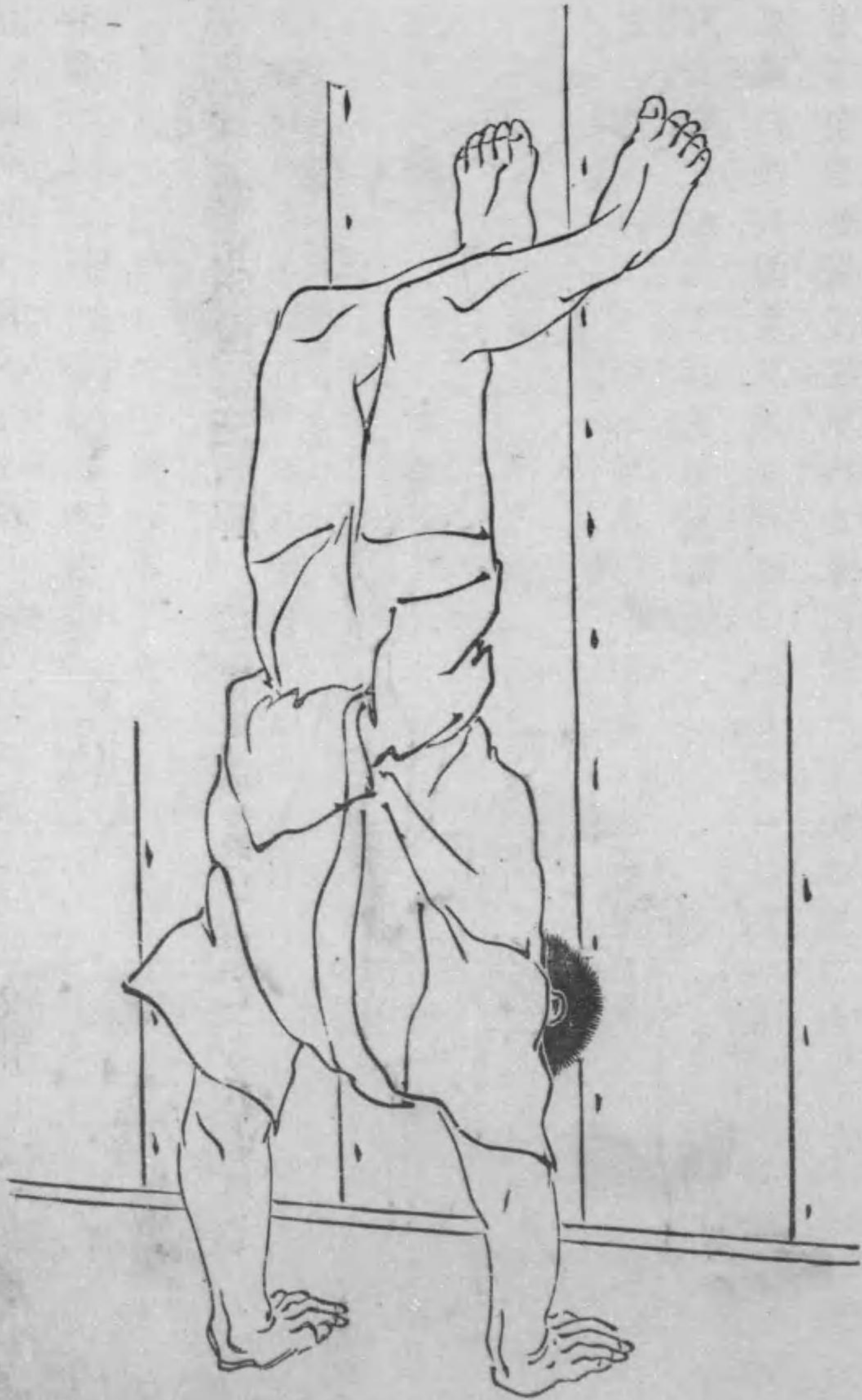


同第二圖解

前の如くにして兩足を羽目板に着けたる圖なり。此の様にして中心を保てば歩行が掌にて仕得る様になるなり。

逆立稽古第二圖

兩足先を羽目板に附たる圖なり



同第二圖解

同第三圖解
第三圖を見て知るべし腰に力を込めて腰をのばし兩腕を充分に押延すべし。

逆立稽古第三圖解

此の處は逆立の姿勢にて兩手にて歩行する處なり



前の如くにして次第に馴れたれば兩掌にて歩行し得る様になれば亂捕の稽古上甚だ徳なり。何となれば敵に投げられし際兩手を疊に附け地上に體を落さざればはなり。昔の柔術家は指先二本にて逆立を爲したりと云ふ。常に是を馴たる時は萬事に必用をかんずるなり。

柔術車返り第一圖解

此の車返りと云ふは練習上最も必要のものなり。投げらるゝ時には身體を地に落さず起き上るに早くして好都合なり。是れを初心の内より稽古すれば體育上にも練習上にも身が軽くなりて便利なり第一圖より二三と接續して一度のものを知るべし。元警視廳世話掛にて二級なりし故中村半助氏は良移心頭流の師範なりしが此人初心者には最初此の車返りを教へたりと云ふ第一圖の如く真之位第二圖より起りて兩手を擴げ右手を圖の如く下

柔術車返り第一圖解

車返り第一圖

此圖は今既に横に返らんとす處なり

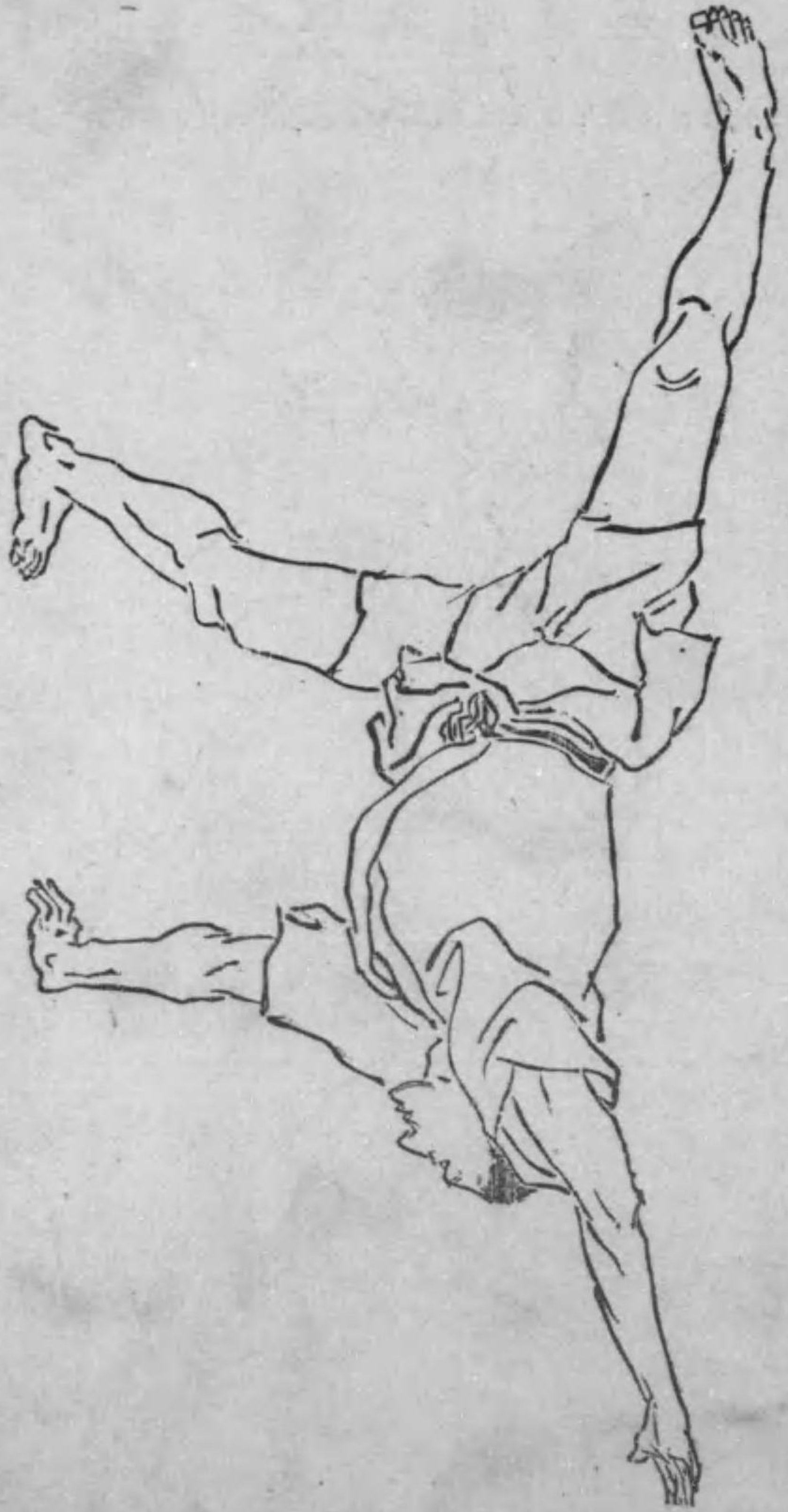


柔術車返り第一圖解
にし左掌ひだりてのひらを上うへに向け兩足ふたあしを横よこ一文字いっぺんじに開ひらき。第二圖だいにに移うつるなり。

六四

同第二圖解

此圖は今既に横に返らんとす處なり



同第二圖解

六五

車返り第三圖

前々より引き第一圖二まで直に起上りたりなる



同第三圖解

左掌を地に附けて右手を疊に附けると同時に右足先に力を入れ第二圖の如くに爲して直に横に成るなり。最も是れは順序を早くすべし腰業なれば第一圖より第二圖の如く両手を擴げたるまゝ起き上る迄は唯腰だけの働なり。是は總身を軽くして横へくと道場の廻りを數度なす時は次第に上達する最も亂捕には大必要なる事後に知るべし。

同第三圖解

第一圖より第二圖に至り此の三圖に於て壹手の形となるなり。第一は左手を上にして第二圖になり此の起き上る圖になるなり。即ち第三圖は第一圖と反對に右手を上にして左手を下になるなり。能く圖の手足の働き方に心を留めて勉むべし手を執りて教ふる事能はざれば讀者熟讀して習ふべし。

同第三圖解

柔術飛上り稽古第二圖解



圖二第古稽り上飛

先爪は足兩處るたれ入を力り上飛は此
る止てへ揃を足兩りなるけ向に下を

六九

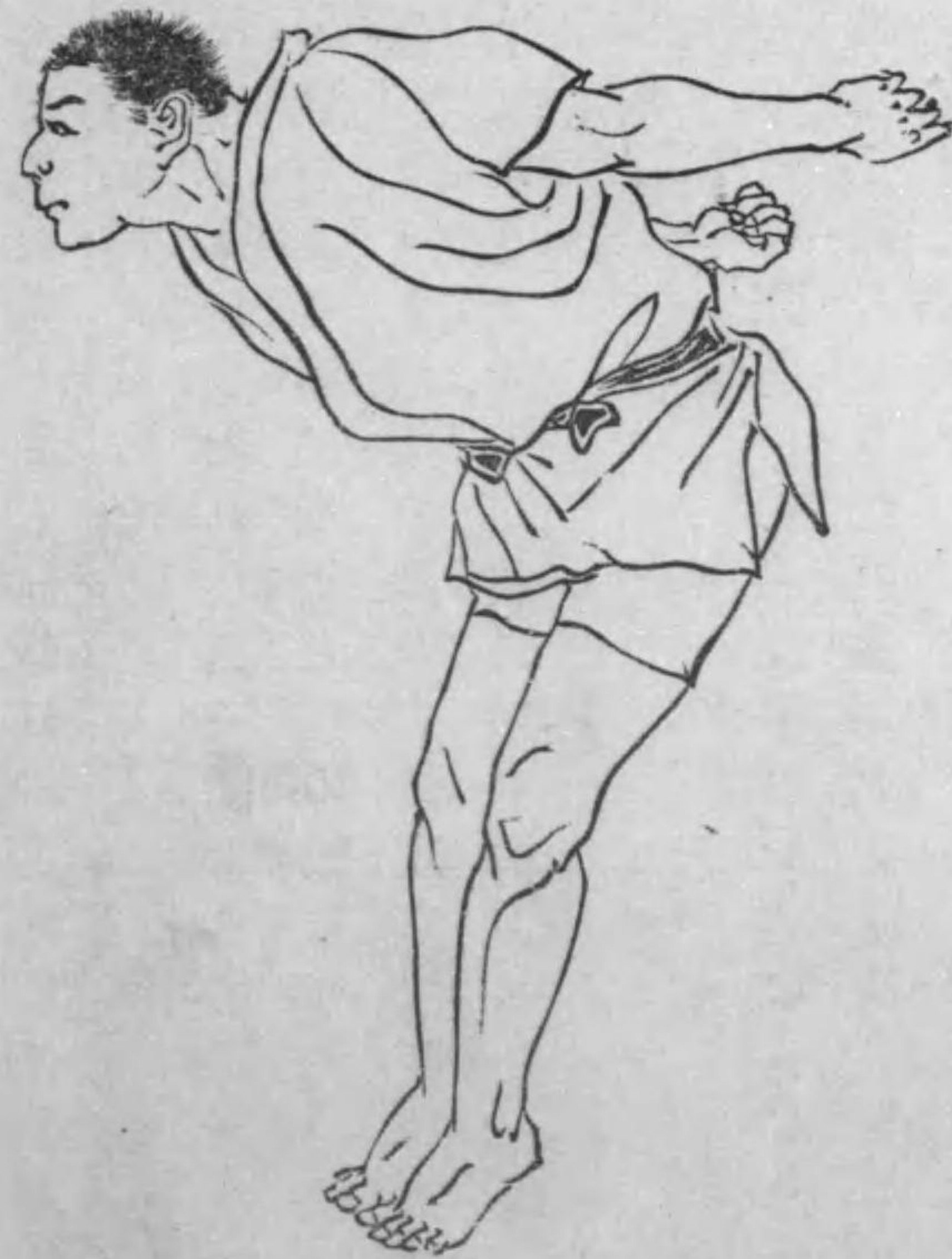
四尺

三尺

二尺

圖一第古稽り上飛

りなへ構すなに飛足一り握を手兩



柔術飛上り稽古圖解

是は高く飛び上る事の稽古なり流儀に依れども昔は最初より飛

柔術飛上り稽古第一圖解

六八

同第二圖解
上りを教へたるものなり。最初のうちは亂捕を教ふる前には必ず返り、反り、車返り、高飛を教へたるなり。

柔術家としては體育上及柔術練習上必要なれば上達する様稽古を爲すべし。

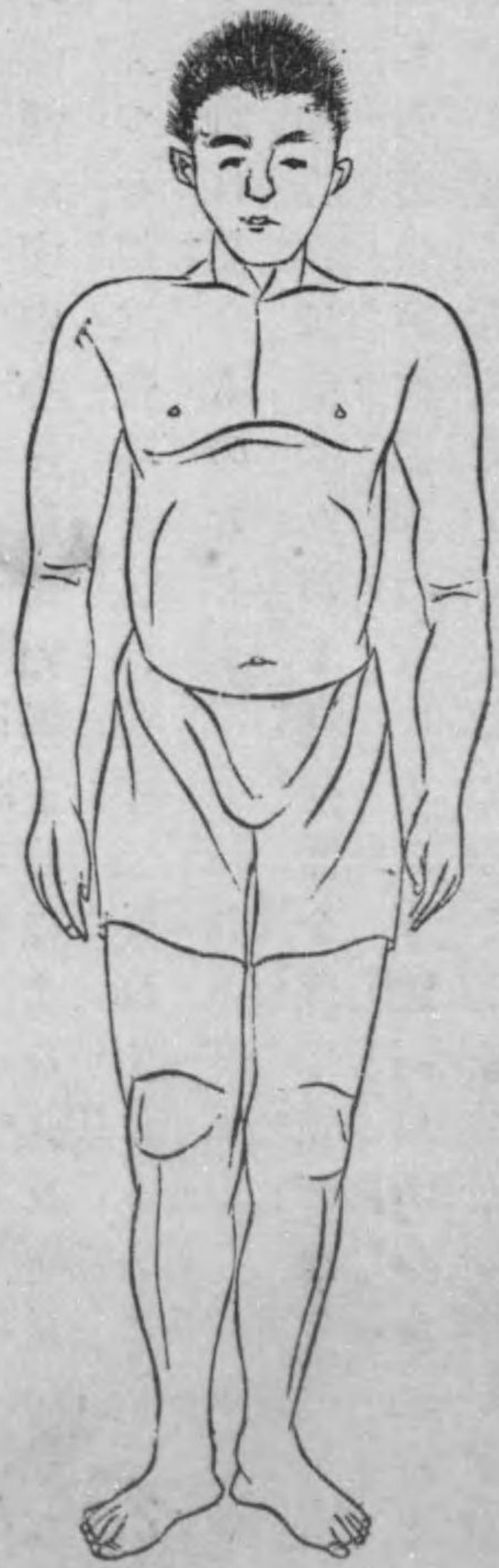
高飛を爲すには第一圖の如く兩手の拇指を掌の中に折り込み、兩足を爪立ち爪先に力を入れ口を結びて下腹に力を單め身を軽くし飛ぶ心得なり。

廣き地所の有處にて二尺斗の高さの土堤を築き又其上に罌粟種を蒔て次第に延るにしたがい高く飛べる様になり、外順次三尺余にのびる時は五尺余も飛上る事が充分に出来る事あり。

同第二圖解

兩足を縮めて飛び上り下る際は爪先を揃へ身を軽くして下るなり。此圖は飛上りたる處なり初心のものは最初二尺位の土手を

眞の第一位圖
何気なく立直るをたしをるなり
眞之第一位と云ふなり



柔術眞之位第一圖解

築き其上に芥子の種を蒔き次第に延て花の咲ころ凡そ二尺ほどとなりし上を花に觸れぬ様に次第に稽古する内に身も軽くなるなり。自宅又は道場にて爲す時は紐にて圖の如く二尺位より次第に高くすべし終には四尺五尺と高く飛ぶ様になるべし。

總て柔術は眞之位が第一の心得なり。凡武術斗りでなく總身を

柔術眞之位第一圖解

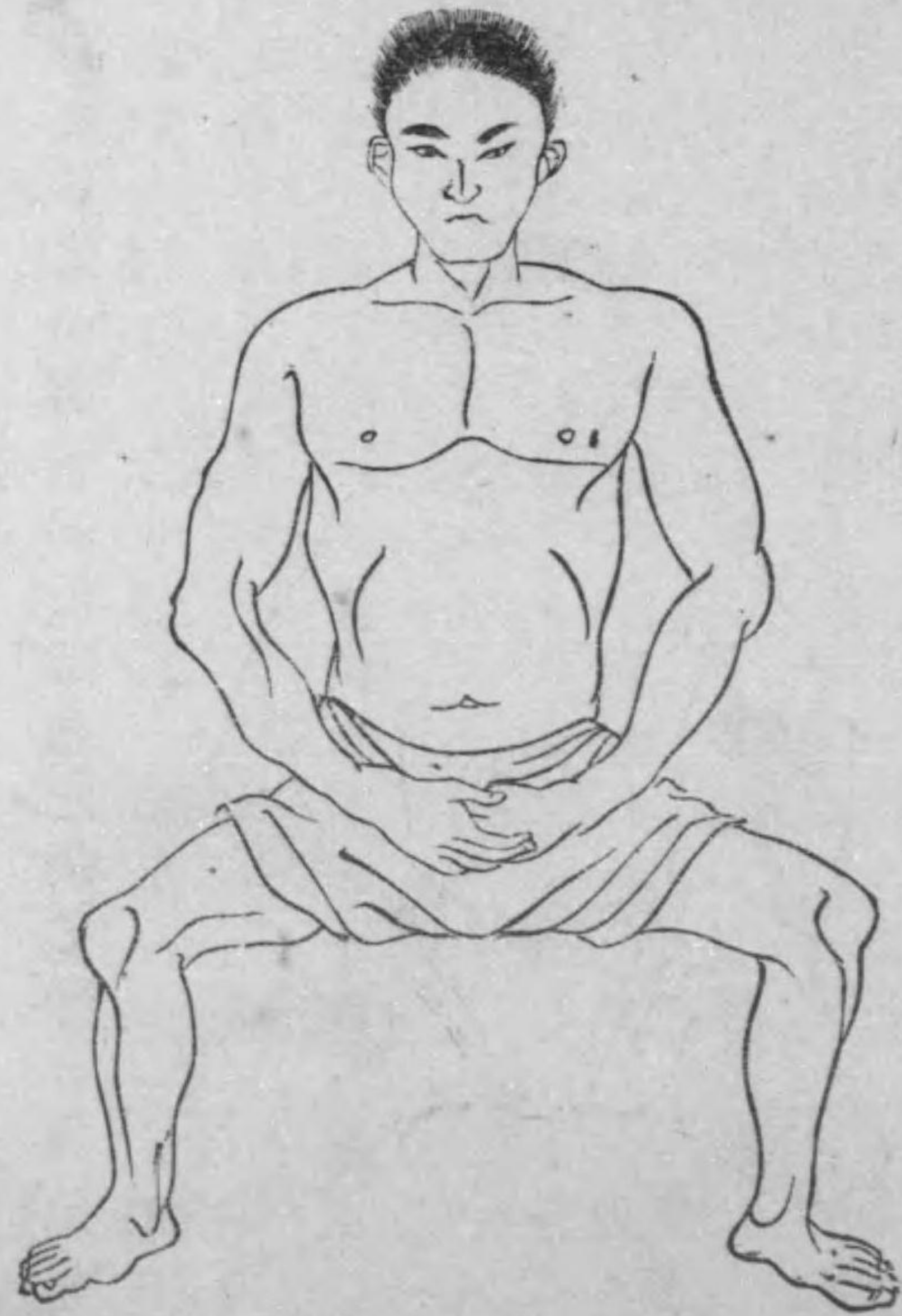
同第二圖解
七二
働かす業をなすものは眞之位取と云ふが大事なり。
此の圖は第一直立眞之位にして變化は種々あれども眞之位と云ふ事は身體傾かず中心の崩れぬ様下腹に力を入れて口を結び無念無想到立つを眞之位取と云ふ腹中に亂れあるときは臍下の氣息抜ける故倒れ易きものなり。
此圖五種は初心者に能く解かる様裸體を以て見せたり。
又眞之位に付此位六ヶ敷事はないのです總身に力身を込ると又身體堅くなり氣が満る又位張と云ふ次第にて前に云ふ無我心と云ふ心を持つて氣を鎮着てする事大肝要なり。

同第一圖解

眞之位の中身と云ふて正面を白眼兩手にて陰囊を圖の如く圍み兩足は横一文字に開き爪先及下腹に力を罩め腰を少しく下げて總身に氣息充分満ちたる處を云ふなり。

眞之位第二圖

兩肩よ下腹に氣を込めたる處なり



眞之位取五種とも總て形の基本なれば充分に會得すべし變化自在の構へにて第一より順次を追て卷中にも眞之位第何圖と云事

あり故に此の定式法を能く心得るべし。

同第三圖解

眞之位平座の圖なり此の構へは正面を白眼て體を眞直にし下腹

眞之位第三圖

らかいを肩構の身中位之眞
りな處るた見を面正にすさ



に力を罩め兩膝を開きて座し兩肩を下げ兩手を股の處へ載せ口
を結びて總身に氣息を満たし中心の崩れぬ様に爲すべきものな

都而柔術手合形及亂捕の稽古を爲すに當り位取の心弱ければ隨
而て業も速かならざるものなり。
最も此中眞之位に附ては受方の構へ敵に投られるも投倒すも殘
心附る迄の種々の解説あり其内にも形捕にはこの構へを以て居
捕の時は大事の構へなり教師用の著書に充分なる解説をなす。

同第四圖解

此の形は平一文字と云ふて左膝を突きて踵を肛門の處へ當て右
足を開きて爪先及下腹に力を罩め正面を見て兩手は陰囊を圍む
を平一文字と云ふ。
柔術の形捕の切は必も捕方構へにて敵に向ひ進出るも又敵を投
て殘心を附るも此構への大事なる事をしれ。

眞之位第四圖

此の構は本文に云ふ通り形方

の圖に俗に一字と云ふ

同第五圖解



七六

同第五圖解

此の圖は平の構へといふ。

第一圖の位取に兩膝を開きて地に突

眞之位第五圖

正面眞之位の構へを著したる圖なり

き兩足とも爪立ち身體を眞直にし下腹に力を入れ正面を白眼で
兩手は陰囊を圍むことおなじ圖の如し。
此も形の捕方の構へにて右膝頭を疊に附て左り踵にて肛門の處

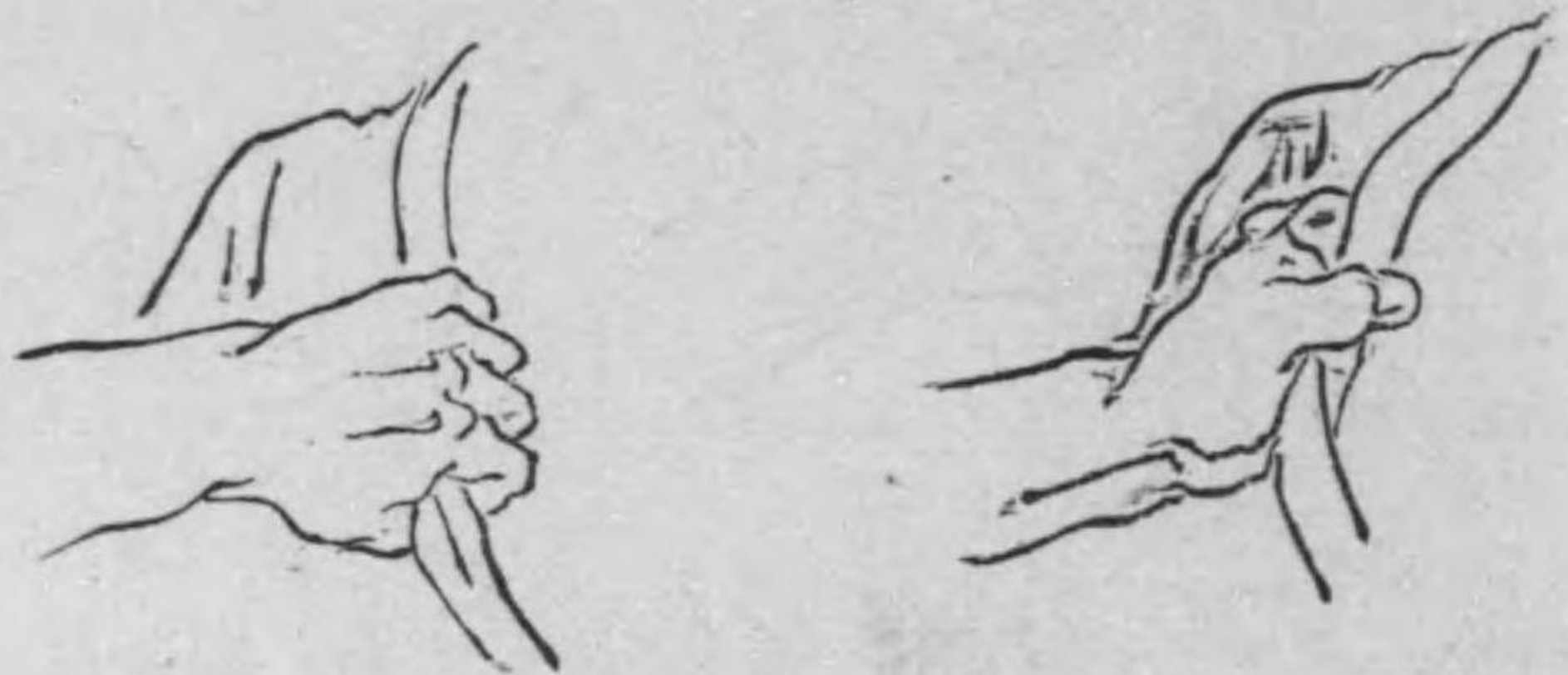


同第五圖解

へ當る又亂捕に立上り前には一時は此構へより崩れて捕に掛る
者としれ。

七七

左襟を捉みたる圖 同逆の捉み圖



同逆の圖解、帶捉み處の圖解

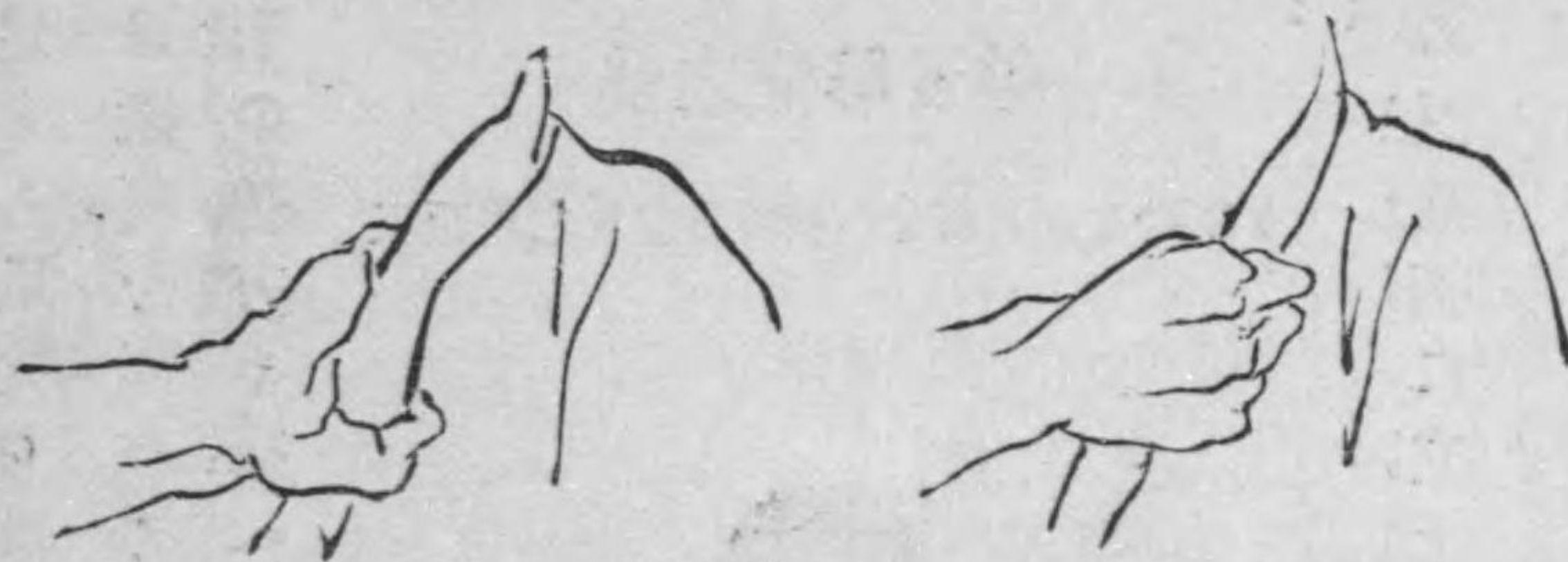
右と別に違ひなし唯左襟を左手にて捉みたるだけなり。敵の襟を取るには双方共に肩より四五寸の處を捉むを定法とすれども人には身體の大小其他の都合もあれば必ず其れとは定ず其場合に臨み定法に大差なき程度にて取ることゝ心得べし。

同逆の圖解

右の逆の反對なり他に變る所なし攔み處の名稱は左右襟帶袖口上下入ツ口等は一定の捉む所なり形亂捕等は總て以上の所を攔みて種々の業を施すなり。

帶捉み處の圖解

右襟を捉みたる圖 同逆の捉み圖



右襟の取り様の圖解、同逆の圖解、左襟の取り様の圖解

右襟を取るときは小指より紅指と順に力を入れ人指は軽く握ること總じて襟を取る時は、拇指と小指に力を入るとが定法と知るべし。

同逆の圖解

右襟を逆に取るには拇指を外部に現はし圖の如く爲すなり。此手は形及絞めに用ふるなり。亂捕の時は成るべく逆手は用ひざるが宜し。

左襟の取り様の圖解

帯を捉みたる圖



同逆捉みの圖解、喉締の圖解

都而柔道稽古の時は帯は必ず前にて結ぶべし。是れは結び目が後にては仰向に倒れし時危険なればなり。掴み方は袖襟同様に握り前後左右を圖の如く掴むなり。

同逆捉みの圖解

逆と云ふは掌を上に向け掴むを逆と云ふ掌を下に向け掴むを順と云ふなり。解り易ければ説明の用なし。是は掌が下になり居は誤なり。

帯を逆捉みたる圖



喉締の圖解

此の締方は種々あり亂捕組打の時に締めるは圖の如く爲すを利益ありとす。

喉締の圖



敵の内襟を右手の拇指を深く襟裏に入れて掴み左手にて敵の上襟即ち左襟口に拇指を襟の表にして掴み兩腕を横に張り敵の脛の下を締るを定法とす。

種々あれば此には略す。締方の解説は卷末の締固めの部に

亂捕禮式立合の圖解

禮式法には雙方東西より立ち出で見所又拜觀者に向ひ一禮を爲して四角或は東西に立つ検査役及中央に控へ居る助技者に一禮して東西に別れ五六尺を隔て、相對して一禮す行事も同時に中央に出で△形に成るを三角或は魚鱗の構と云ふ定法式に位取をなすべし。

眞の位第五圖構へを爲して雙方注目して他に目を散らさぬ様慎

亂捕禮式立合の圖解

甲者一禮を爲す構の圖解

甲者一禮を爲す構の圖解

以を疊て打を禮して上立ちを構るの圖

むべし。此の圖の如く構へ居れば行事は「しつかり」と勵ますなり。同時に一禮して立ち上り雙方共同じ捕方を爲すなり右手にて敵の左襟を取り左手は敵の右の袖口なり八ツ口なりを攔むなり。敵の身體の大小又は力量などを見るには前條に述べたる通り試るべし。敵の腕前を見抜くが第一なり。



左の一禮を爲す構の圖

乙者甲の顔を以て見右て掌を以て

疊て打を禮して上立ちを構るの圖

定法式は右より出づると同様なるも右より出づる者を我より上手と心得べし。上手なりとも臆する勿れ。勝負は時の運なり先が引かば我亦引いて心見るべし敵の様子を見て常に得意の業を充分に振ひて勝も見事に爲すを宜しとす勝負濟み次第元の如く一禮し監査役及見所へ兩人並んで禮を爲し引下るを定法な

甲者一禮を爲す構の圖解



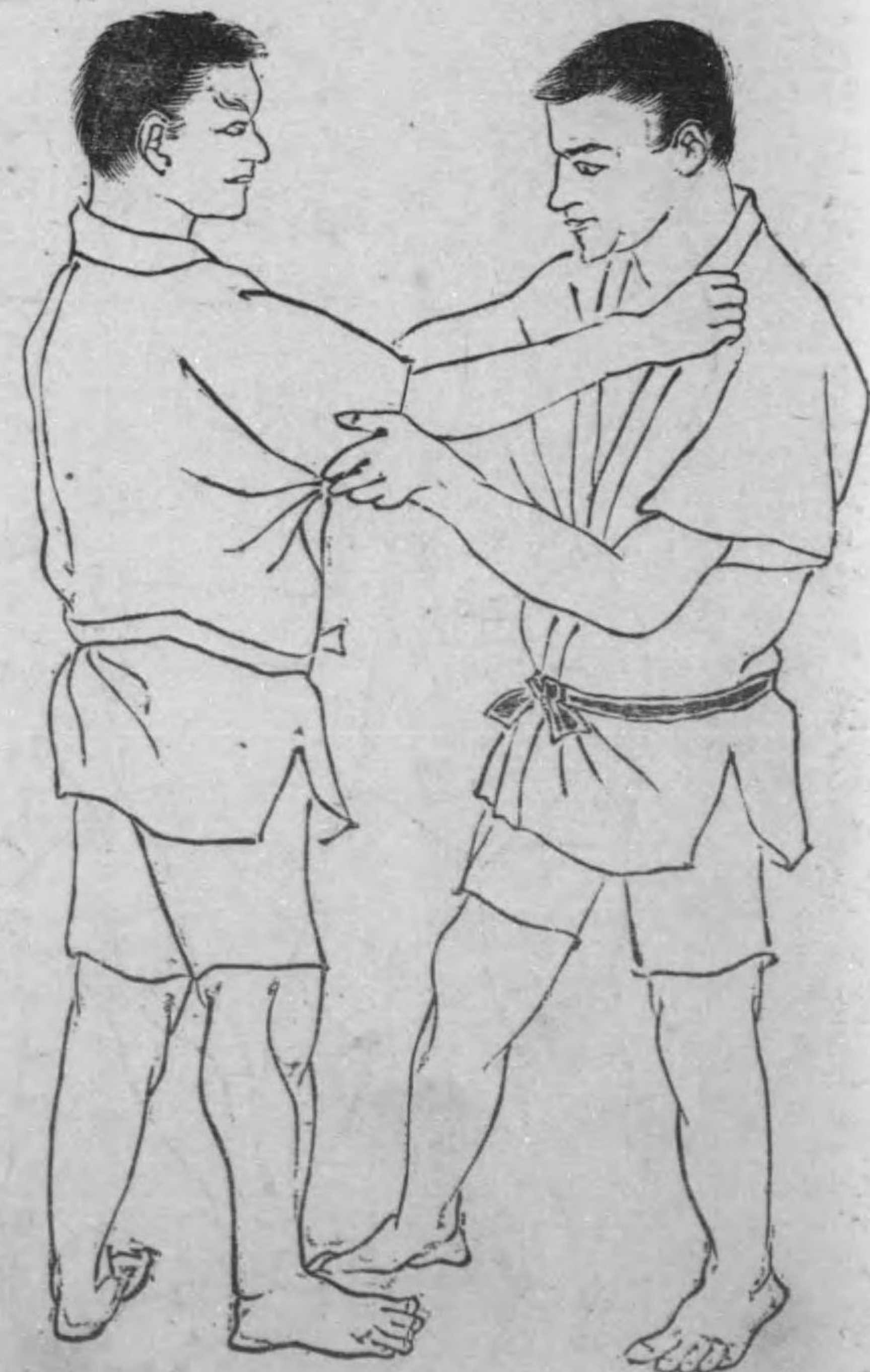
りとす。
 道場に於ける常の稽古は只教師に禮して。
 雙方右手にて疊を軽く打ち同時に立ち上るを定法なりとす。
 甲乙者ともに貴人拜觀者ある時は東西の控所も正面に向ひ前
 條の通り兩人立揃て立出て禮式をして下り道場の中央を定て亂
 捕に取掛るべし。

雙方立ち上り圖解

都而立ち上る時雙方は圖の如く爲すなり。是れより何業にても得
 意の業を掛けるなり。最初凡そ三尺程の距離を隔て、立ち上り
 雙方共に右足を一步づゝ踏み出すと同時に雙方注目しつゝ右手
 を以て雙方の左襟を掴むこと前條に述べたるが如し。

襟取り居る圖

下の口袖と襟り上立に法式定は者乙甲
りな圖の處るたみ摺を

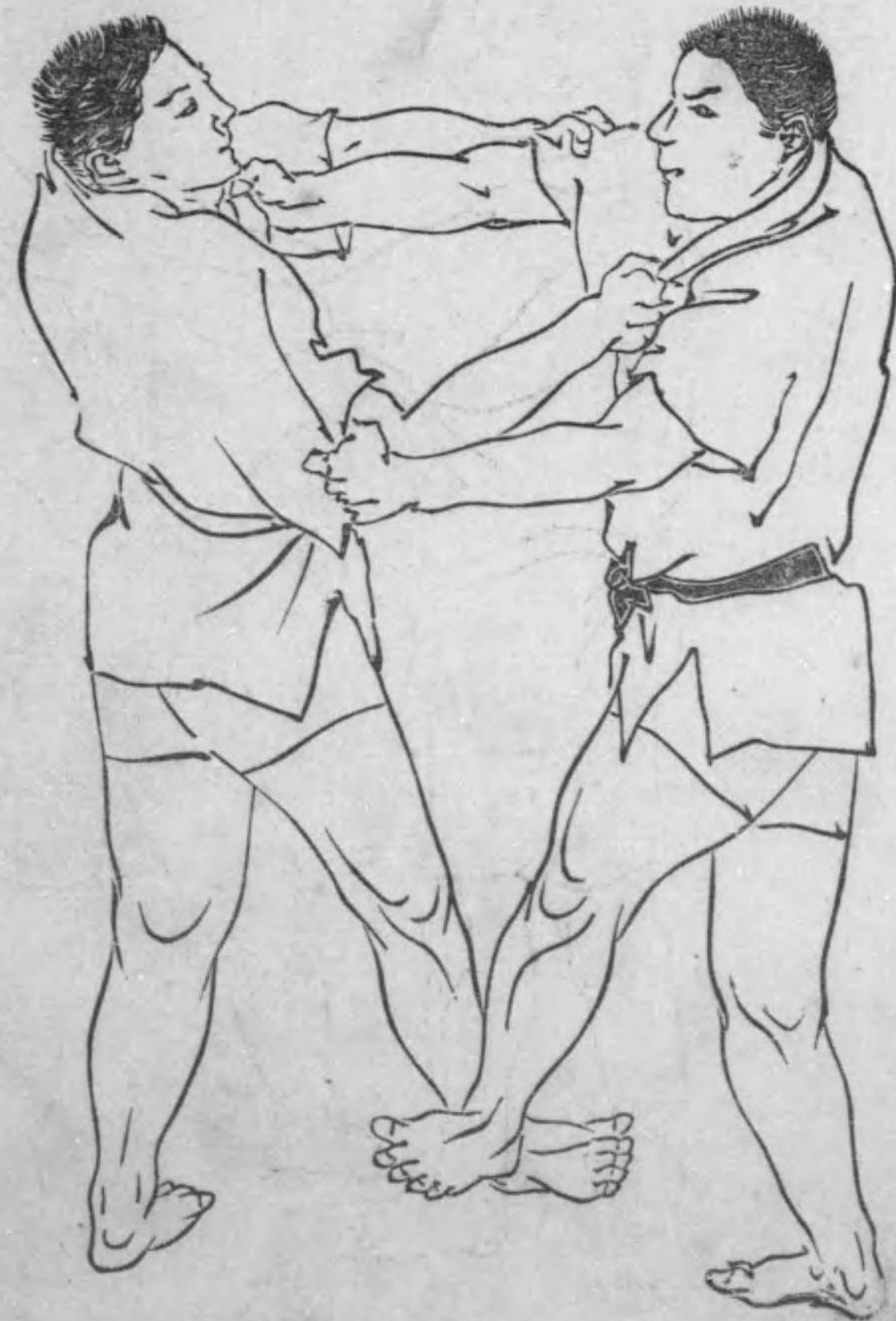


柔術足拂の圖解

甲者は乙者を我が方へ引附けて見て引き出でたる時に乙者の右

足拂圖

甲者右手を延てし下手左へ引附て左足裏の裏に横てに
に拂ひ敵を既倒にすとの所圖



柔術足拂の圖解
足の外踝の處を左足裏を以て掬ひ上ぐる心持にて横一文

ふなり其同時に右手を充分乙者の左乳の上の處へ押上る様に

左手は下へ引きながら我が體に引寄せ乙者の身體を斜に崩し同
時に右足を拂ふて倒ふすなり。注意甲者は右足先を一寸右の方
へ向るべし。

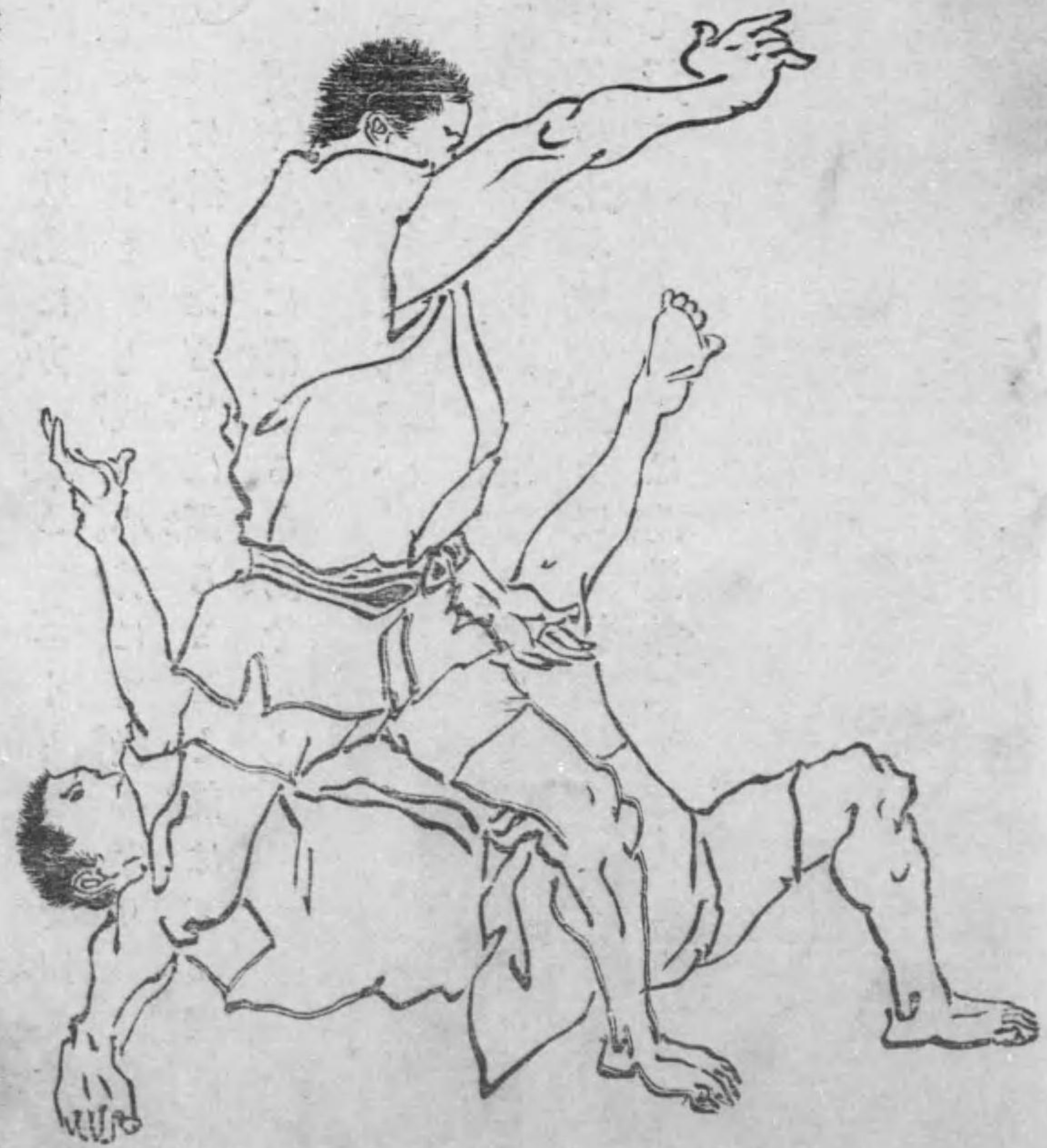
柔術釣鐘足拂圖解

此の業は敵を引出して敵の體の崩れかけたるに附入り左手にて
敵の右袖口を掴みたるまゝ上に引き上げ右手にて右襟を持ち上
ぐると同時に我體を左へ斜に少しく開くと同時に右足を以て右
膝裏を點線の如くに拂ふなり。
敵の身體を釣上げる故に足に隙を生ずれば倒れ易きものなり此の
形を講道館にては大外刈と云ふ。

釣鐘足拂第二圖

甲は敵を我が左脇へ投たせしむる所の圖なり

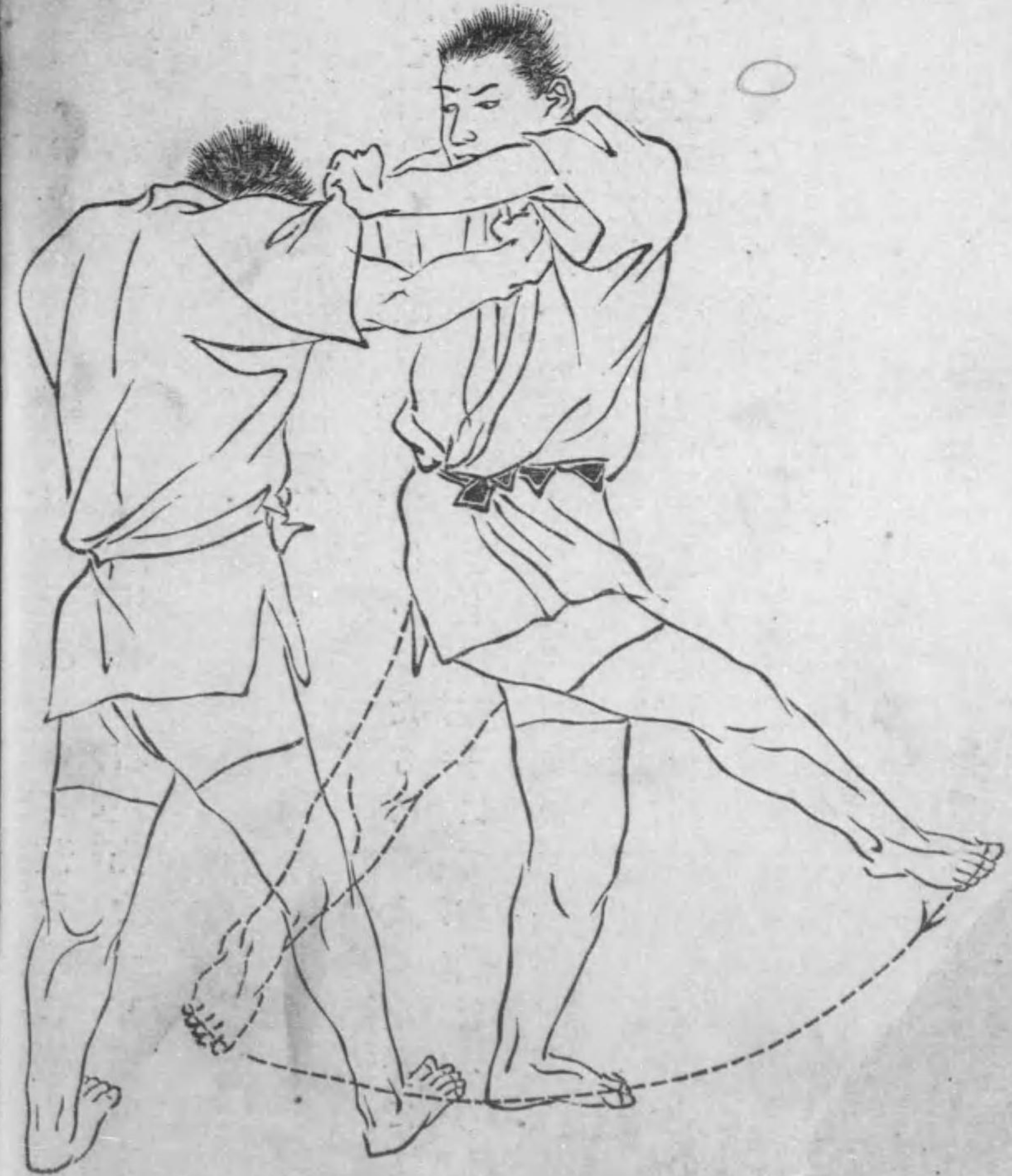
柔術釣鐘足拂



釣鐘足拂第一圖

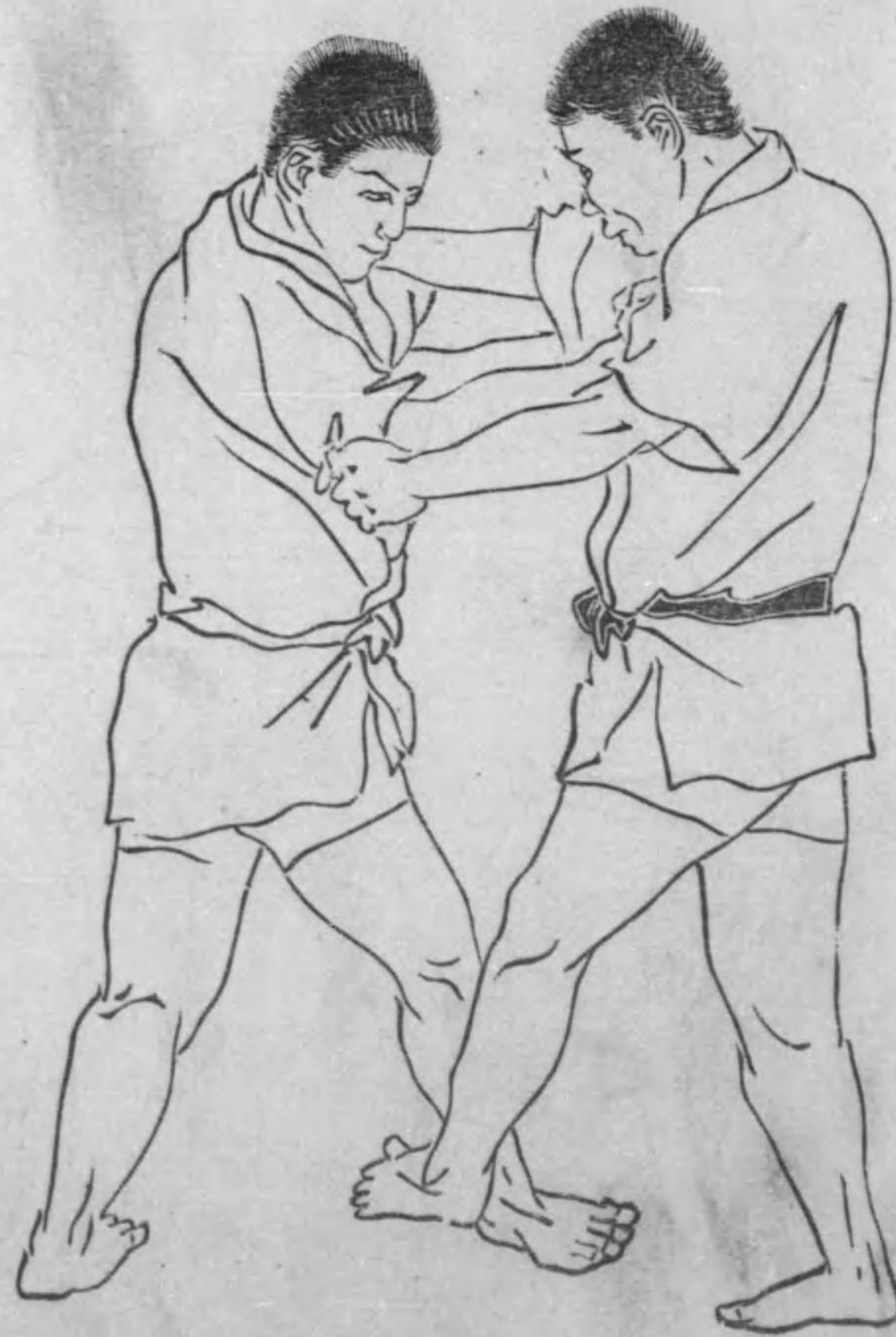
甲が乙の體身を崩して乙の裏膝の處の點線を拂ひたる所の圖なり

柔術釣鐘足拂圖解



外掛足拂圖

此の捕方は前々足の拂と同様のなるも敵の體の崩方を手にて方々に違ひあひ今外黒節の處に掛る所の圖なり



柔術引込足拂圖解

柔術引込足拂圖解

柔術外掛足拂圖
九〇
敵を投げ同時に左爪先に力を單めて(エイ)と右足を以て拂ひたる
と共に我が左へ兩手を廻し投る心持にて投るなり。
敵も此の拂ひ足に掛りたる時は遁るゝこと能はざれば左手にて
疊を打ち體の強く地上に落ちるを防ぐべし。

柔術外掛足拂圖解

互に足の外踝の處を拂ひ試て兩手の働にて敵の身體を崩し弱腰
に成る處を左足の土不踏の處を以て掬ふ様に(エイ)と掛け聲と共に
に足を拂ひて倒すなり。此形は講道館にては小外刈と云ふ。

引込足拂圖

此は文中章に言ふよ甲り者乙の者
身體を斜に崩して引込て敵の草靡の處を拂ふ
左足の土踏に拂ふ處の圖なり



柔術引込足拂圖解
敵を向へ押附くる心持にて押し行けば敵は押されじと押戻すな

り其の機に乗じ敵を前へ強く引き出し同時に両手に力を罩めて

右にて敵の左の肩口を押し付け左手にて右袖下口を下へ引いて
敵の身體を斜に挫けば敵の足に隙を生ずる故直に左足の土踏
の處にて敵の右足の草靡の處を拂ふて倒すなり。

柔術押附足掃の圖解

此の押附と云ふは前と反對にて敵を引き附る心持ちにて二三歩
後へ下るなり敵も引れぬ様身を後へ引かんとするなり其の機に
乗じ敵を突き戻すと必ず上半身に氣の満ち居る爲め足の弱くな
るものなる故右手を充分延して左手は敵の右袖口の下を掴みた
る儘左足の土踏にて横に拂ふべし右手は押し左手は下へ引き
附け左足にて拂ふ此の三つ柏子にて(エイ)と投げ附くるなり。

内黒踏掃圖

此形は敵の内黒踏の足を土不踏にて内直ばれ掛が足しべふ拂くき大へ外りよしべす倒てし崩を體身の敵てに手兩に



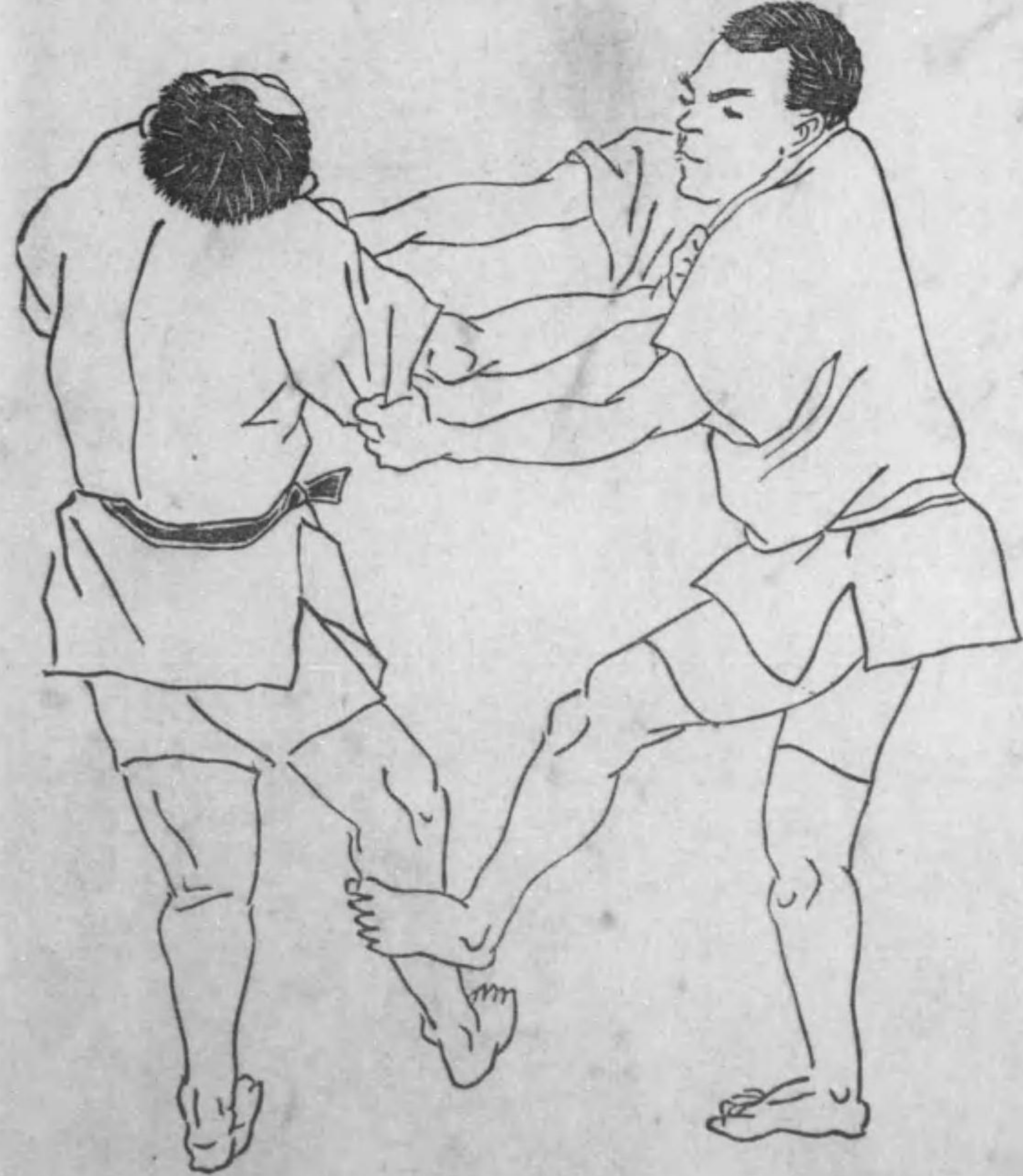
柔術内黒踏掃圖解

双方共に兩手は同じに取り互に引き出さんと爲すなり。敵の左

柔術内黒踏掃圖解

押附足掃圖

此形の前はと反對に敵へ向て押附て體身なり圖處の拂を足に直で込見を崩の



柔術内黒踏掃圖解

足出る時左足の土不踏の處にて内踝の處を外へ掃ふと同時に兩手にて敵の身體を斜めに崩して是れも三拍子揃へて術を施すべし。乙者は足を掛させぬやうに足を引いて跳るべし。

左外れたれば又右足にて爲す兩方數度して内腰を崩し兩手のききたるとき敵は必ず我が術に掛かるなり。

總て亂捕の始めは斯の如くして試みるべし。

この形は講道館にては小内刈と云ひ眞揚流にては内踝拂ひと云ふ。四肢の働き充分ならしむるが肝要なり。

柔術大内股投圖解

此の大内股と云ふは大亂れに組打を爲す内に我が左手は敵の前帯なり八つ口或は袖口を握り右手に敵の上襟の首際を取り兩手にて上半身を崩すと同時に敵の兩股へ我が右足を差込みて敵の左内股を押し上げる心持にて兩足先及兩手に力を罩め爪先を左へ

大内股投圖

此の大内股投は骨と分隨に故事に共方に成に手は上はてし意注に古稽共成しべるへ加を意注しべるすに様る掛てつ向に手上らかいくにり

柔術大内股投圖解



斜たがひに向むかけると同時どうじに我前下わがまへしたへ投倒なげたふすなり敵は仰向あしむかひに倒るゝなり

試合及稽古の時は負けたる者は疊に手を打ちて負を示すべし投
げたる者は直に眞之位第二圖の姿勢となるべし。共に倒るゝ時
は双方身體を打附けて痛を感ずることあり故に注意すべし。

柔術内股投圖解

双方大亂に組打つ内左手を敵の右袖下なり八つ口を捕へ右手は
敵の右首際の襟を捕へ兩手に力を罩めて我が體の左斜に引き附
て左足を後へ一步引と同時に敵の兩足の中心の處へ右足を差込
みて敵の左足を持ち上る時は必ず腰挫けるより此の機を外さず
右足を點線の如くに高く持ち上げ敵を左へ腰を据ゑて廻はし投
げに倒すなり。
兩手と右足の業なれば腰弱くて敵上手なる時は己れが先に倒る

事あり。
此形は前の大内股と同じことでも前とは違足先をまげずになす

内股投圖

此の形の如く成にきとる敵の腰を挫く第
一は時上持てれ入を力に先足右が我てしと一
りなのもる倒へ横り左が我は敵も又

柔術内股投圖解



此の方は足先に力を入れて膝の處より持上げて倒すなり。

柔術外股拂圖解

外股拂圖

此處は敵を抱込で既に點線に如くして左股裏を敵は處の此
強く拂ふ時三拍子揃へて力を入る肝要の處なり
圖解を參照し必ず點線に心を留し

柔術外股拂圖解



此の圖は双方共に八つ口を取り相撲の様に成りし時腰を少しく後へ相手を抱込み其體を持ち上ぐる心持にて爲せば相手も腰を引くなり其時又後へ我身を引くと同時に左足の爪先に力を單めて左へ向け右足は相手の右外股を強く掃ふと同時に右手にて相手の左襟を持つて押し付け左手は相手の右袖を強く我が腰の邊りまで引くなり。點線と左り足先に注目せよ。既に我左へ投るなり此形を講道館にては浮腰と云ふ。

柔術膝挫圖解

此手は前と同じなるが相手より我を押し附け来るを二三歩退きながら相手の右足に重みがかけてたる時我左足の土不踏の處にて！圖の如くし相手の膝頭に押し當て同時に右手は押し上げ左手は強く我腰の邊へ引き落すの三拍子揃へて行ふなり。講道館にては是れを膝車と云ふ。

柔術膝挫圖解

此の拂足と云ふは左手を圖の如くに相手の右袖口の上を取り右手を押し延して敵の右襟際を攪て相手を半身に反身にて斜に爲し我體に引附んとすれば相手も右手にて何か業を掛けんと爲すに
 より其れに先じて左足を成るべく左へ爪先を向け右足裏にて
 圖の如くにして相手の兩膝の裏の處を強く掃ふなり。
 此の形は眞揚流にては股拂と云ひ又裏股とも云ふ。
 稽古の時は投げては左右の袖一ヶ所の袖口を攪みて手を放さぬ
 様に爲すべし。

柔術拂足圖解

柔術拂足圖解

圖と本文を能く参照すべし。



膝朽木圖

敵の右膝裏の處に折るかのみへ我へ左足が先掛り
 既に三拍子に投て倒す處の圖なり

柔術膝控圖解



右跳腰圖

右膝ノ業故腰の調子に敵ては
自由の由に投げられる者なり



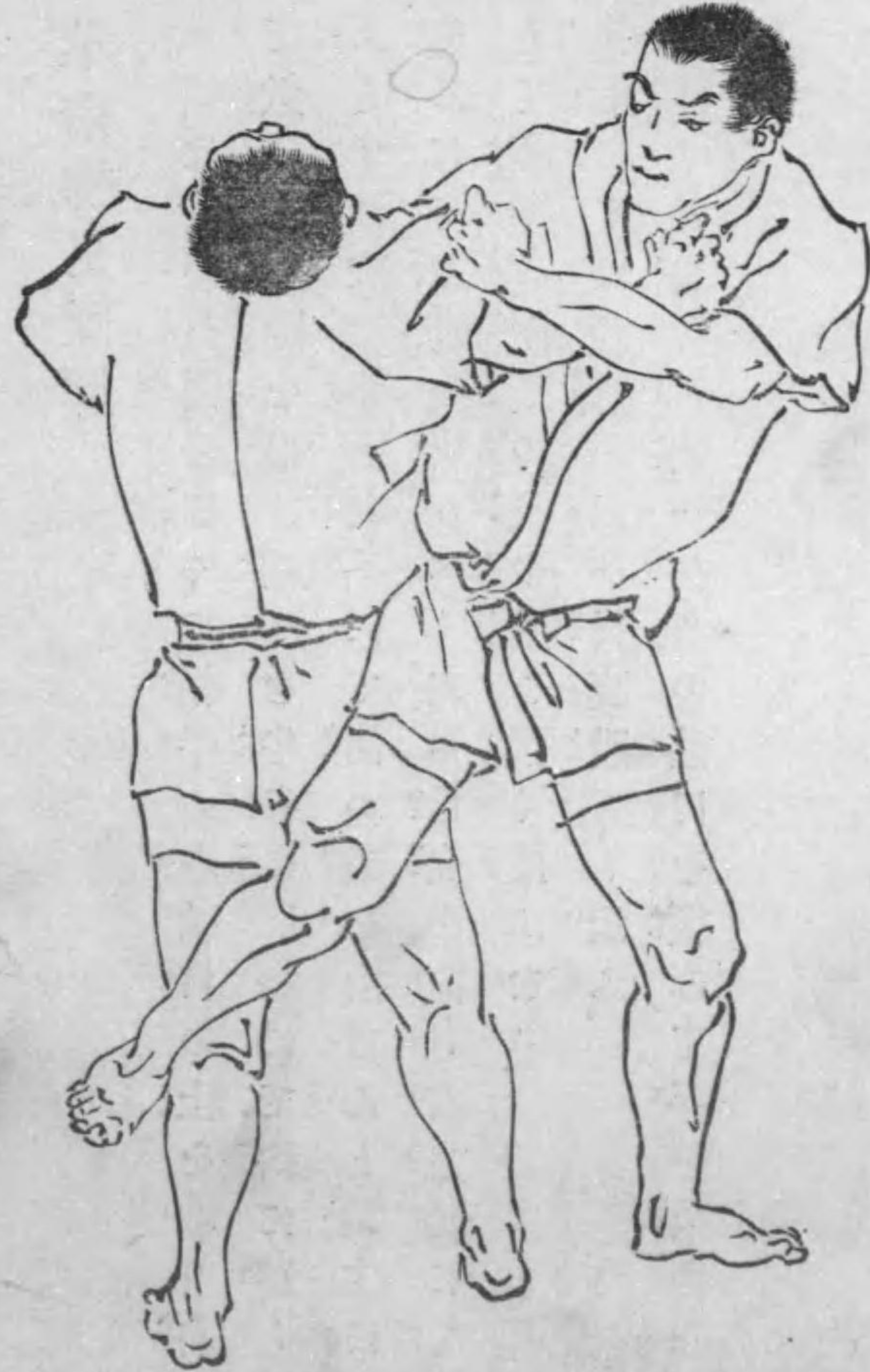
左手は相手の右袖下の處を取り右足の膝を曲げて少しく腰を下

柔術右跳腰の圖解

跳腰と云ふは相手の後の帯を右手にて掴み即ち抱き込む様にし

拂ひ足圖

此の圖は我の左脇腹に右の手を引附に足に押當ては
處るに時同左の手は先足右し延押を右の手引附に腹脇左が我
しべるな圖ふ拂を裏膝兩てめ込を力



柔術右跳腰の圖解

柔術拂足圖解

柔術左跳腰の圖解
一〇六
げ我膝頭にて相手の兩膝の上を摺り上げる同時に左手を強く引
て相手を我が左前方へ落すなり。圖の如く左足先に力を罩めて
爪先を左斜に向て術を行ふべし。

柔術左跳腰の圖解

凡て柔道の業は左右何れにても出來得るなり。亂捕には尙更に
て右に掛けて外れたる時は直に左に掛けるなり。
此の形は右手にて相手の左上襟を取り左手にて腰帶を攔み抱き
上る様になして同時に左膝を曲げて相手の臍下へ押當て相手を
我が右斜に引附けて我が曲りたる膝にて跳ね上ぐるなり。
右足先に力を罩て右前に倒さんと思ふときは右の方へ斜に右爪
先を向けて立つを定法とす。
相手は美事に我が前に倒るゝものなり。是を左膝落とも云ふ。
此手は近頃流行の手なるゆゑ下手者に試みるべし乙者も直に手

を打て仰向に倒るべし。

左跳腰圖

此の圖は左の掛り處の相りな四肢の
の工合を能く能く參照しべし



柔術行連の投第一圖解

此の形は入り亂れて戦ふうち隙を見て相手の襟首を左手にて攔

柔術行連の投第一圖解

圖二 第投の連行

打を手たは者乙處るたし倒に後背が我
りな圖るたれ倒て

同第二圖解



圖一 第投の連行

しべす照參く能を處るたり掛の手に者乙の此

柔術行連の投第一圖解



同第二圖解
むと同時に我は右膝を突き直に右手を以て相手の右股を下より
持上げ相手の體の崩るゝ機に乗じ攔みたる襟首を強く下に引く
なり。初心の内は投げたる相手の身體にて踵を打つ事あり故に
倒すと同時に立ち上るも差支なし直に眞之位第二の構になれ。

同第一圖解

左手にて我が左後へ引落し右手は相手の右股を押上ぐると同時
に我が左足の膝を越へて相手は仰向に背後に疊を打ちて倒るゝ
なり。是れは左右何れを行ふも可なり。
殺當流の形より出でたるものなり。
第一圖及第二圖迄の處をば挿畫を能く参照して業をおこのふべ
し。

柔術引込業圖解

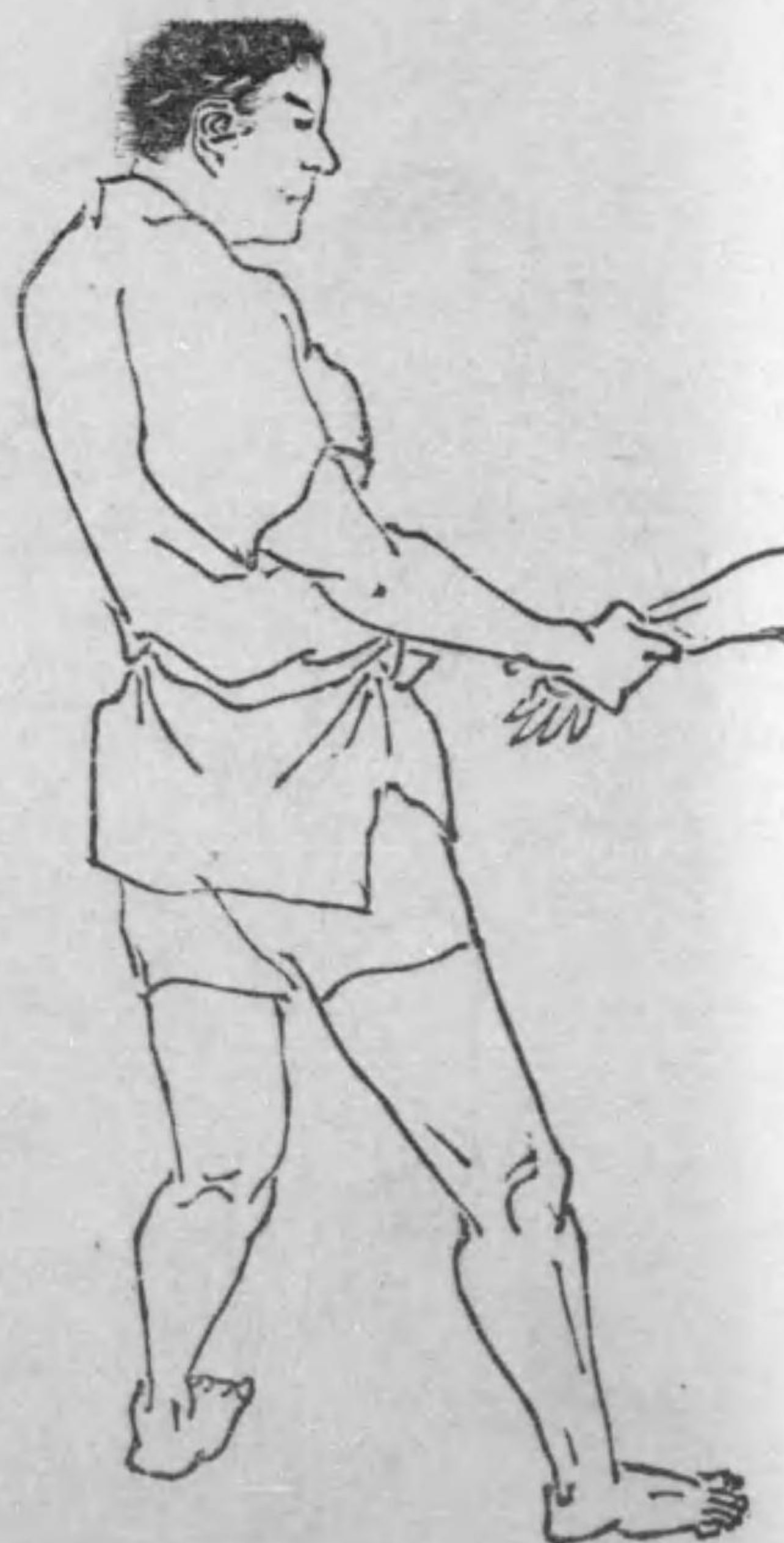
此の引込業と云ふは双方三尺餘りの距離を隔て氣合を計りて相
手の右手首を我れより先に敵を引攔み引込む時は身體の重みに
て右足を集まり中心傾きて倒れかゝるなり。
又圖の如くなりし時透落なり背負投なり種々業は掛るなり。是
れを解かんとするには五指を揃へて爲し指の先に力を入れ(エイ)
と一聲斜に下すなり如何なる強力の者と雖も解けるものと知る
べし。
我も亦相手が解かんと爲す前に早く業を掛くるなり。
總じて武術は先ずれば人を制すと云ふ喩の通り心を靜に相手に
先んじて速に業を掛けるが肝要なり。

是は相手が我が胸倉を左手にて取るを我が右手を高く延して相
 手の腕を押下げて外れたる時に相手の左脇下へ右腕を指込みて
 相手の顎に五指を一圖の如くに掛け同時に左手を相手の左股を
 下より持ち上げ我が身體の右後へ開くと同時に(エイ)と掛聲と共に

柔術首投の圖解

柔術首投の圖解

甲者敵の首を引附けるに
 下腹と四肢に力を込めたるに



引込業圖

乙者は甲者に引かれ時堅く成らぬやうに
 すべりな故に業の者甲とるなくたか體身しべす



柔術引込業圖解

首投の圖
甲は右脇へ乙を廻し投す
乙は右掌で打て向倒し
りなす倒し



柔術首投の圖解

に投げ出すなり。
此の首投は淺山一傳流の名人故金子勝平先生得意の手なり。
圖にも記せし如く最初は對顔して居升が右腕を掛るとたんに此
姿勢になる此業は随分と美事な形なり。

柔術蹴落とし圖解

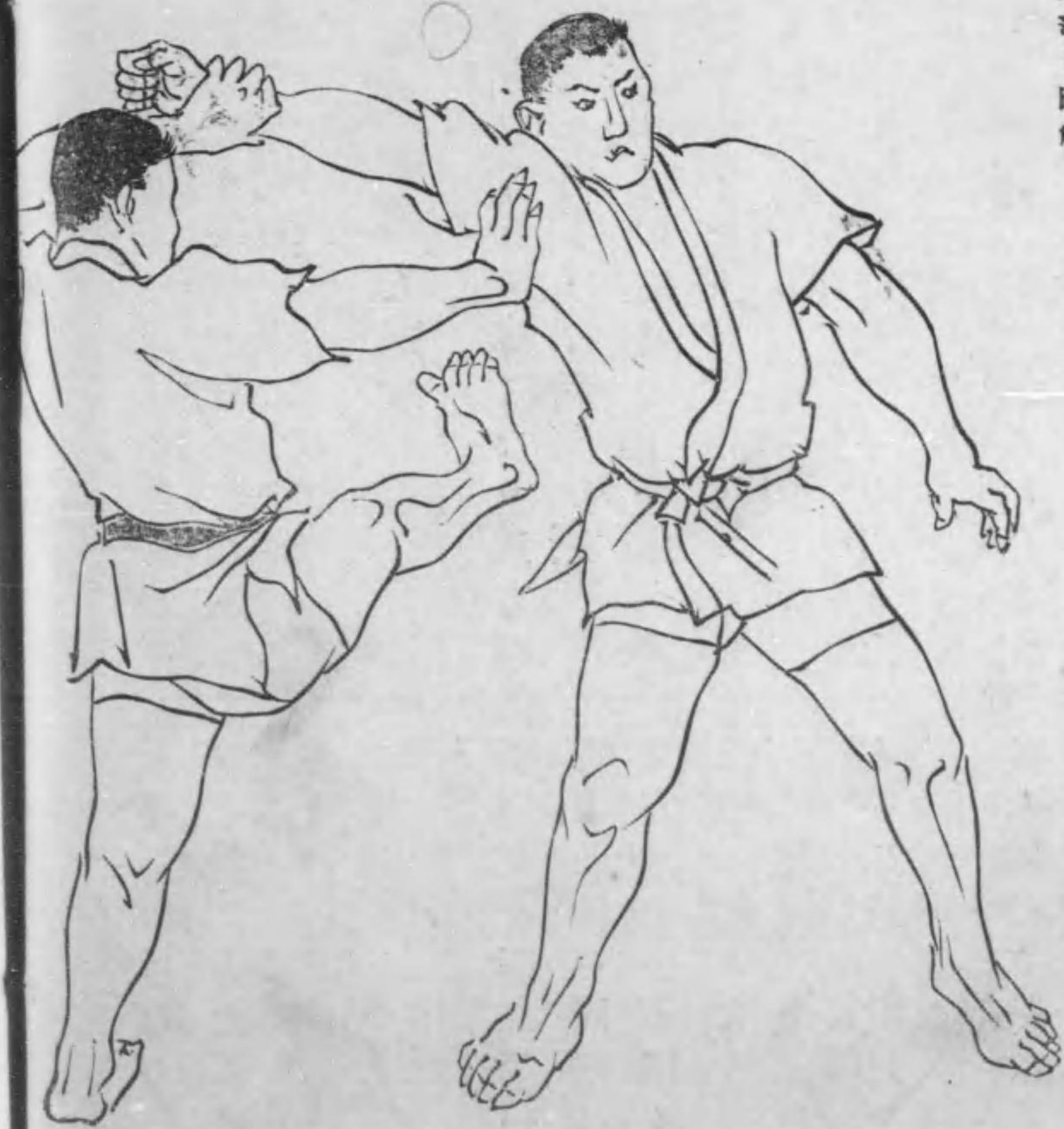
是れは前圖の引込業より續くなり双方距離約三尺を隔て第一眞
之位の構にて起り相手の右手首を左手にて握り我體を同時に魚
鱗へ引き右掌を相手の右乳の上の處へ押當て左足を一步深く踏
み出すと同時に右足を上げて相手の右股裏を強く拂ふなり。是
れを裏落としとも云ふ。
相手が仰向に倒れ掛る時は左手を引き上げ右手は押し右足を上
ぐると共に(エイ)と一聲投げ附けるなり。
甲者は圖の如くの形ちになる時は乙者が堅くなるほど敵は強く

柔術蹴落とし圖解

1749, 11.21

蹴落し圖

甲は既に乙の股を裏に力を入るに
甲は乙の股を裏に力を入るに
乙は甲の股を裏に力を入るに
甲は乙の股を裏に力を入るに



柔術蹴落し圖解

仰向に倒るべし。乙者も左掌を打て仰向に倒ると心得るべし。

柔術透き落し圖解

我が身體二尺斗り左斜に引くと同時に相手の左袖下を掴み居る
手を我が體へ引き附け右手にて相手の左肩口襟首際を取り手を
延ばして相手の體の崩れたるを見て腰を引きながら四肢先に力
を入れ左へ斜に投げるなり。
此の業は互角の者以上には骨の折れる業なり充分に修業して妙
處を自得すべし。
講道館にては浮落と云ふ。

柔術透き落し圖解

裏股拂圖



柔術裏股拂圖解

互に業を戦はし居る内相手の身體を斜に崩して我左爪先を左へ

柔術裏股拂圖解

二九



柔術透き落し圖解

二八

透き落し圖
甲乙者共に此の形は充分に能く掛りますから自得すべし

横車圖

此の方圖は寫生の内ににも取つてあつてから
圖の處をば能く參照しべし

柔術横車圖解



柔術横車圖解
向けるると同時に左手に掴みたる相手の右袖を下に引附け相手の左襟を取りたる腕を押延ばし同時に相手の太股裏の處を我右脛にて爪先に力を罩めて掃ふべし。
相手は我左前方へ仰向に倒るゝなり。講道館にては大外落と云ふ少し違ひあるも大抵同じなり。

柔術横車圖解

此の圖を初めに能く見て取組の樣を會得すべし。
双方數度を戦はし機を見て相手を三四歩後方へ引附け相手の引かれ來るに附入りて直に左手にて掴みたるハツ口を我が左腰の邊へ引き附け右手に相手の左襟首際を持ち上敵の體を斜に崩すと同時に左足の土不踏の處にて相手の右足横を(エイ)と掛聲と共に拂ふて我が左隅の處へ投倒すなり。腰を捻る時少し右へ爪先を向けると業が綺麗見事なるゆへなり。

矢倉落第二圖

甲者我前乙者の躰を落投乙者は左手を打て抑向
に倒れたる圖

柔術矢倉落第一圖解



柔術矢倉落第一圖解

此の方の寫生の内にも實に能くでき
て参照すべし

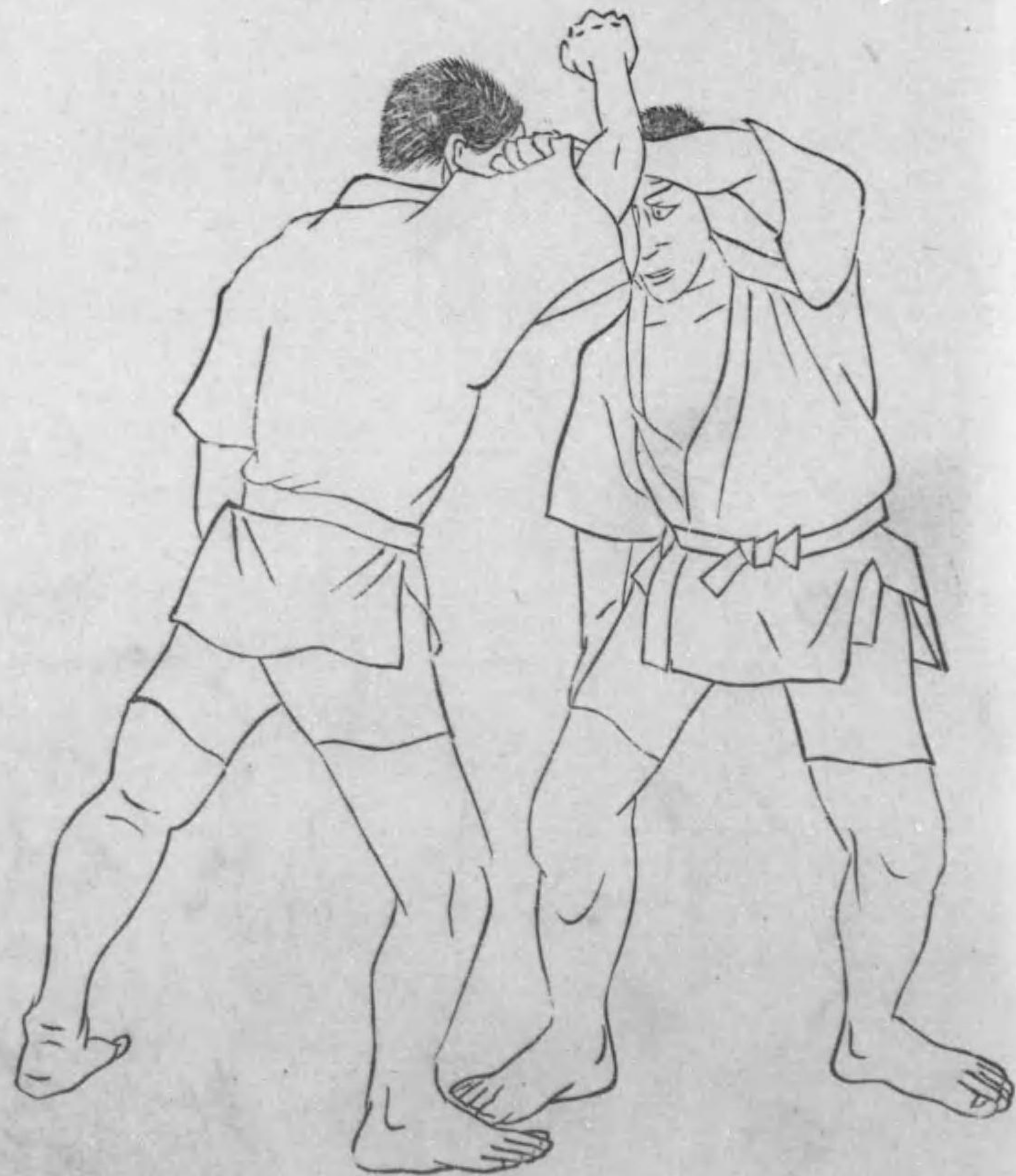


柔術矢倉落第一圖解
此の横車と云は随分諸流にても必ず有手なれば掛方をばなるだ
けきれいなすべし敵の體の崩し方が肝要であり四肢の業の内
にも他流で多く用ふる手は成だけきれいにするを妙と云べし。

柔術背負投第一圖解

背負投第一圖

甲は者乙よ打込で腕たきをば次圖の如くに直にるに



柔術背負投第一圖解

同第一圖解

此の形は最初に行ふものなり。双方相手の様子を見計り第一圖の如く我が左足を後方へ三尺餘引きて膝を突き爪先を立て右膝を附るなり。右手は一旦引附て直に左手に押し上ると共に相手の足を我が足にて妨げ其體の崩れたる處を左手にて引落すなり。

此圖は我が前へ引落したる處を示すなり。相手は左手を打つて倒るゝなり。總て背負投、股投、衣被等の業にて相手を投げて我身は眞之位第一圖の如く構へて左右の袖なり襟なりを片手丈は持ち居る事を失念すべからず廣き道場に於て多人數稽古を爲す場合遠く投ぐると他の者に突き當る等の失態を生ずるなり。

同第三圖解

此處の二人も首の繪が上りすぎ居る故に
寫生の時の寫に困りし察せられたし



柔術背負投第一圖解

背負投第二圖

甲は乙の腕を上げて直に我が腕にめらるる
氣に我が前にへ倒すべし



柔術背負投一圖解

同第二圖解同第三圖解
相手が右足を一步踏み出すと同時に右拳を以て我頭を打つて來るを我が左腕を横一文字に構へて受け留め直に左手にて相手の右手首の處を攔みし第二圖の如く速に腰を下け攔みたる右手を持ち上げて相手の腹部の處へ我が背を當て第二圖に移る。

同第一圖解

右手は相手の二の腕を攔み兩手に力を入れ兩足は眞之位第二構へと爲し第三圖に至る。

同第二圖解

第二圖より引續き背負投になす姿勢なるも是は寫生が充分に取されず兩人の首が上りすぎて居るゆへに繪に首を上げると書つらきゆゑ此の第三圖は小書を能く讀み玉へかし。

此の圖は横面を見せたるなり。我は相手の右腕を被ぎ込むと同時に左足を左後方へ引いて我が股を覗く心持にて投ぐる時は相手は向へ遠く投げらるゝなり。

同第四圖解

此の投げたる圖に注意すべし。第三圖の如くに成ると同時に（エ）と一聲我右肩を透して腰及兩手先に力を入れ相手の腕を早く外すべし遅くては相手と共に倒れて怪我をする事あり注意すべし。

乙者は左手で打て軽く倒れる

同第四圖解



131

甲者は乙者を向へ抑むるに投げる
處の姿勢なり

背負投第四圖

同第四圖解

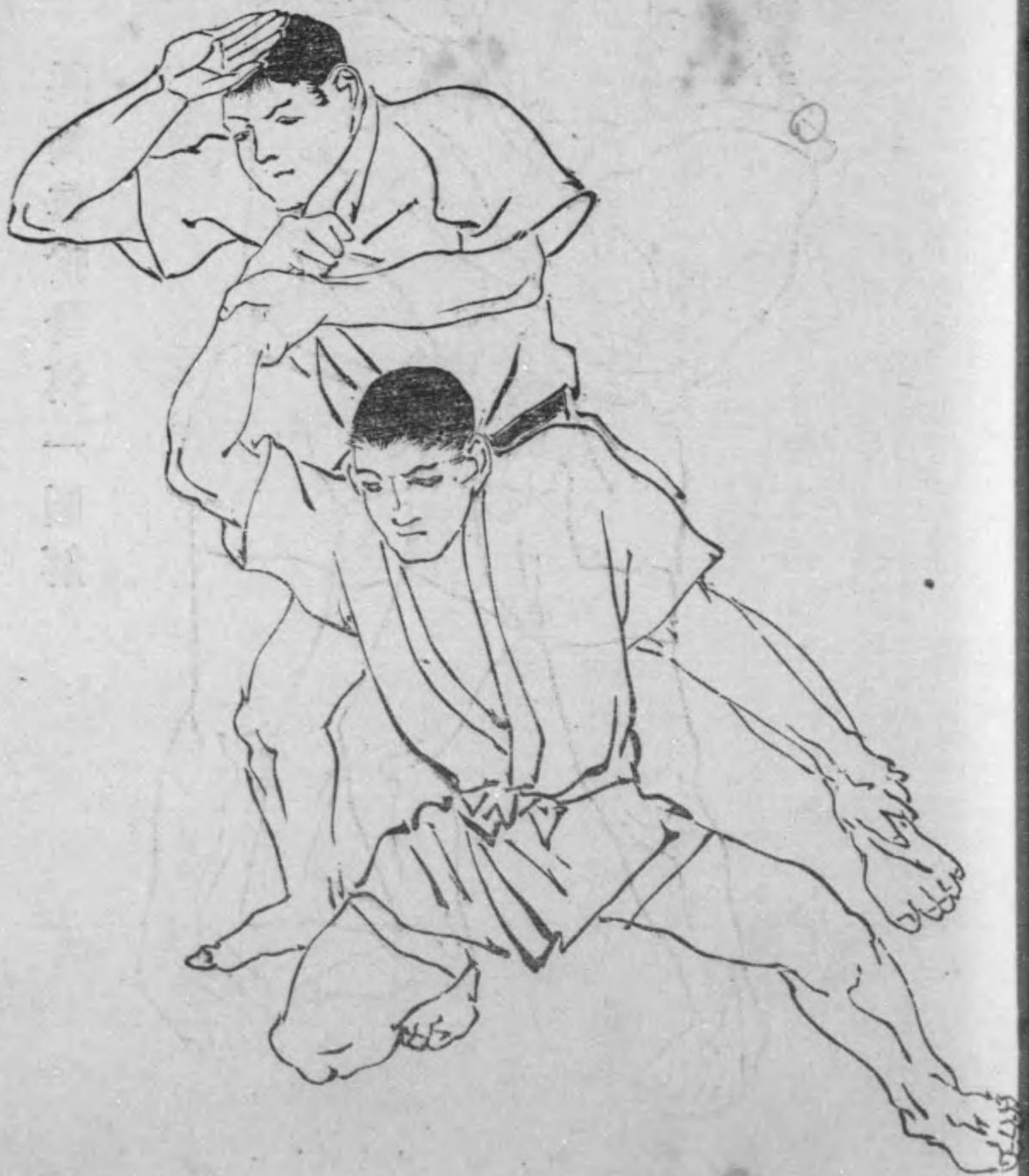


130

衣負投圖

此の流に諸は手の此
の如くし横に爲し右足を踏出して倒るべし。
この業は眞揚流の形にあり背負投と云ふ流派もあり。

柔術衣被投圖解



一三三

柔術衣被投圖解

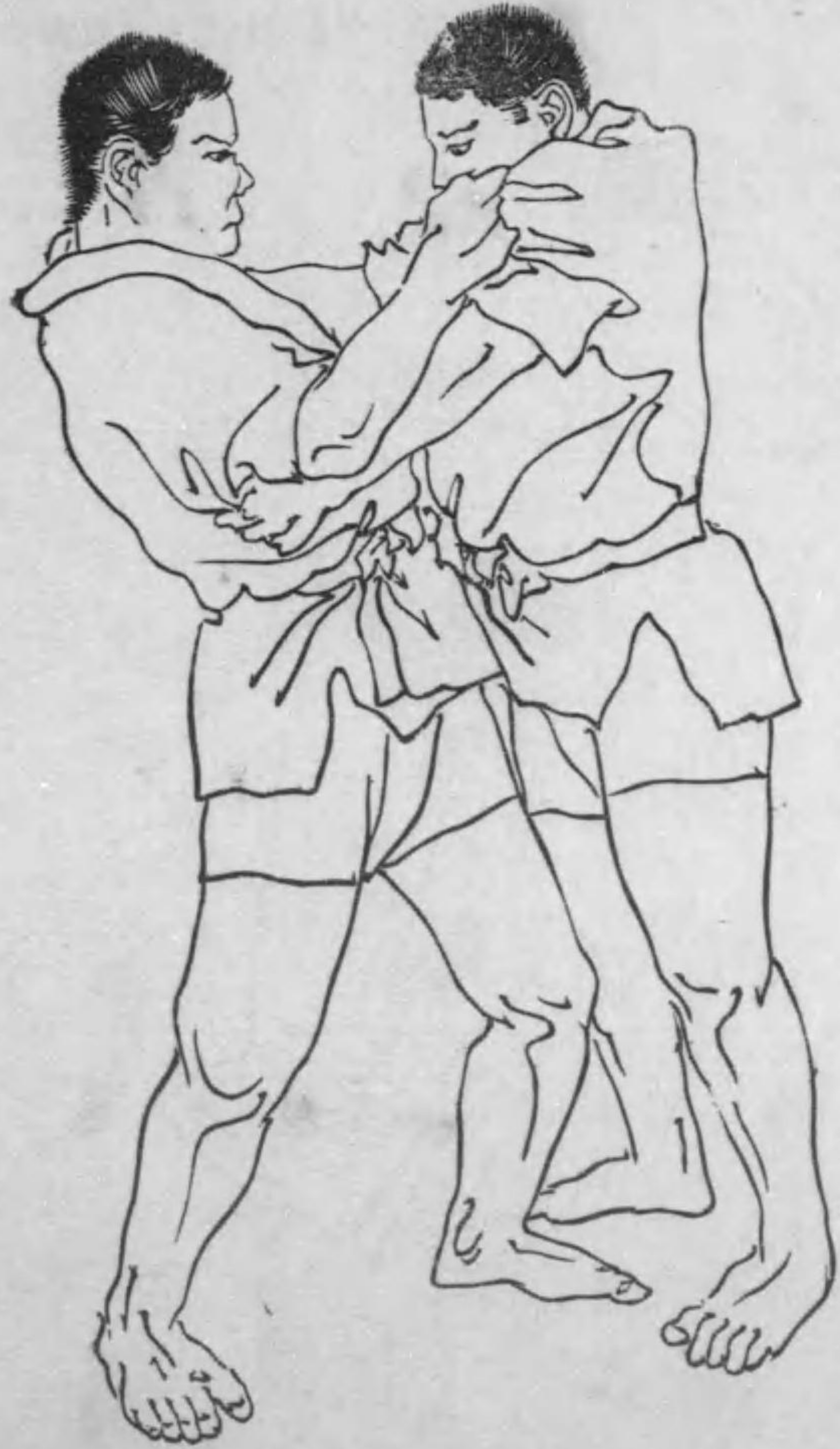
双方入り亂れて術の妙を戦はし居る内相手の両胸襟を右手にて
一所に掴み相手を向へ押附け其の腕の下を相手の両脇の下より
潜り同時に我が右膝を突き爪立ちて左足を左後方へ大きく開き
左手は相手の左足の向臍の處を持ち上げ我が股を覗く心持にて頭
を充分に下げ右は引落とす左手は跳るの三拍子にて(エイ)と一聲投
げ附くるなり。
相手も投げらるゝと知らば右手は掌を外にし己の額の處へ附圖
の如くし横に爲し右足を踏出して倒るべし。
此の業は眞揚流の形にあり背負投と云ふ流派もあり。
第二圖と唯足の位置が違ふだけなり。

矢倉落の

柔術衣被投圖解

一三三

眞捨身第一圖



柔術眞捨身第一圖解

此の形は相手の両襟を両手にて取り押し行けば相手は押しされじと押し返へす力を利用して左足を相手の両足前に留め右足先を相手の臍下に押當て直に臀を疊に附けて第二圖の姿勢に成るなり。

同第二圖解

両手を少し縮め左爪先に力を入れて両手は我が胸の處へ引付け右足は跳ね両手は相手の頭を我が胸の上へ引き落す心持にて(エ)と一聲三拍子揃へて次圖の姿に移る。

眞捨身第二圖

甲は既に乙を投すとなす此姿勢に
て右足を延す兩手は我が胸へ引
り附る處なり

眞捨身第二圖解



一三六

眞捨身第三圖

甲は既に乙を投すとなす此姿勢に
て右足を延す兩手は我が胸へ引
り附る處なり



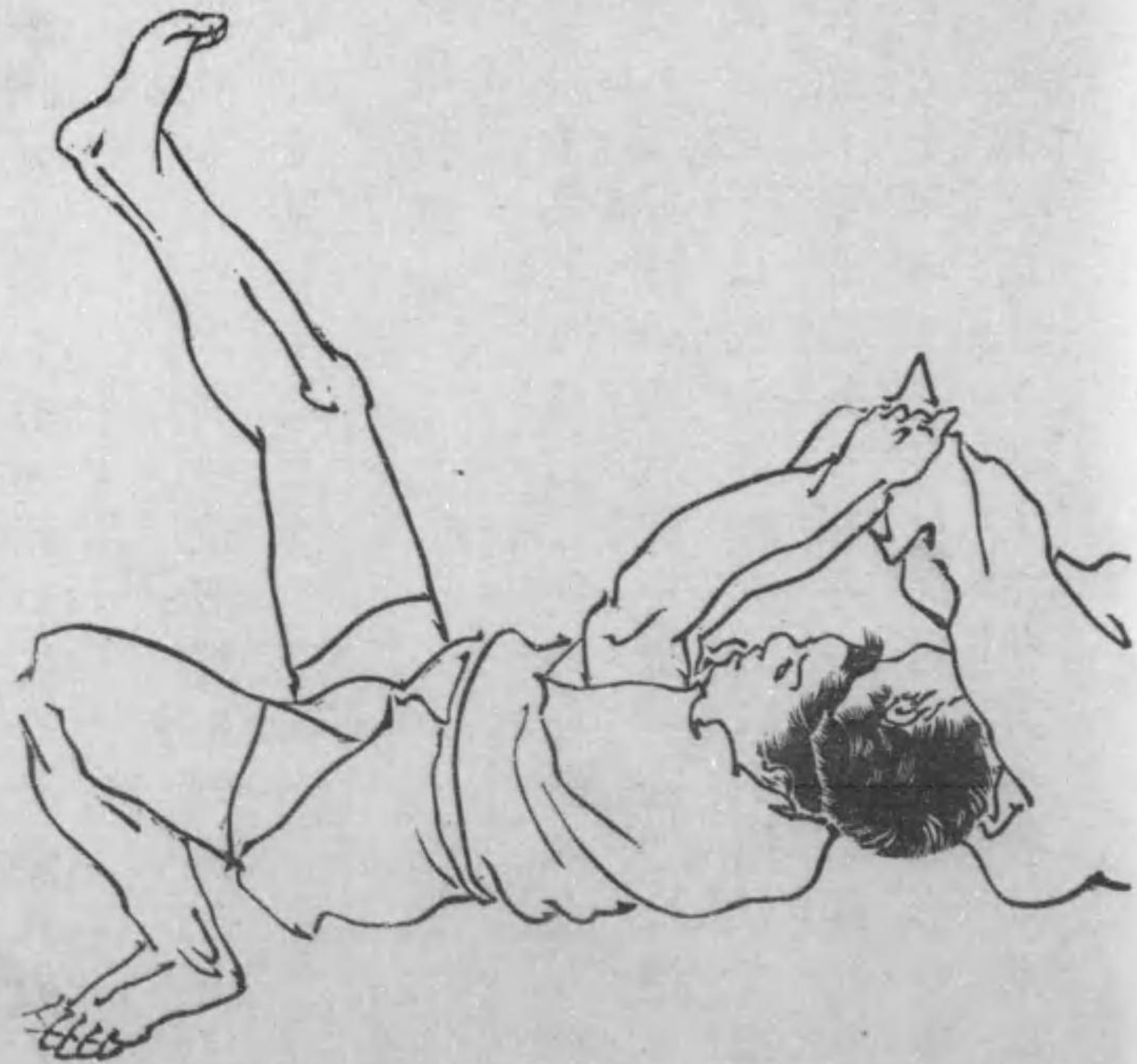
眞捨身第三圖

眞捨身第三圖解

一三七

眞捨身第四圖

起に直りよ足右てち放を手兩は者甲
るなにへ構の三第位之真て



此の手も一より四迄を連続して一手の形なり。次に注意

同第四圖解

同第四圖解

は時ゝる倒て都がすま居て折を足片は者乙
しべむこかを袋蔭てに足片



め跳ね飛ばしたる圖なり相手の身體は我が頭部の上にて廻轉し
足先圓く畫きながら背中を疊に附我が頭の前方向へ倒るゝなり。

同第四圖解

立身捨投圖

此の業は甲が者乙の肩首を打つ事なり
乙も早も者乙の事なり
美に實ばれな手
事な形手
あで形手
るあで形手
下手るあで形手
な氣ゝる倒く早も者乙りあ事す打を首肩の者乙とるやしべる倒て打を手り



柔術立捨身投圖解

柔術立捨身投圖解

我は臀を少し持ち上げる位に相手を跳ね飛ばすも両手は放さず
るを宜しとす。相手が両足を疊に打ち付けて全く倒れたる後
手を放して立ち起るなり。
業を掛けたるものと掛けられたる者の位置寫生の都合上反對と
なりしにより讀者其心にて見られたし。

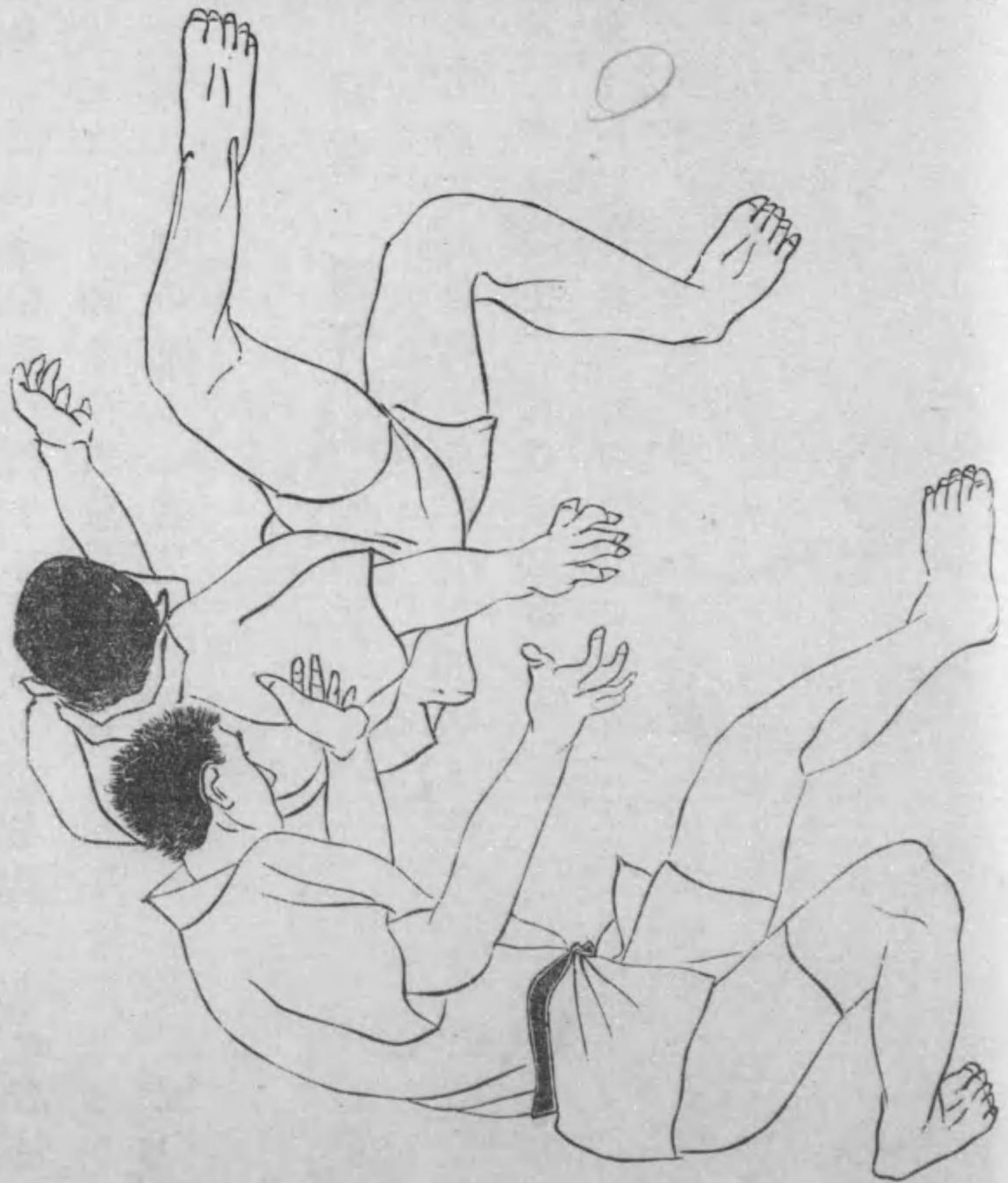
柔術立捨身投圖解

此の形は眞捨身とは違ひ立ちたる儘にて捨身を掛るなり相手を
隅へ押し附け行き右手にて相手の両胸襟を掴み左手は逆に前帯
を取り右手は押し延ばし左手は我が前へ充分に引付けて相手の
身體を反り身に崩して直に我が右足を相手の兩足の間に入れ左
足は其儘に爲し下腹に力を罩めて我身を反對に半月形の如く充
分に反りて相手の身體を我が頭上を越して後方へ投げ飛ばすな
り。

横捨身投第二圖

諸流に此の横捨身はなす處へ又圖畫にこもるま處に此に位で略す

同第二圖解



一四三

横捨身投第一圖

此の横捨身は實に寫生にしきく者故に掛口を記すなり



柔術横捨身投第一圖解
實地の場合には充分遠くへ投ぐるなれど稽古の時は充分注意して業を施さざれば怪我をするなり。

一四二

柔術蟹挾投圖解
蟹挾投圖

此の形は最も他派の掛りやすき手にて常に此の形に充てりな者きべす強勉を古稽に分充を形

柔術蟹挾投圖解



同第二圖解

此の横捨身と云ふは相手の上半身を崩して左脇へ我が右足を踏み出し又左足を以て相手の右膝を押し付けて相手を釣り込みながらに我より倒れる體の重みと右足を以て投げる事第二圖の如くなり。

相手の踏み出す右足を我が左足にて妨げ同時に反り返つて我身を後方へ捨て身體の力で投げるなり。此の業は最も四肢と腰業につき實に書畫にて云事眞につくしにくき者故に上手に附て教を受るか又教師に附て覺るべし諸流とも此形はある手なり。

俵返し圖

此は能く人のやる手なれども見所の
立時は注意すべし



柔術俵返圖解

柔術俵返圖解

柔術俵返圖解
 一四六
 是れは相手の右袖口の上を左手に握み左足を相手の臍下の處へ突き出すと相手は必ず足首を握るなり。然れば直に右手を疊に突き出して横に倒れ圖の如く右足先に力を入れて相手の膝裏に押し當てて兩足を挟み左手は左後方へ引附右足先に力を罩めて相手を後へ引落して投げ倒すなり。此の手は随分美事に投げ得るものと知るべし。
 眞揚流にては故吉田千春先生最も得意の業なり。

此の形は立捨身と反對にて相撲の大間貫と云ふ形になり相手が我が腰帯を持ち業を掛けんとする時我は又相手を上から抱き込みながらに下腹に力を入れ足は眞之位第二圖の構へになり我身體を半月形に反り返ると同時に(エイ)と掛聲して兩腕に力を入れ我が頭上より後方へ相手を抱上げ投げ附くるなり。

總じて頭を越して投げる時は必ず首を左右何れにか傾けること

背負落第二圖

甲は我右肩よ倒し投に直に腰之眞位第二の構へ
乙は左に掌を打て仰向に倒し



背負落第一圖

此の背負落は澤山あ追々讀者
の巧風をなすべし



柔術背負落第一圖解
なり投げらるゝ者も共に注意を要す。

柔術背負落第一圖解

同第二圖解
一五〇
是れは右袖を左手にて握み右手にて相手の左襟を取り相手を
左向ふ隅へ押附け兩手を持ち上ぐると同時に右より相手の腹の
處へ廻り込むと共に少し腰を下け圖の如く前へ跼むと同時に總
身に力を入れて(エイ)と掛け聲して背負落すなり。

同第一圖解

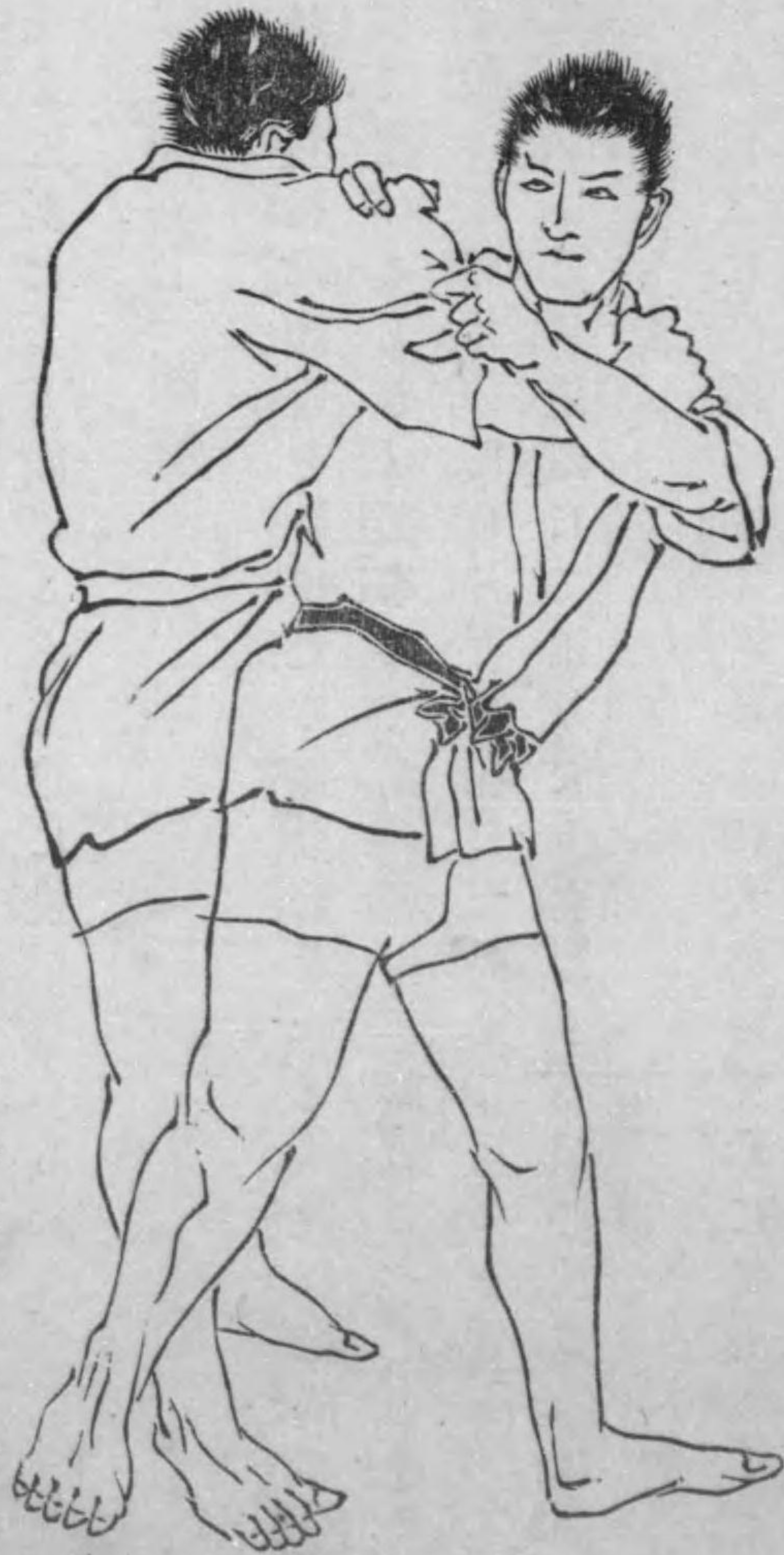
相手を我が前へ背負落して相手が再び立ち上り手向ひ來るを待
つ心得にて居るべし即ち眞之位第一圖の構へになり。
最も此の二圖は能く出來てある寫生に附圖を能く参照すべし

柔術山嵐投第一圖解

前のと稍同じ様なるも是は相手を前に引出して直に右手を以て

山嵐第一圖

甲者既敵に投んとする圖なり



相手の右肩口の稽古衣襟を握み左手は相手の右袖口を取り同時
に我が腰を少し下げて圖の如く姿右太股より足先に力を入れて

山嵐第二圖

敵を我の前に倒して左袖を口で居る處



同第二圖解

一五三

同第二圖解
相手の右太股に掛け足先より持ち上げて相手の身体を浮せ同時に我が肩に掛け背負投げる心にて我が前へ引落すなり。投げる時左爪先を左斜に少し向けると美事に投を見へるなり。

同第一圖解

此の手は背負投拂腰等を合併たる様な形なれども此れは兩手足の業にて投げるときは美事に常の稽古の時試るべし。此業は相手を投るも稽古の時は片手は袖口を持ち居るを宜しとす。此の山嵐と云ふは講道館にて附けたる名なり。揚心流眞揚流關口流にては山落と云ふ。最も此形を他流にて能くする者ゆるに大略の文章にてしめす事なり。圖を能く参照すべし。

一五二

手操り投第二圖

乙は倒る時左手を打てて倒るるにへるし



手操り投第一圖

敵をつかぎ上げれば處の圖



此の手操り投と云ふは前の背負落と略同様なり。是れも相手を釣

柔術手操り投第一圖解

同第二圖解
り出して背負投げるの心持なり我が體が相手の身體と二尺餘隔ち居る時に左手は相手の右袖口を取り右手は相手の左上襟を逆手に攔み圖の如に相手の腹を我背中に載せ兩手を引くと共に下腹四肢の先に力を入れ(エイ)と一聲我が前へ引き落すなり。

同第二圖解

相手を投ぐる時に左足爪先を左後へ向けて我が前へ相手を投げ直に起き上り打ち掛かり來るも差支なき即ち眞之位第二の構へにて下腹に力を罩めて構へ居るなり。

腰投第一圖

此圖は腰入と同様のなり

柔術腰投第一圖解

我が右腰を相手の腹部へ差入左手にて相手の右上袖を攔み右手



にて相手の左後方帯を攔みて押し相手の押返す力を利用し左足

柔術右入腰投第一圖解

我が腰の掛入たる處の圖



柔術右入腰投第一圖解

足先に力を入れて左手を引き相手を抱へてみたる圖なり我が前へ落とし投げるなり。相手も左手を打ちて倒るべし都而腰業は手を引く時に兩足の先に力を入る事なり腰の構へは眞之位第二圖の如き姿勢になるなり。

同第二圖解

腰を入て敵を抱上たる處の圖



同第二圖解
を相手の右足右方に置き右足を相手の兩足の間へ突き込むと同時に腰を跳ね上げ左手を強く引くなり此の三拍子を揃へて行へは美事に倒せるものなり。

右入腰投第二圖



柔術左入腰圖解

此の圖は前の二圖とは反對にて我は右手にて相手の左上袖を取

柔術左入腰圖解

此の入腰投と云ふは左手にて相手の右の袖下を掴み右手にて相手の左襟首の處を掴み兩足を揃へて相手を少し押し附け行き押返す力を借り直に腰を臍下に入れ跳ねると共に左手を引き右手は一旦押して引く心持にて(エイ)と一聲我が前に引き落すなり。

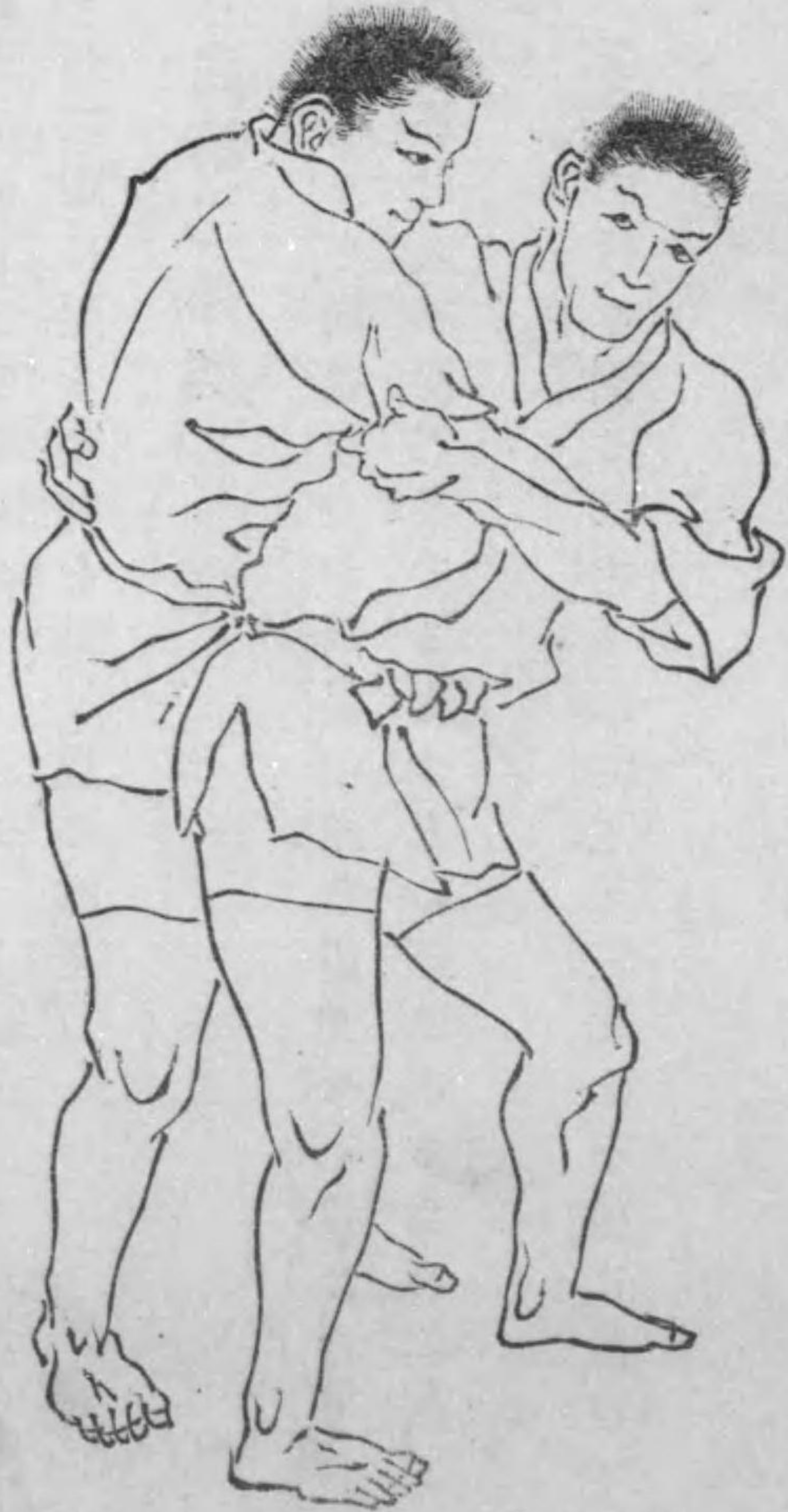
同第一圖解

相手を引き込んで我が腰を下げ跳ね上げて前へ投げ倒れかけの圖なり。兩足は爪先を八字形に踏み投げ終らば左足を約一尺餘り横に開きて構へを爲すと知るべし。又投げられたる者は左手を打ちて兩足先と共に倒るべし。最も此投形は都而同構へてに投倒す者と知るべし。

同第二圖解

大腰投第一圖

敵を抱込に身入にたりなる圖



柔術大腰投第一圖解

一六七

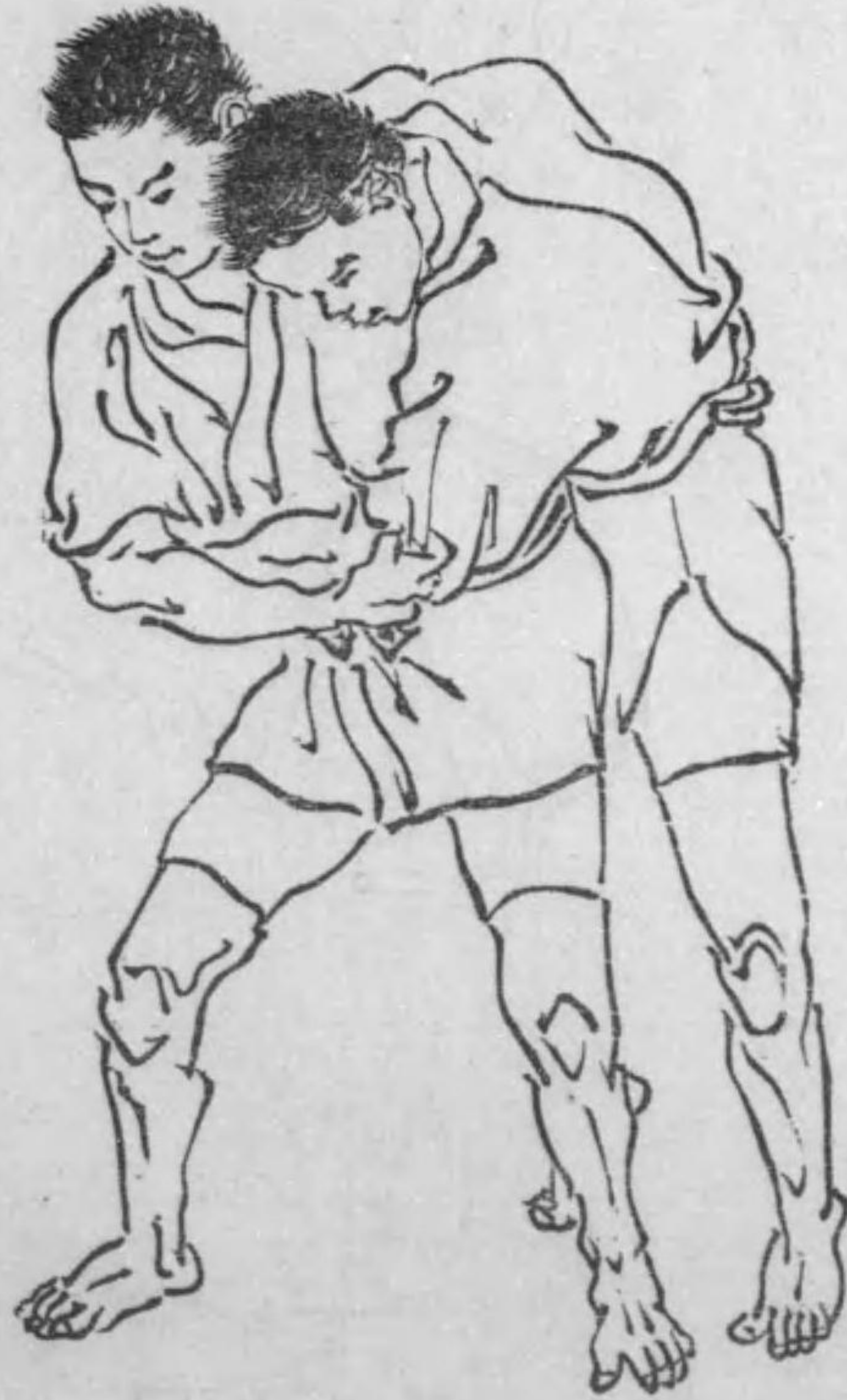
下て右の方へ入身に腰を持ち上る時は必ず相手の身體崩るゝ故

此の圖は前と又反對にて左手にて相手の右袖口を掴み腰を少し

柔術大腰投第一圖解

左入腰圖

左に抱込に投とすなる圖



柔術左入腰圖解

一六二

り左手は後帯を持ち相手の右より我が腰を深く差入れ相手を抱き込みて我前へ(エイ)と腰を跳ねると同時に右手を右腰の邊まで

引き付け前の第二圖の如くなして我が前へ引き落すなり相手は右手にて疊を打ち仰向に倒るゝなり。

同第二圖解
に、右手を敵の右腰の邊を抱込兩足先に力を罩めて引附くると同時に腰を跳上る時は第二圖の如くなるなり。
第一圖より第二圖に至る姿勢を能く見るべし。

同第二圖解

此の第二圖も前々と同様なるが兩足の踏み處が少し違ふなり。
入腰、腰投、大腰等は、大略同じ業なるも少しの違ひある爲め名稱も夫々違ふなり。
我が左前へ引落して投げ倒せば相手は兩足と左手とを疊に附けて仰向に倒るゝなり。

大腰投第二圖

腰を切上抱上て既に我が前に投げ落す處の圖



柔術右抱落投圖解

此の圖は相手の左脇の下へ右手を差入れ相手の左腕の自由を妨

柔術右抱落投圖解

右抱落投第一圖

柔術右抱落投圖解
我が左腕を圖の如くに高く相手の袖を掴むも宜腕にても場合に依り隨意とす。我が體は相手の腹部へ右脇腹を付けて左手は



相手の右の奥外袖を掴み相手を抱き上ぐる姿勢となり右腰を横に持ち上ぐると同時に左手を強く引き右手先に力を罩め次圖に移る。

右抱落投第二圖

乙は左手を打て早く倒れるしは手をはなれ知るすをちまやあに身自ばすさな



柔術左抱落第一圖解
前圖の姿勢の如く三拍子揃へて我が左前へ投げ倒すなり投げたれば直に眞之位第二圖の構へを爲し残心を爲すべし。

柔術左抱落第一圖解
左抱落第一圖

我れよ乙者を左抱に腰引を引持て上るなり



是れは前と反對にして我が左横腹を相手の腹部に附くると同時に左手を右脇の下へ差込んで腰の處を深く抱き込み右手をば逆に持ち兩足先に力を入れて少し腰を下げ直に腰を延ばしながら第二圖の姿勢になるなり。此の右の手は寫生の時寫し誤りなり。

同第一圖解

此の形は兩足を寄せて腰を延ばして立ち上ると同時に相手を抱き込みたる處の圖なり。我が腰を左へ捻ねりながら我が左後方へ投げ落すなり。相手は右手先を打ちて俯向に倒るゝなり。我は左足先に力を入れて左後へ開き残心を附成相手が起き上り再び掛り來るを待つ構を爲すべし。此の第二圖は抱き上げたる處にて是より直に後へ投げるなり。講道館にては此の第二圖を是より直に後へ投げるなり。講道館にては此の第二圖を

左抱り落し第三圖

抱込既左へ腰を延し落す處

同第三圖解



同第三圖解

左抱り落し第二圖

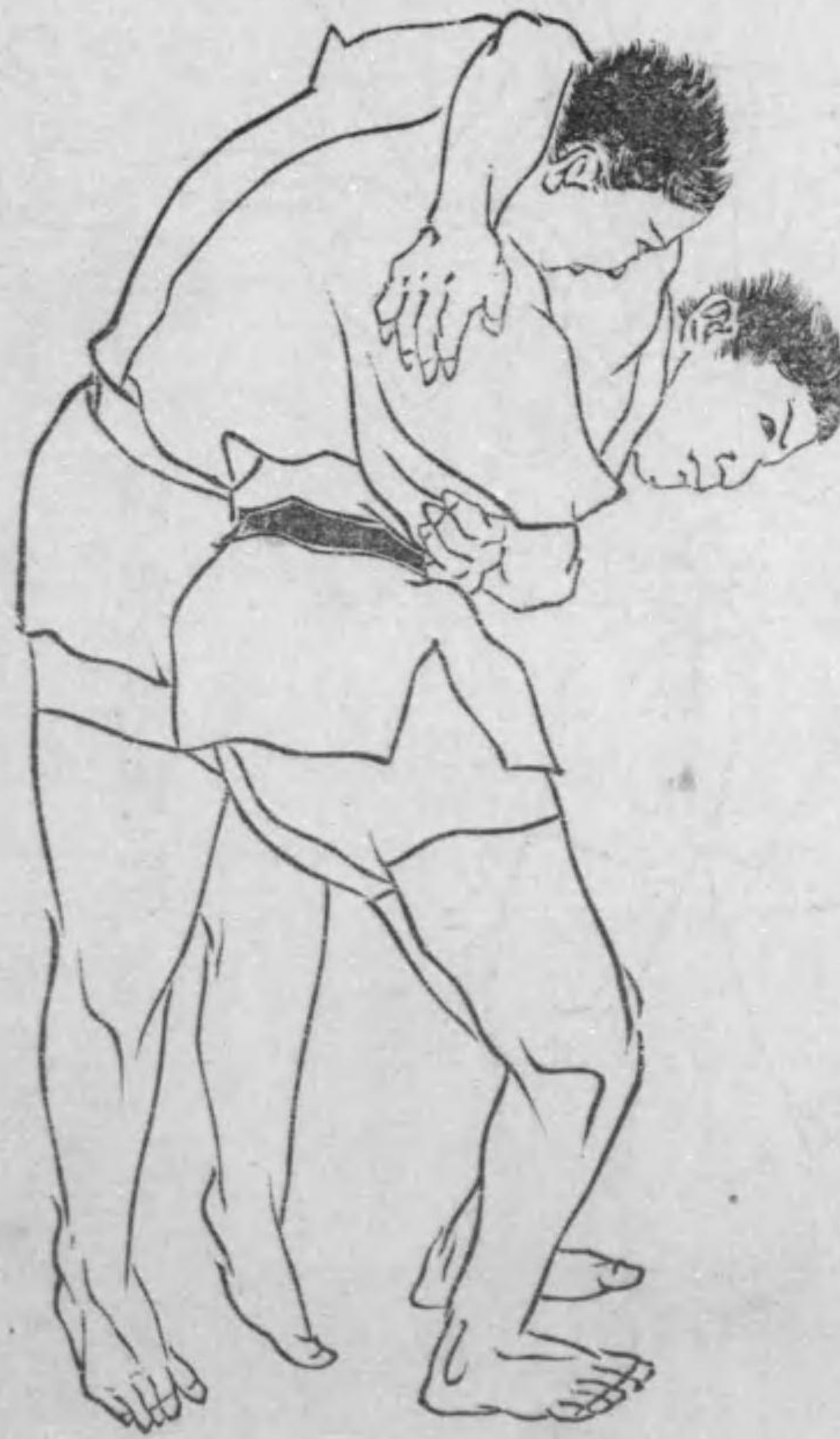
兩足踏揃て左手を敵に抱込地を離るる處の圖

同第二圖解



卷落の圖

此の形も諸流にて能くすく形なり



我が左手にて相手の右袖口を取りながら我が體にて相手を背負

ふ心持ちにて圖の如くに爲し右腕は相手の右腕に重ねて手首を
持ち直に臀を持ち上ると同時に我が右肩口より相手を両手を引
くと同時に巻き込みながら我が頭を左斜に背負投同様の心持に
て前へ倒すれば相手も我が體に巻き込まれて倒るゝなり。此の
形は講道館にては外巻込と云ふ是も左右出来るものなれば其場
合に應じて業を施すものと知るべし。

柔術卷込投圖解

此の卷込と云は前の卷落よりは實に美事に業が掛るなり只右手
を相手の左肩口より首を卷込み左手は下より相手の右奥袖を取
つて我が腰を相手の右下腹の處へ兩足を揃へて少しく腰を下
圖の如き姿勢に至れば直に臀を跳ね上ると同時に我が右肩より我
前へ兩手と腰との三柏子にて投げるなり相手も左手を打つて仰
向に倒るゝなり。

柔術卷込投圖解

此の圖は横面より見たる様に寫生したるなり畫師が苦心の存す
る處を察せられよ。

柔術卷落圖解

柔術卷込落圖解

卷込投圖

此は腕の持てて身體を浮たしる圖なり

柔術後腰圖解



柔術卷込投圖解
投げ終らば眞之位に爲る事は度々云ひたる如し。

後腰圖

柔術後腰圖解



此の手は倒る時強く頭を打事あり
未熟の内は早く手を打て倒るべし

移腰圖

此の圖は乙を抱上りて既に投んとす處



柔術移腰圖解

柔術移腰圖解

此の後腰と云ふは講道館にて附けたる名稱にして他流にては後
 捕と云ふ。雙方術を戦はし居る内隙を見て相手の背部に廻り直
 に背部より左脇の下に我が左手を差し入れ襟を取り右手は帯の
 前を掴み同時に相手を反身に爲し腰と兩足に力を入れて圖の如
 く敵を抱上げて直に左へ投ぐると見せて右隅へ投げ又は右へ投
 げると見せて左へ投げるなり直に俯向に倒る故に相手の上手な
 る時は投げらるゝも身體を地に付けず四肢に力を入れて四つ這
 ひになるなり。初心の内は投げられたれば右へなれば左手にて
 左へなれば右手にて疊を打ちて倒れるを宜しとす。

柔術移腰圖解